SHOGAKUKAN
GAME BOOK

ゼルダの伝説

The Legend of Zelda

WLC ワンダーライフスペシャル　監修／Nintendo　編集／小学館

SHOGAKUKAN
GAME BOOK
ゼルダの伝説
The Legend of Zelda

ゲームブック

WLC ワンダーライフスペシャル
小学館

SHOGAKUKAN
GAME
BOOK

ゼルダの伝説

The Legend of Zelda

WLC ワンダーライフスペシャル　監修／Nintendo　編集／小学館

The Legend of Zelda

HYRULE WORLD ATLAS DARK SIDE

Lava River
溶岩の川

ブラインドの家

Gannon,s Tower
ガノンの塔

岩棚

Death Mountain

Turtle rock
亀岩

竜

ガーゴイル像

爆弾屋

Thieve's Town
はぐれ者の村

Pyramid
ピラミッド

Swamp Palace
水のほこら

Dungeon in the Mire
沼のダンジョン

悪魔の沼

Misery Mire

Square in the Woods
森の広場

Ice Lake
氷の湖

北

※このマップは実際のスーパーファミコン版ゲームのマップとは異なります。

DUNGEON MAP

●水のほこら
B1F

●亀岩のダンジョン
1F
B1F

●村のダンジョン
B2F
B1F

●ガノンの塔
1F
2F
3F

北

●沼のダンジョン
B1F
B2F
B3F

※各ダンジョンのマップです。冒険を楽しむために、各部屋のつながりのみを示し、アイテムや敵などの位置は記していません。・は、主人公がそのフロアへ入ったときの最初の場所です。なお、このマップは、実際のスーパーファミコン版ゲームのダンジョンとは異なります。

行動記録シート

指示に従って、この「行動記録シート」に書き込みながら進んでください。
くわしい記入の方法は、9ページからの「遊び方」をお読みください。

①ハートチェック

水のほこら	♡	♡	♡					
村のダンジョン	♡	♡	♡	♡				
沼のダンジョン	♡	♡	♡	♡	♡			
亀岩のダンジョン	♡	♡	♡	♡	♡	♡		
ガノンの塔	♡	♡	♡	♡	♡	♡	♡	
ラストボス（LB）	♡	♡	♡	♡	♡	♡	♡	

「水のほこら」から順に使用してください。「マイナス1して」の指示が出たら♡を1つ減らし、「増やして」の場合は右端の空欄に書き込んでください。鉛筆で記入したほうが、何回も遊ぶときに便利です。

②アイテムリスト

マスターソード	○	パワーグラブ	
小さな盾	○	ファイアロッド	
マジカルミラー	○	オカリナ	
ボンバーメダル	○	アイスロッド	
コンパス	○	ソマリアの杖	
弓矢	○	銀の盾	
マジックハンマー		シェイクメダル	
フックショット		銀の矢	

主人公がアイテムを入手した場合、それぞれの指示に従ってアイテム名の右側の空欄に○印を書き込んでください。「銀の矢」以外は、主人公が手に入れていれば、必要な場合に何度でも使うことができます。なお、マスターソードから弓矢まで（あらかじめ○印が印刷されている）アイテムは、主人公がゲーム開始時から持っているもので、途中で入手することはありません。

③爆弾リスト

「1つ（2つ）チェックして」などの指示が出たら、その分だけ○印を左から順に書き込んでください。消す場合は、その上から×をつけてください。

④カギリスト

主人公が入手するカギには、「小さなカギ」と「ボスのカギ」があります。それぞれの指示に従って、チェックを入れてください。

●小さなカギ／カギのかかった扉を開く場合に使用します。一度使うとなくなってしまいます。

●ボスのカギ／各ダンジョンのボスの部屋の扉を開きます。使ってもなくなることはありません。

雫のカギ			
太陽のカギ		亀のカギ	
目玉のカギ		蝙蝠のカギ	

⑤ナンバーチェック

主人公の行動内容を確認するためのものです。指示された番号の下の空欄に、○印を記入してください。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
51	52	53	54	55	56				

⑥対LBバトル表

最後のボスとの対戦に使用します。ここで記入した数字が、主人公とラストボスとの戦いの命運を左右することになります。

A	B	C	D

※記入例と記入の方法

A	B	C	D
3	1	2	4

文中で指示が出たら、左の記入例のように、A、B、C、Dの各欄に、1から4までの数字を自由に書き込んでください。「書き換えOK」の指示が出る場合もあります。

SHOGAKUKAN
GAME
BOOK

ゼルダの伝説

The Legend of Zelda

「神々のトライフォース」より

小学館

【遊び方】

本編に入る前に必ずお読み下さい

これから始まるのは、リンクの冒険の物語。主人公はあなたです。リンクの運命は、すべてあなたの手にかかっています。選択を迫られたときのあなたの判断によっては、ときには主人公が困難な状況に追いこまれたりします。また、このゲームブックは、コンピュータゲームと違って途中でリセットはできません。主人公の行動は、初めから終わりまですべてあなた自身の手で記録されることになります。つまり、あなたは、それを記録する役割をも担うことになるのです。以下の〈ゲームの進め方〉や〈チェックの記入方法〉をしっかりと読み、冒険の途中、それぞれの項目で指示された場合には、必ず巻頭口絵の裏（4〜6ページ）にある「行動記録シート」にチェックを入れてください。

チェックを1つ間違えれば、あなたの分身でもあるリンクがとんでもない方向に行ってしまったり、あるいは、ストーリーがつながらなくなったりすることをお忘れなく……。

〈ゲームの進め方〉

リンクの冒険は、14ページのプロローグから始まります。プロローグの最後に「**⬇001へ**」という指示が出てきますので、そのとおり19ページのシーン「001」へと進みます。各シーンの文末には、このように、必ず次のシーンへ進むための指示があるのでそれに従ってください。

文末の指示は、必ずしも１つの方向にだけ進むようにはなっていません。シーン「００１」のように「水のほこらへ行く」か「はぐれ者の村へ行く」かの選択を迫られることもあります。また、その分岐の内容には、シーン「００１」のように好きなほうを選べる場合と、「行動記録シート」のチェックの有無を問われる場合の２種類があります。それぞれの指示に従ってください。

〈チェックの記入方法〉

ストーリーを読み進むうちに、リンクの状況や持ち物はどんどん変化していきます。アイテムを手に入れたり、必要なチェックが入った場合には、指示に従って巻頭の「行動記録シート」に記入をしてください。チェック項目は、全部で６種類。以下の説明を参照してください。

①ハートチェック

リンクの体力を判断するチェック表で、「水のほこら」から順にそれぞれのダンジョンの項目を使用します。ガノンの塔の後の最後の敵との戦いでは、「対ＬＢバトル」の項目を使うので注意してください。表の各項目にあらかじめ印刷されている♡は、そのダンジョンでの♡の初期値です。指示に従って消したり増やしたりすることになります。リンクはまた、ダンジョンを１つ攻略するごとに「ハートの器」を手に入れ、持てるハートの数が大きくなることになっています。表のハートの数があとから攻略するダンジョンの項目ほど大きく（右に長く）なっていることが、それを示しています。

リンクは敵の攻撃を受けた場合、体力を奪われることになります。ゲームの途中で「ハートをマイナス１して」という指示が出たら、体力値である♡を×などで消してください。また、ダンジョン内で「ハートのかけら」というアイテムを手に入れることがあります。これは、そのダンジョン内での

み使える体力の源＝ハートです。この場合、必ず「ハートを1つ増やして」という指示が出るので、チェック表の右端の空欄に♡を1つ書きこんでください。

最後にもうひとつ、「ハートをすべて回復させて」という指示が出ることがあります。この場合は、♡につけた×を消しゴムなどですべて消してください。ハートをすべて回復させるのはどんな状況のときか？　これは、あなた自身がゲームの中で確かめてください。ゲームの進め方や運が非常に悪い場合にかぎってですが、そんなシーンに遭遇することがあるかもしれません。

②アイテムリスト

リンクが入手するアイテムをチェックする表で、「銀の矢」を除いては必要なときに何度でも使うことができます。たとえば、「アイテムリストの『マジックハンマー』にチェックして」などの指示が出たら、そのアイテム名（この場合はマジックハンマー）の横の空欄に○印を記入してください。

なお、マスターソード、小さな盾、マジカルミラー、ボンバーメダル、コンパス、弓矢の6つのアイテムは、主人公リンクがゲームスタート時から持っているアイテムです。

③爆弾リスト

爆弾は、特定の壁や床を壊したり、特定のスイッチを切りかえたりと、ダンジョン攻略に必要な役割を持っています。入手すると「爆弾リストに1つ（2つ）チェックして」などの指示が出ますので、指示された数だけ、爆弾の表の空欄に左から順に○印を書きこんでください。

また、爆弾は1回使うとなくなります。この場合「爆弾リストのチェックを1つ消して」という指示が出ますので、爆弾の表に書きこんだ○印を×などで消してください。

④カギリスト

カギは、リンクがダンジョン内で入手する大切なアイテムで、カギのかかった扉を開く場合に使われます。カギには、一度使うとなくなってしまう「小さなカギ」と、ボスの潜む扉を開くことができる「ボスのカギ」があります。

a. 小さなカギ

入手すると「カギリストの『小さなカギ』を1つチェックして」といった指示が出ますので、小さなカギの表の空欄に左から順に○印を記入してください。また、「カギリストから『小さなカギ』を1つ消して」という指示が出たら、記入した○印を×などで消してください。

b. ボスのカギ

ボスのカギは各ダンジョンに1つずつあり、それぞれ名前がついています。「カギリストの『雫のカギ』にチェックして」などの指示が出た場合、そのカギの横の空欄に○印をつけてください。なお、ボスのカギは使ってもなくなることはありません。

⑤ナンバーチェック

ダンジョン内やフィールド上などで、リンクがどういう行動を起こしたかを確認するためのチェックです。「1にチェックして」などの指示が出たら、ナンバーチェック表の指示された数字の下にある空欄に○印をつけてください。

また、状況によってはチェックを消す必要が生じる場合があります。「1のチェックを消して」あるいは「1にチェックがあれば消して」などの指示が出たら、ナンバーチェック表の指示された数字の

下に書きこんである○印を×などで消してください。
ナンバーチェックはゲームを円滑に進め、ストーリーの筋を通すために欠かせないチェックですので、間違いのないように慎重にチェックしてください。

⑥対LBバトル表

リンクの最後の敵であるラストボス（Last Bossの頭文字をとってLB）との戦闘時に使用する対戦表で、リンクの運を左右するものです。「対LBバトル表のA～Dの欄に、1～4の数字を自由に書きこんで」という指示が出たら、記入例に従って数字を書きこんでください。
なお、この対戦表は、ときには書きかえることもできます。「対LBバトル表をここで書きかえてもOK」という指示が出たら、もとの数字を消しゴムなどで消し、新たに数字を書きこんでください。もちろん、書きかえをしたくない場合は、そのままでもかまいません。
なお、対LBバトル表の使い方は、行動記録シートにある記入例と説明文も参考にしてください。

※魔法力について

ゲーム中、魔法力という言葉が出てくる場合があります。魔法力は、ファイアロッド、アイスロッド、ソマリアの杖、ボンバーメダル、シェイクメダルの5つのアイテムを使用する際に消費する、リンクの魔法の力のことですが、特にチェックはしません。ただし、メダルを使った場合は持っている魔法力のほとんどを消費することになり、そのダンジョンを一度出るか、魔法力を回復させる薬を飲むかしないかぎりメダルは二度と使えません。メダルを使用するかどうかの選択を迫られた場合は、よく考えてください（魔法力は、ダンジョンを出ると自動的に回復する仕組みになっています）。

【プロローグ】

はるか昔、3体の神がこの世界を創造されたとき、その力の証として、黄金の聖三角体トライフォースを残された。3体の神の象徴である「勇気」「力」「知恵」を持つトライフォースは、それを受け継ぐにふさわしい者が現れるまで、人々の目に触れぬ聖地で眠っていた。

――天下る何処かに黄金の力あり。触れそめし者の望み神に届かん――

ハイラルの地に伝わるこの言葉に憧れた者たちは、われ先にと聖地を探し求めた。そして、その願いを叶えたのは、民を震えあがらせる盗賊の首領ガノンドロフであった。

トライフォースは、自らは善悪の判断をしない。ゆえにガノンドロフ――邪悪の王ガノンの悪しき願いは、そのままトライフォースによって実行されることとなった。

やがてガノンの邪気がハイラルに及び、不吉な出来事が次々と起こりはじめたとき、ハイラル王は7人の賢者と騎士団を呼び集め、悪の原因を封印するように命じた。ハイラルの民は神のお告げに従って邪悪なるものを倒す力を持つ退魔の剣マスターソードを作り、それを使いこなす勇者を探した。しかし、ガノンの邪気の勢いは勇者の出現を待たずに王宮まで迫り、壮絶な戦いが繰り広げられた。

多くの騎士たちの犠牲のうえに、賢者たちはようやく封印を成功させ、後に「封印戦争」と呼ばれるこの戦いは終わった。再びハイラルに平和が戻ったのである。しかし、封印はあくまでも封印。いつまた、解かれる日がくるともしれない。

ハイラル歴史書「封印戦争」の項より抜粋

Prologue

『リンク……リンクよ……、聞こえるか……?』
ボクの胸ポケットにあるマジカルミラーから、村の長老サハスラーラの声が聞こえてきたのは、ボクが闇の司祭アグニムを倒した数分後のことだった。
そのときボクは、見たこともない塔の上に、たった1人で立っていた。さっきまでいたハイラル王国の鮮やかな緑やすがすがしい青空のかわりに見えるのは、赤茶けた土と、どんよりと陰気な空。肺に入ってくる空気までねっとりとして、ひどく不快に思える。
「長老、長老ですね!? ここはいったいどこなんですか? なんでボクはこんなところに!?」
ボクは、マジカルミラーを手にとると、ありったけの力をこめて叫ぶ。すると再び、サハスラーラ長老の穏やかな声が耳に届いてきた。
『リンクよ……、そこは、もとは聖地と呼ばれていた世界じゃ……』
「聖地? このひどく濁った陰気な世界が聖地なんですか……?」
『……まぁ、とにかく聞くがよい。落ちつくのじゃ……』
長老はボクの心を鎮めるようにそう言うと、やがてこの世界について語りはじめた。
『そこは、かつての聖地。しかし、今では魔族のはびこる、いわば闇の世界じゃ。司祭は封印を解き、ハイラル城の入り口に、闇の世界とこちらがわを結ぶ通り道を開けてしまったようじゃ。このままでは、こちらの世界も闇に染まってしまう。救うには、黄金の力を取り戻すしかない……』
「黄金の力……伝説のトライフォース……それを、ボクが……?」
サハスラーラの言葉が、ボクの心に重くのしかかってきた。

ボクは、名前をリンクという。父さんや母さんを早くになくしたけれど、ハイラル城の聖騎士だったおじさんに育てられ、16になるこの歳まで、カカリコ村で平和に暮らしてきた。でも、ちょうど1ヵ月前のあの日、ゼルダ姫を救出するため城に向かったあのときから、不思議な運命に巻きこまれてしまった。ハイラル王の娘であり、7賢者の血を引くゼルダ姫は、伝説の魔王ガノンの志を継ぐとうわさされる闇の司祭アグニムの手によって父を殺され、アグニムによって乗っ取られた城に捕われていたのだ。

★

ボクより一足先に城へ向かったおじさんは、城の中心部へ続く回廊で兵士に倒され、息絶えてしまった。ボクは、おじさんの無念を晴らすため、必死でゼルダ姫を救出した。しかし、それで冒険が終わったわけではなかった。封印戦争のときに施された7賢者の封印を解こうとするアグニムは、すでに賢者の血を引く娘6人までを手中に収め、最後の1人であるゼルダ姫を、執拗に狙っていたのだ。

アグニムを倒すには、伝説の退魔の剣、マスターソードが必要だ――。

ゼルダ姫をかくまってくれた教会の神父様や、長老サハスラーラの導きにより、ボクは村の北にある森の祭壇を探しだし、ついにマスターソードを入手した。しかし、報告のために教会へ戻ったボクを待っていたのは、襲撃をうけ、すでに息絶えた神父様の亡骸だけだったのだ。

ゼルダ姫が再びアグニムに捕えられたことを知ったボクは、その足で再度城に向かった。が、ひと足遅かった。祭壇に寝かされたゼルダ姫が、アグニムの邪悪な力によって消える瞬間を目撃したボクは、我を忘れて剣を振りかざし、やっとのことでアグニムを倒したつもりだった。ところが、アグニム

は最後の力を使って、ボクをこの闇の世界へと引きこんだのだ。

★

『……そうじゃよ、リンク。勇者であるおまえが、トライフォースを取り戻すのじゃ……』

しばらく間を置いていた長老サハスラーラが、再び語りかけてきた。

『ゼルダ姫を含め、7賢者の血を引く7人の娘たちは、皆、その闇の世界におる。まずは娘たちを助けるのじゃ。さすれば、必ず力になってくれよう。娘たちは、魔物の隠れ家に、幾人かに分けられて閉じこめられておるはずじゃ。最初は水のほこらへ向かうがよい。ハイリアの国でいえば、わしのおった水の神殿にあたる場所じゃ。よいか、そこは闇の世界で、こちらはいわば光、紙にたとえれば、裏と表。そう考えればおまえが今立っている場所はハイリア城、水のほこらは水の神殿というわけじゃ』

「わかりました長老。きっと7人の娘を助けだします」

ボクの言葉に、長老は満足したようだった。

『よいか、リンク。おまえに渡したそのマジカルミラーは、わしとの通信機という役割のほかに、いつでもこちら――光の世界に戻ってこられる力を持っておる。こちらの世界に戻ってきたかったら、それを掲げて願うのじゃ。安心して旅を続けるがよいぞ』

「はい。長老、きっと待っていてください！」

ボクはそう言うとマジカルミラーを再びポケットにしまい、大きく深呼吸をした。

↓001へ

001

あらためてあたりを見回したボクは、ここがピラミッドのような建物のてっぺんだと知った。ピラミッドの頂点を少しだけ切り落としたように平らな場所に、ボクは立っていたのだ。ここでマジカルミラーを掲げれば、ハイラル城のどこかへ出るだろう。でもボクは、戻るわけにはいかない。

「よし、行こう。ゼルダ姫……いや、みんな、待っててくれよ、きっと助けるから」

ボクはそうつぶやくと、目の前の階段を降りはじめた。

途中、階段脇の壁にヒビが入っていたのが気になって、1つだけ持っていた爆弾を使ってみたが、壊れるようすはない。

しかたなくピラミッドを降りきったボクは、ふもとに看板があるのを発見した。

「ええと……東が水のほこらで、西がはぐれ者の村。なるほど……」

闇の世界でのはぐれ者の村は、光の世界のカカリコ村の位置だ。とすれば、誰か情報を持っているような人がいるかもしれないが……。

●水のほこらへ行く……………………035へ
●はぐれ者の村へ行く…………………050へ

002

左のアグニムが放った魔法の球を、ボクはマスターソードで弾き返そうとした。が、不運にもそれは、幻の球で、なにごともなかったかのように剣を素通りして消える。その直後、本物のアグニムが放った赤い球がボクの足を強襲した!!

痛みのあまり、ボクは思わずうずくまる。

◆ハートをマイナス1して

●ハートの残量が0なら……………406へ　●ハートの残量が1以上あれば……………150へ

003

村の北側をうろついてみたが、そこは例の石造りの家があるだけだった。

『ねえ、リンク。ほかを探してみましょう……』

「そ、そうだね……」

クリスタルの中の娘たちに言われ、ボクは中央の広場まで戻る。

⬇271へ

004

殺気を感じたボクは、反射的に横へとジャンプした。その瞬間!!

ガラガラ……、ガシャ――――ン!!

さっきまでボクが立っていた場所に、ゲルドーガの放った雷が落ちる。

一瞬、息をのんだが、すぐに気をひきしめたボクは、剣を振るって残りの小目玉にアタック。地道な攻撃で、ようやくすべての小目玉を葬り去った。

⬇097へ

と、中からガイコツ型のモンスター、スタルフォスが3匹、ボクを目がけて突進してきた!! 素早く部屋の中を見回したボクは、部屋の北側にもう1つ部屋があることに気づく。
ここはスタルフォスを無視して、奥の部屋へ逃げこんだほうが得策か!?

●スタルフォスを無視する……066へ　●スタルフォスと戦う……039へ

006

ボクは、南の扉を開けて中へと入った。

◆45と46にチェックは?

●どちらにもない……138へ　●46にのみある……049へ

●両方ともある……093へ

007

「あれ? この村からだと、沼のダンジョンよりも亀岩のほうが近いじゃないか?」
次のダンジョンへ行くため地図を確認していたボクは、意外な事実に気づいて声をあげた。地図によると沼のダンジョンは、はぐれ者の村の真南、悪魔の沼の中央にあるらしい。ただし、悪魔の沼と村の間は高い崖で隔てられているため、村の南側から一旦東へまわり、崖を迂回して入る必要が出てくる。対する亀岩は、村の北にあるデスマウンテンの頂上付近にあり、山を登る手間こそかかれ、距離だけを

考えれば沼へ行くよりよほど近かった。
「……だったらさ、先に亀岩へゼルダ姫を救出しにいったほうがいいんじゃないかな？」
ボクがそう意見をすると、クリスタルに封じられた娘の1人が、心の中に直接話しかけてきた。
『……それはそうだけれど、ガノンの塔は、ほら、デスマウンテンの亀岩の近くにあるでしょう。だから、先に沼へ行って残りの2人を救出して、それから亀岩に向かったほうが効率がいいのよ』
たしかに、そう言われればそうだが……。

◎悪魔の沼へ行く……052へ
◎デスマウンテンへ行く……074へ

008

溝のこちら側にはツボがあるが、向こう側には何もない。つまり、溝の向こうに渡りたくても、フックショットを打ちこむものがない、というわけだ。
「ツボの中にも何もないし……、変な部屋」
あたりを探っても、やっぱり何もないので、しかたなくボクは部屋を後にした。

◆51にチェックがなければチェックして……216へ

009

ボクは剣に力をためると、回転斬りでライクライクを倒した。と、その直後に、床のタイルがうねりをあげて、1枚、また1枚と持ち上がる。ダンジョントラップの床ビュンだ！　床ビュンは、しば

らく空中で停滞すると、急に勢いをつけて侵入者であるボクに体当たりしてくる。が、ボクは慌てずに部屋の角へ移動すると、盾で体をかばいつつ、床ビュンを1枚1枚叩き斬った。全部で10枚の床ビュンをクリアすると、ようやく部屋に静けさが戻る。

↓141へ

010

いくら考えてみても、石碑の意味はわからなかった。となると、残された道は1つだけ。さっき見た岩棚に降りてみることだ。

ボクはガノンの塔の前を通って尾根を戻ると、急な崖を岩棚目指して降りはじめた。

↓109へ

011

今だ!! ボクはビムがこっちを見ていないのを確認すると、北側の扉に向かってダッシュ!! そしてそのまま奥の部屋へ……は行けず、扉に思いきり正面衝突した。おまけにビムに発見され、手痛いビーム攻撃まで食らってしまう。

「ど……、どうして……え?」

フラフラしながらようやく立ち上がり、部屋の中をもう一度見回したボクは、北側の壁に小さなツボが置かれていることに気づく。な、なるほど……、そ～いうわけね……。

◆ハートをマイナス1して……………………143へ

012

ガノンがこちらにくる前に南側の2つの灯篭（とうろう）に火をつける。そうすれば、ガノンが南に到着した頃（ころ）、ボクはすでに北へ行っているはずだ。
そう考えたボクは、ファイアロッドを持って南から北へ、4つの灯篭（とうろう）すべてに火を灯（とも）した。計算はドンピシャリ！　明るくなった部屋の中、ガノンは南側で悔（くや）しそうに、北側にいるボクを睨（にら）んでいた。
「ガノン！　おまえの行動は計算ずみだ!!」
「ふはは！　まだまだ～っ!!」
ボクの言葉に、ガノンは素早く次の行動を起こした。

↓177へ

013

風の吹（ふ）くままにクルクルと回っていた風見鶏（かざみどり）が、突然大きくはばたいた。と、思う間もなく軸（じく）を離れた風見鶏（かざみどり）は、その大きな足でボクの肩（かた）をつかむと、空中に高く舞い上がる。
「い、いったい、なにを……!?」
コケコッコ～～～～～～ッ!!
飛ばないはずの鶏（とり）は、そう一声鳴くと、なんと動物の広場まで、ボクの体を一気に運んだ。
『驚かせたみたいだね……』
どこからともなく、あの鹿――少年の声が聞こえてきたのは、そのときだった。
『ボクは、あの鶏（にわとり）を使って空を巡（めぐ）っているときに、偶然、闇（やみ）の世界へのワープゾーンを見つけてしまっ

たんだ。で、興味半分で入りこんでしまい、戻れなくなったんだよ……。リンク、ボクはもう、オカリナを吹くことはできない。かわりにキミが、オカリナを吹いてくれよ。その音を聞けば、あの風見鶏は、どこへでも駆けつけて、キミを好きな所に運んでくれるはずさ』
「あの鶏が？　どんな所でも……？」
『ああ。ただ、高い山は無理だろうな……。それからもちろん、闇の世界にも来ることはできないと思うけれど……。じゃあリンク……、オカリナと、それから風見鶏を頼んだよ……』
少年の声は少しずつ小さくなり、やがて風に消えるように聞こえなくなった。
ボクは少年のために祈りを捧げると、闇の世界へ戻るためワープゾーンへ向かった。
「もう誰も、あの少年のような思いはさせない！　ボクは、ガノンをきっと倒す!!」
◆アイテムリストの『オカリナ』にチェックする。　21にチェックして
●22にチェックがあれば……………047へ　●22にチェックがなければ……………090へ

014

問題は、壁の穴をふさぐ、このとてつもなく大きな岩だが……。
●パワーグラブがあれば……………368へ　●パワーグラブがなければ……………108へ

015

ツボの中を探ってみると、そのうちの1つからハートのかけらが出てきた。手に入れたダンジョン内でのみ有効な体力アップアイテムだ。
ボクはさっそくハートのかけらを飲みくだす。
「さぁて、じゃ、今度はブロックを調べてみよう！」

◆ハートを1つ増やして……………………………………152へ

016

東側の扉の前に立つと、扉は、まるでボクの訪れを待っていたかのようにスッと開いた。

◆1と2のチェックは？

●どちらもない……………………005へ　●2にのみある……………………098へ

●両方ある……………………………………………………………159へ

017

鳥肌がたつほど涼しい通路を、東へ向かって進んでいくと、カギのかかった扉に行き当たった。

●小さなカギがあれば……………179へ　●小さなカギがなければ…………284へ

010

が、背に腹はかえられない！　ボクはツボを抱えあげると、狙いを定めてグーズに投げつけた。
グーズは、ツボの一撃の前に、呆気ないほど簡単に倒れる。
「これでよしっと……」
ボクは手をパンパンと払うと、水のほこらで手に入れたフックショットを取り出し、向こう側の宝箱に打ちこんで溝を渡った。宝箱に入っていたのは、なんと小さなカギ！
ところが、戻ろうとしてボクは、とんだことに気づいた。さっき、グーズにツボを投げたせいで、溝の向こう側に戻る手段がなくなってしまったのだ。
「そ、そうだった……。だから、ツボを投げちゃまずい気がしたんだ……。ええい、しかたない！」
腹をくくったボクは、思い切って溝の中に飛びこむ。長い落下の後に辿りついたのは、薄暗い地下道だった。地下道を歩ける方角に進んでいくと、やがてとてつもなく長い昇り階段があり、ようやく行きついた先は――!!
「わ！　びっくりした!!」「お、おまえ、なんだってこんなところから……」
あの２人組のいた村の西側の木の根っこのところで……。
「あははは……、ちょ、ちょっと道を見失ってね……。んじゃ、急ぐから!!」
ボクは２人組に愛想笑いをすると、そそくさと村のダンジョンへ戻っていった。

◆カギリストの『小さなカギ』を１つチェックして……………………………062へ

019

ボクは、必殺技の回転斬りを放とうと、剣に力をためた。が、力がまだたまりきらないうちに、ゲルドーガが放った雷を浴びてしまう!!

「うわあああああっ!!」

◆ハートをマイナス1して

●ハートの残量が0なら……………082へ　●ハートの残量が1以上あれば……………122へ

020

ボクは西の扉の奥を目指した。

◆3と4にチェックは?

●どちらもない……………106へ　●4にのみある……………127へ

●両方ある……………181へ

021

すると、途中の壁面に、例のヒビが見えてきた。普通の爆弾では壊せなかったこのヒビの奥に、いったい、何があるというのか――?

ボクは爆弾屋でもらった大きな爆弾を取り出すと、壁のヒビにセットした。数秒後、とてつもない爆風の後に開いた穴の奥にいたのは――。

「あなたがリンク……勇者ですね、私はトライフォースの神々に祝福された女神の1人です」
「……はぁ……」
そこにいたのは、美しい衣をまとった1匹の豚だった。意表をついた展開に思わず目を見張るボクに、豚――いや女神様は語りかける。
「こんな姿をしているのは、ガノンに捕えられたから……。私はトライフォースを守るためにガノンに意見し、その怒りに触れて、この闇の世界に引きずりこまれてしまったのです……」
そう言うと豚――いや、豚は頭から消そう――女神様は、銀色に輝く1本の矢を差し出した。
「これは、銀の矢。闇の魔王ガノンにとどめをさせる、唯一の武器です」
「これが……？　たった1本で？」
「ええ。ガノンの体が水色に変色したとき、そのときが、この矢を射つチャンスです。いいですねリンク、狙いを定めて、しっかりと引くのですよ……」
ボクはコクリとうなずくと、女神様から銀の矢を受けとり、穴の外へと出た。

◆アイテムリストの『銀の矢』にチェックして

●56にチェックがあれば……………315へ
●56にチェックがなければ……………241へ

022

マジカルミラーを持っているボクにとって、光の世界へ戻ることは、いともたやすいことだった。
「鏡よ！　ボクを光の世界へと運んでくれ!!」

022

鹿のいた森の真ん中で、ボクはマジカルミラーを掲げて願った。と、たちまち周囲の景色が歪み、意識が一瞬薄れる。再び意識が回復したとき、ボクは光の世界の動物の広場に立っていた。足もとには、マジカルミラーの力で、闇の世界へ戻るための小さなワープゾーンが作られている。
『……心配しないで、リンク。それは、マジカルミラーの影響下にあるわたしたちにしか見えないし、使うこともできないわ』
「……それを聞いて安心したよ」
光の世界の、それも人が簡単に入れるこんな場所にワープゾーンなんかあったら、あの鹿になってしまった少年や、はぐれ者の村にいた2人組みたいな悲しい人たちが増えてしまう……。娘たちの言葉で、その心配はないと知ったボクは、ホッと息を吐いて広場の中を見回した。
「確か、花の種と一緒に埋めたって言ってたよな……。花が咲いている場所は……あ、あった!!」
ボクは広場の隅に一輪だけ咲いている可憐な白い花を見つけると、花の根を傷つけないように注意しながら、手で土を掘った。するとほどなく、小さな青いオカリナが出てくる。
「よし、これだ。……あとは、カカリコ村に行って、いつも酔いつぶれているおじいさんに……」
ボクはオカリナについた土を払うと、その足でカカリコ村へと急いだ。
いつも飲んだくれてるじいさん……とあの鹿が言ってた老人を、ボクはもちろん知っていた。酒場をやっているおじいさんで、息子さんが行方不明になってからは、毎日のようにお酒を飲んでいるのだと、おじさんが教えてくれた人だ。ボクの勘が正しければ、鹿になった少年は、きっとあの老人の息子のはずだ。あの気の毒なおじいさんの……。

⬇243へ

023

「う〜ん……、やめとこ……」
なんか、とんでもないことが起こりそうな気がし、ボクは右のレバーをあえて見ないようにして部屋を出た。そしてその足で、今度は南の扉へ向かう。

◆6にチェックして……174へ

024

そこで登場、マジックハンマー!!
ボクは、ハンマーをしっかりと握ると、まずは右側のブロックをベコッ、続いて左側もベコッ!!
これでOK。叩きつぶしたブロックの上を通って、ようやくダンジョンの奥へと進むことができた。

●3にチェックがあれば……165へ
●3にチェックがなければ……137へ

025

ボクは一旦、小目玉たちから離れると、弓を引き絞って矢を放った。が、やはり思ったとおり、小目玉たちの動きは速く、矢の攻撃はいとも簡単にかわされてしまう。そればかりか、大きな孤を描いて飛んできた1匹の小目玉が、ボクに再び体当たりをかました。
「うぐっ……!!」
一瞬ふらついた体を立て直し、ボクは剣での攻撃に切りかえる。

◆ハートをマイナス1して……………………………………091へ

026

扉の奥の部屋には、宝箱が1つ、ポツンと置かれていた。その中に入っていたのは——。
「やった！　パワーグラブだ!!」
装備すると、どんなに重い岩でも持ち上げることができるというグラブをさっそく両手にはめたボクは、そのまま部屋の東側にあった扉から外へ出る。と、そこは、ダンジョンの入り口の部屋だった。
つまり、階段のある入り口側からでは開かなかった西側の扉が、今ボクの出てきた扉ってわけだ。
「なるほどねぇ……、よくできてるなぁ、このダンジョン」
◆アイテムリストの『パワーグラブ』にチェックして……………062へ

027

が、部屋の中にあるのは、すでに開けてある宝箱とツボのみ。なにしろ、この部屋ではすでに小さなカギを入手ずみなのだから。
「なんだってボク、この部屋に入ったんだろう……。疲れてるのかな……？」
⬇216へ

028

南の扉を開けて中へ入ると、いきなり3匹のゾルが襲いかかってきた。床に身を隠すことのできる、半液状のぷよぷよとしたモンスターだ。とはいえ、動きは恐ろしく鈍いので、逃げることもこれまた簡単。幸い、部屋の南側に、さらに奥へと続く扉がある。

●ゾルを倒す…………………123へ　**●無視して逃げる…………………189へ**

029

南へと足を向けると、突きあたりに宝箱を発見！　中から出てきたのは、カギのついた扉を開けることのできる小さなカギ!!

ボクはカギをポケットの中にしまうと、水路を戻ってさっきの角を西へ向かうことにした。

◆カギリストの『小さなカギ』を1つチェックして…………………180へ

030

堅いクイさえも叩きつぶす、頑丈なマジックハンマー。こいつで――!!

ゴオォォォォォォン!!

ボクは、マジックハンマーを、パメットの甲羅に振りおろした。パメットの甲羅はとてつもなく頑丈で、叩き割るには至らなかったが、反動で体が裏返しになる。つまり、甲羅のかわりに無防備な腹がむき出しになったというわけで……。

ボクはニマッと笑うと剣を構え、回転斬りで突撃！　ようやくパメットを退治した。すると、部屋の東側にあった扉が、音をたてて開く。
パメットに気をとられていて気づかなかったが、ここもAの部屋と同じように、奥へ行く扉があったというわけだ。

➡231へ

031

が、よく考えてみれば、こっちでやるべきことはすべてやったはずだった。
「え～っと、小さなカギを使って奥に進んだだろ、で、パワーグラブも手に入れたんだから……」
戻りましょう……。

➡062へ

032

「あっ、この模様！　もしかしたら……!!」
ボクは思いついて、さっき手に入れたばかりのシェイクメダルをポケットから取り出した。よく見るとメダルには模様が刻まれている。その模様が、そう、石碑の模様と、まったく同じだったのだ。
「わかったぞ!!」
ボクは石碑の前に立つと、シェイクメダルを空高く掲げてみる。と――!!
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……。
地鳴りとともに地震が起こり、亀岩全体を大きく揺るがした。やがて地震がおさまって、下へ降り

たボクの目に映ったのは、亀の頭にあたる部分にぽっかりと口を開いた穴!!
亀岩とシェイクメダルは、こんな形で関係していたのだ！

⬇332へ

033

しかし、これしきのことで邪悪の王が倒れるはずもなかった。ガノンは両足をふんばって体を支えると、持っていた杖を高く振り上げる。すると、炎の鳥たちが一斉にボクに向かってきた。
実体を持たない炎の鳥を相手に剣を振るっても意味はない。ここは逃げるか、盾でかわすか!?

●盾でかわす……………………333へ　**●走って逃げる**……………………183へ

034

ところが、宝箱を取り囲むように、赤いブロックの列が立ちはだかっていた!!
「やばい、どこかでクリスタルスイッチを切りかえなけりゃ!!」
ボクはCの扉を急いで出ると、ソマリアの杖で移動用ブロックを作り、本線へと戻った。

●本線を西へ行く……………………256へ　**●本線を東へ行く**……………………065へ

035

水のほこらは、この闇の世界の東側、光の世界でいえば水の神殿に位置する場所にひっそりと建っていた。

ボクの持ち物は、マジカルミラーのほかには、伝説の剣マスターソードと小さな盾に弓矢、それから攻撃魔法を放てるボンバーメダルと方角を見極めるコンパスだけ。この装備で、はたして本当に闇の魔物たちと戦えるのか不安はあったが、意を決して中へと足を踏み入れる。すると、目の前に細長い水路が続いていた。膝ぐらいの深さの水路は北に向かってまっすぐ伸びており、途中、東側と西側に扉があるのがわかる。

「さてと、まずはどっちへ進むべきかな……？」

ボクは、コンパスとにらめっこしながら、行く方向を考える。

●西側の扉に入る……………………106へ
●東側の扉に入る……………………016へ
●水路を北へ直進する………………060へ

036

『リンク……、あなたのおかげで魔物の手から逃れることができました。ありがとう……』

クリスタルに封じられた娘たちは、ボクの頭上を漂いながら、穏やかに語りかけてきた。

『……かつて、このハイラルの地に住んでいた、先住民族であるハイリアの民のことを知っているかしら？　彼らは不思議な力を操ることができたの。かの封印戦争で活躍した7賢者も、ハイリアの血を引いていたわ……』

『7賢者に封印されたガノンは、自分の力ではその封印を破れなかったの。そこで、司祭アグニムを使って賢者の血を引くわたしたちを集め、封印を破ったというわけ。用がすんだわたしたちは、クリスタ

ルに封じられ、魔物たちに与えられたわ……』
「そうだったのか……。でも、キミたちの力があれば、ガノンなど簡単に封じられたんじゃないか？
かつての賢者たちが、7人でヤツを封じたように……」
ボクがそう疑問を投げかけると、娘たちはとまどった後、再び話しはじめる。
『それができないの、リンク。長い年月の間に、ハイリアの民の力は薄れ、7賢者の血を引くわたしたちでさえも、ガノンを再び封印するほどの強い力はなくなっているの……』
『ただ、勇気を司るナイト――つまりあなたの力があれば、知恵を司る賢者の力も強まるはずよ。お城にできた光と闇をつなぐ道が完全に開くまで、もうあまり時間がないわ。急いで亀岩に向かい、最後の1人――ゼルダ姫を救出してあげて』
『勇者の行く道が、トライフォースへと導かれますように……』
2人の娘は、そう祈りを捧げると、ボクの体の中に入りこんだ。

↓171へ

037

「えっと、小さなカギは持ってるから……」
ボクはポケットからカギを取り出すと、部屋の西側にあるカギつきの扉を開けた。
扉の奥は、またも小さな部屋になっており、北側に扉がある。しかし、扉は開かず、そのかわり左右の壁に1つずつレバーがある。
「ふぅん……、どっちかのレバーを引けば、扉が開くんだな……、よぉし」

◆カギリストから『小さなカギ』を1つ消す。15にチェックして
●右のレバーを引く……163へ　●左のレバーを引く……081へ

038

逃げるが勝ち～っ！
ボクはクルリと踵を返すと、西へ伸びるもとの通路へと戻った。
⬇322へ

039

この闇の世界にきて最初の戦闘を、不戦敗なんて形で終わらせるのは情けない!! マスターソードの勇者としての名がすたるぜ!!
ボクは剣を構えると力をため、得意技の回転斬りでスタルフォスに突撃!! 迫りくる敵をバッサバッサとなぎたおし、数分後には決着をつけていた。
と、そのとき、思わぬことが起こった。最後のスタルフォスが崩れ落ちた瞬間、今までなにもなかった部屋の中央に突然、宝箱が姿を現わしたのだ。驚きつつも宝箱を開けると、中から出てきたのはマジックハンマーと呼ばれるシロモノ。これはクイやゼリー型のブロック、そのほかとてつもなく堅いものを叩きつぶすにはもってこいのアイテムだ。
「ラッキー！　戦って正解!!」
ボクはマジックハンマーを腰ひもにぶら下げると、北側にある奥の部屋へ向かい、そこで小さなカ

ギを発見。もう一度まわりを見回して何もないことを確認すると、扉から再び水路へ出た。

◆アイテムリストの『マジックハンマー』にチェック、カギリストの『小さなカギ』を1つチェックする。さらに、1と2にチェックして

●今度は水路を北へ向かう……………………060へ
●今度は西の扉に入る……………………020へ

040

鹿の話したことは気になったけれど、とにかく今は、娘たちを救出することが先決だ。

「オカリナは、あとでゆっくり探せばいい……、ガノンを倒した後に……、さぁ、沼へ急ごう」

●22にチェックがあれば……………………068へ
●22にチェックがなければ……………………090へ

041

ボクは退魔の剣マスターソードに力をためると、杖に守られていないガノンの左側を狙って回転斬りを放った。

ザシュ――――――ッ!!

ガノンの体を斬った手応えが、ボクの腕に伝わる。しかしガノンは、斬られた左腕をチラリと見ただけで、相変わらず余裕の笑みを見せていた。

「ふははは！　キサマの攻撃はそんなものか？　まだまだ!!」

ガノンは右手の杖の回転を、いっそう速めてくる。

⬇294へ

042

「でもボクには、小さなカギがあるんだもんね！」
ボクは、東側の部屋の奥で手に入れた小さなカギをポケットから取り出すと、カギ穴に差しこんだ。
カチャリと音をたてて扉が開くと同時に、小さなカギは役割を終えたように消えてなくなる。どうやら使い捨てらしい。
が、妙なことに感心している場合ではなかった。部屋の中央ではダンジョントラップのビムが、回転しながら周囲を監視中。侵入者を発見すると、容赦なくビームを発射するやっかいなヤツだ。
ボクはゴクリとつばを飲みこむと、ビムの目がこちらを向いていないのを確認して部屋の中を素早くチェック。北側の壁に扉があることを発見する。

◆カギリストから『小さなカギ』を1つ消す。4にチェックして
●北側の扉に直行する……………………**011へ**
●ビムに戦いを挑む……………………**088へ**

043

考えた末、ボクはクリスタルスイッチを青のままにし、南側の扉からさらに奥へと進んだ。

◆24にチェックして……………………**112へ**

044

ボクはマスターソードをギュッと握りしめると、迫りくる白い球を睨みすえた。そして、今まさに目の前へ来た瞬間を狙い、力いっぱい弾き返す。

バシ――――――――ン!!

ボクの剣に弾かれた球は、4つに分散し、四方からアグニムを襲った。

「うぎゃあああああああっ」

世にも恐ろしいアグニムの悲鳴が、部屋の中にこだまする。やがてアグニムはバタリと倒れると、蒸発するように小さくなっていった。すると――!!

キキッ……キキキキッ……キキキ―――――ッ!!

突然、消えゆくアグニムの体から1匹の蝙蝠が飛び出した。蝙蝠は、高く鳴きながら、部屋の隅にあった窓ガラスを破り、どこかへと飛び去っていく。

『……ガノン、ガノンだわ! リンク、追いかけて!!』

ボクの目を通してそれを見ていた体の中のゼルダ姫が、そう叫んだ。

「追いかけるって、ヤツはどこへ行ったんだ!?」

『おそらく、ピラミッドだわ。行くとしたら、そこしかないもの!!』

⬇061へ

045

ボクは、東の扉を開けてその奥の部屋へと進んだ。

●12にチェックがあれば……………………014へ
●12にチェックがなければ……………………086へ

046

支線を東へ向かうと、ロープはDと書かれた扉のある足場の前で途切れた。ボクは移動用のブロックを降り、扉の奥へ。
そこは、長い廊下になっていた。廊下の左側の壁には、目の形をしたダンジョントラップのカランメイダがびっしりと埋めこまれており、絶えず強力ビームを発射している。

●鏡の盾があれば……………………351へ
●鏡の盾がなければ……………………214へ

047

と、そのとき、クリスタルの娘の1人が、ボクを止めた。
『ちょっと待ってリンク。闇の世界の悪魔の沼へは、どうやっても行けなかったわ。だから、こっちの世界の砂漠のあたりを探ってみてはどうかしら？』
「あ、そうか！　確かにそうだ!!」
闇の世界の沼の場所は、光の世界ではちょうど砂漠の位置にあたる。もし、この砂漠のどこかにワープゾーンがあれば、沼のダンジョンへ行く道が開けるかもしれない。
ボクは、闇の世界へ戻るのをやめ、オカリナを吹いて風見鶏を呼び出した。
「風見鶏！　ボクを砂漠のほうへ連れていっておくれ！」

⬇185へ

048

「水門が開いた音だ!!」

ボクは、急ぎ足で再び水路を北へ向かった。すると、さっきまで単なる凹地だったプールの中に、水がなみなみと注がれている光景が目に入った。さっそくザブンと水に入ったボクは、泳いで東側のプールサイドに渡り、そのまま扉を開けて奥へと進む。

すると今度の部屋も、中央の凹地に水が注がれたプールになっていた。プールの中には、アメンボのような形をしたモンスターのホーバーが3匹、スイスイと泳いでいる。プールサイドの北側には、さらに奥へ続く扉が見えるが……。

●扉の向こうへ急ぐ……………092へ
●プールの中に入る……………128へ

049

「やっぱり、何もない部屋なんて変だ。ありえないよな……」

さっきは深く考えずに出てしまったが、ひょっとすると……。

⬇173へ

050

ボクはまず、はぐれ者の村を訪ねてみることにした。ところが、西に向かって歩きはじめて間もなく、細い道をふさぐようにして立つ、2本の大きなクイに行く手を阻まれた。

「ちぇっ、のっけからついてないや……」

しかたなくUターンしたボクは、長老の言うとおり、水のほこらへ行くことにした。

⬇035へ

051

殺気を感じたボクは、息をひそめてなりゆきを見守った。その瞬間ボクの頭上に稲妻が閃き――！

ガラガラガッシャ―――ン!!

よりによって雷撃をまともに食らってしまった!!

「う……、くっ……」

なんとか立ち上がったボクは、全身の痛みをこらえると、残りの小目玉にアタック！　地道な攻撃を繰り返し、ようやく全滅させることに成功した。

◆ハートをマイナス1して……………………………097へ

052

はぐれ者の村の南から、悪魔の沼への迂回路である東方面の道に出て間もなく、左手に小さな森が見えてきた。ここは、光の世界では動物の広場と呼ばれていた場所だ。村の子供たちの遊び場になっていたが、誰もいないときなどは、どこからともなく笛の音が聞こえてくるなどといわれていた。たまたまそこを通りかかった旅人が、笛の音の主を探そうと広場に入ると、木の切り株に少年が腰かけていたと証言したこともあるらしい。その旅人は、カカリコ村の大人たちに、こう話したそうだ。

『その少年は、動物たちを相手に、楽しそうにオカリナを吹いていました。それで私も楽しくなって近

づくと、動物たちは木々の間に逃げ、少年は、幻のように消え去ってしまったのです……』と——。
「あの話……ひょっとして、この闇の世界と関係があるんじゃないかな……」
ボクはふと、動物の広場と同じ位置にある、この森の中が気になってきた。

●森に入ってみる……………100へ　●悪魔の沼へ急ぐ……………090へ

053

亀岩での経験を活かし、ボクはまず、本線のロープを1周して、入れる部屋がどれだけあるか確認してみることにした。その結果、扉は全部で5つ——北側に2つ、東に1つ、南に2つ——あり、このうち入れるのは、北側の、階段から最も近い場所にある、Aの文字が刻まれた扉だけだということがわかる。ちなみに、Aの隣にあるBの扉と、対岸にあるDの扉はこちら側からは開かず、Dの隣のCの扉はカギつき、そして、東のひときわ立派なEの扉は、大きなボスのカギが必要だということも、調査のうえ判明した。
「亀岩と違って、ここは案外、一本道だったりするかもな……そして、最終的にたどりつくのが、あのEの部屋だ!!」
ボクは、ガノンが待っているだろう東の方角をしばし見つめると、唯一入れるAの扉の奥へ足を踏み入れた。

⬇299へ

054

ボクは南の扉を開け、その奥へと足を踏み入れた。

◆13、14、15にチェックは？

●いずれにもない……096へ　●13にのみある……119へ

●13と14にある……037へ　●全部にある……031へ

055

しかし、水色になったガノンの体は、ボクの持っているどんな武器も効かなかった。間もなくもとのダークブルーに戻り、再び動き出したガノンは、体力を完全に回復させていて――。

「ふはははは……ワシの力、思い知ったか!?」

長い戦いで疲れ果てていたボクと、復活したガノンとでは、体力に雲泥の差があった。やがて、ガノンの杖の直撃を受けたボクは、意識が遠のいて……。

『リンク……起きるのじゃ、リンク……』

マジカルミラーから聞こえてくるサハスラーラ長老の声で目覚めたとき、ボクはピラミッドのふもとに横たわっていた。

『……ガノンを倒すには、特別の武器が必要らしいのじゃ。それが何かはわからぬが、とにかくまずは、はぐれ者の村で情報収集をしてくるといい。ガノンはわしの力で、なんとかここに留めておく』

体力を回復してもらいながら長老の話を聞き終えたボクは、はぐれ者の村へと急いだ。

◆ハートをすべて回復させる。56にチェックして……142へ

056

そして赤いブロックは、ボクが南側へ行くのを拒むように、でで〜んとせり上がっていた。
「うひゃあ、やっぱクリスタルスイッチは青のままでよかったんだ！」
ボクは急いで部屋を出ると、ゾルのいた部屋のクリスタルスイッチを、青に切りかえる。そうしておいて戻ると、扉を囲む赤いブロックは、すべて床の高さまでへこんでいた。
「は〜、びっくりした〜」

⬇115へ

057

2階へ上がると、南北に伸びる長い通路の中心に出た。通路の西側の壁に面し、南から北へ均等に間隔をおいて、3つの扉が並んでいる。
「ふ〜む……、まずは、どの扉から入るかだな……」

●北側の扉から入ってみる……205へ
●南側の扉から入ってみる……227へ
●中央の扉から入ってみる……156へ

058

考えた末にボクは、ここにくる途中に見た、あの森へ行ってみることにした。

「あの森に、何かヒントがあるかもしれない……!」

⬇100へ

059

本線を南へと向かう。ロープは間もなく西へとカーブ、そのまま西へ行くと、今度は南へのポイント分岐が見えてきた。

●本線をこのまま西へ……………358へ
●支線を南へ……………………305へ

060

水路を北へ向かって進んでいくと、ゼリーのような四角いブロックが2つ、ボクの行く手をふさいでいた。ブロックはぷよぷよしていて、乗り越えようと手を置いたボクをぼよ~んと水路に弾き返す。

●マジックハンマーがあれば………024へ
●マジックハンマーがなければ……083へ

061

ゼルダ姫の言葉を信じてピラミッドへ向かうことにしたボクは、大急ぎでデスマウンテンを降り、はぐれ者の村の北のはずれまで戻ってきた。ここを東へ向かえば、ピラミッドだが……。

●はぐれ者の村に寄ってみる………142へ
●ピラミッドへ直行する……………330へ

062

「さぁて、次は……と」

●東へ行く……045へ　●南へ行く……054へ

063

本当ならここでボンバーメダルを使い、小目玉たちを一気に全滅させたいところだった。しかし、地下1階のヘビモンスター、スカルロープ戦でボンバーメダルを使ってしまったボクには、再度爆発を起こすほどの魔法力は残されていなかった。

魔法がだめなら剣で戦うのみ!!

ボクは退魔の剣マスターソードを掲げて、小目玉たちの群れに突進！　しかし、数匹を倒したところで油断が出たのか、敵の体当たりを食らってしまった。

「くっ……、弓で狙ったほうがいいか……？」

動きの速い小目玉を、遠距離から狙うのは、かなり無理があるような気もするが……。

◆ハートをマイナス1して

●弓で攻撃する……025へ　●このまま剣で攻撃する……091へ

064

『どうやっても無理そうね、リンク。この崖を越えることはできないわ……』

考えこんでいるボクに、娘たちが声をかけてきた。
『……ねぇ、あの鹿の言ってたこと、やってあげましょうよ。ね？』
『リンクだって気になってるんでしょう？　ガノンのことなら、もう少し時間はあるわ』
「そうかい？　それなら、やってみるか!!」
優しい娘たちの言葉で、ボクは、あの鹿の願いを、実行に移すことにした。

⬇022へ

065

本線を東へと向かうと、やがてロープは南へカーブし、ポイントに差しかかった。このまま本線を南へ行くか、支線を東へ行くか……？

●支線を東へ……………046へ　●本線を南へ……………059へ

066

じゃまするだけがとりえのモンスターなんて、無視に限る。別に経験値が上がるわけでもなし……。
決意したボクは、スタルフォスたちの攻撃を身軽くかわすと、北にある奥の部屋へ退避。幸い奥にはモンスターの姿もなく、かわりに小さなカギの入った宝箱がある。難なく小さなカギを手に入れたボクは、再びスタルフォスたちをかわして、水路へと戻った。

◆カギリストの『小さなカギ』を1つチェックする。2にチェックして

●今度は水路を北へ向かう……………060へ　●今度は西の扉に入る……………020へ

067

考えた末、ボクはアイスロッドで川の一部を凍らせ、宝箱に近づいた。中から出てきたのは、蝙蝠の絵が刻まれた大きなカギ！

「これで、ついにガノンと戦える……。みんな、行くぞ！」

ボクは、体の中にいる娘たちに声をかけると部屋を出て、ガノンの待つEの扉へと向かった。

◆カギリストの『蝙蝠のカギ』にチェックして……………175へ

068

『ちょっと待ってリンク。どっちにしろ、悪魔の沼へは入れないわ……』

沼へ向かって歩きはじめたボクに、娘たちが声をそろえて言った。た、確かにそのとおり……。

『……ねぇ、あの鹿の言ってたこと、やってあげましょうよ。ね？』

『リンクだって気になってるんでしょう？　ガノンのことなら、もう少し時間はあるわ』

優しい娘たちの言葉で、ボクは、あの鹿の願いを、実行に移すことにした。

⬇022へ

069

「あ、そっか。ボク、緑の薬を買っておいたんだっけ……」

ボクは、カカリコ村の魔法屋で仕入れた緑の薬を一気にあおると、迷うことなくボンバーメダルを掲げた。

たちまち周囲に大爆発が起こり、ヒューの大群はあっという間に姿を消す。
「へへっ！　楽勝、楽勝!!」
あっさりとヒューを退治したボクは、ブロックに乗ってロープを西へと向かった。

⬇114へ

070

ジャブジャブジャブと水音をたてて西へ歩いていくと、今度は南への分かれ道。
「ここは、どうしようかな？」

●南へ行ってみる……………………029へ
●このまま西へ進む……………………180へ

071

「でも、ここには、爆弾以外に目ぼしいものはなかったよなぁ……」
やっぱり、奥に進むのやめた～っと。

⬇216へ

072

「ちぇっ……爆弾でもあればなぁ……あ、そうだ!!」
唐突にボクは、さっき村で出会った2人組の言葉を思い出した。確か、村の爆弾屋がどうとか言ってたっけ。ってことは、はぐれ者の村には、爆弾屋があるってことだ！
ひとまず最初の部屋に戻ったボクは、階段を昇って村に戻り、あの2人組に爆弾屋の場所を尋ねる。

「え？　爆弾屋？　ああ、村の南側にあるけど。留守がちなんだよね。ま、行ってみたら？」
「ありがとう!!」
2人組にまたまた礼を言って爆弾屋を訪ねると、幸いにも爆弾屋は店を開けていた。
「おやおや？　お客なんて珍しい。爆弾が入り用かい？」
なんか、大砲みたいな顔をした爆弾屋は、ボクの顔を見ると、背後の棚から爆弾を2つ取り出す。
「……2つで1組だよ。20ルピーになるけど？」
そ、そうか……。店なんだから、当然お金がいるんだ。

●7にチェックがあれば……………157へ
●7にチェックがなければ……………178へ

073

Cの扉に入ると、中央に灰色のブロックが3つ並んでいる部屋に出た。ブロックのうち真ん中の1つは、両脇のブロックとは、ずれて置かれている。
この部屋の中でほかに目ぼしいものといえば、四隅にあるツボ。いかにも何か入っていそうだ。

●ツボを探ってみる……………015へ
●ブロックを探ってみる……………152へ

074

「でも、やっぱりゼルダ姫から先に救出しよう。ガノンの塔の近くに封じられている彼女なら、ガノンの動きに詳しいかもしれないし……」

ボクはそう言うと、村の北から、デスマウンテンの頂上に向けて、険しい山道を歩きはじめた。ところが、いくらも登らないうちに、真っ赤な溶岩の川に行く手を阻まれる。
「……これは、無理だなぁ……」
『この灼熱の川を渡るには、何かが必要なのよ。それを手に入れなければ……』
ボクは、クリスタルの娘たちと話しあった末、結局、悪魔の沼へ先に行くことにした。⬇052へ

075

思い切って渡った足場は、一見、ツボ以外には何もないようだった。が、よく調べると、壁にヒビの入っている部分が!!
ボクは残っている爆弾を使って壁に穴を開け、その奥へ入る。すると部屋の中に宝箱と、人マネモンスターのコッピがいた。相手のマネをするだけのコッピは、放っておけば危害は加えてこない。ボクはひたすらボクのマネをして動くコッピを無視すると、宝箱に近づいた。中に入っていたのは、亀の模様が彫られた大きなカギ!
「ボスの部屋に入るカギだ!」
貴重なカギを手に入れたボクは、どうやってもとへ戻ろうかと周囲を見回した。すると、今入ってきた穴の隣に、扉があることに気づく。ところが、扉は押しても引いても開かなかった。
「カギもかかっていないんだから、この扉を開けるには……」
……やっぱり、コッピを倒す必要があるのだろう。ただし、何度も言うようにコッピは、人マネモ

ンスター。こっちが攻撃をすれば、同じように攻撃をしてくるのだから、ケガをすることは覚悟しなければならない。
「う〜ん、コッピにやられるくらいなら、足場から下へ飛び降りたほうがマシかなぁ……?」

◆爆弾リストのチェックを1つ消す。カギリストの『亀のカギ』にチェックして

●コッピを倒す…………236へ　●足場から下へ飛び降りる…………167へ

076

そしてボクは、この扉に合うような小さなカギを持っていなかった。
「ちぇっ。……ってことは、ほかの道をあたるしかないな……」

●東側の扉に入る…………016へ　●水路を北へ直進する…………060へ

077

「あ、こいつら、さっきのウィズローブか!?」
ボクは、さっき北側の扉の奥を横道に入ったところで見た高台を思い出し、思わず声をあげた。なるほど、あの通路とこっちの通路は、こういうふうにつながっていた、というわけだ。
おっと、感心している場合じゃない、とにかく今は、このウィズローブをどうするかだ。

●放っておく…………120へ　●倒す…………250へ

078

「放っておこう……。どうやったって、宝箱の中身は取れないんだから……」
ボクはクリスタルスイッチを青のままにして、その謎の部屋を後にすると、入り口のある部屋まで戻った。頭を切りかえて、今度は東の扉へと向かう。

⬇149へ

079

階段を降りきると、そこは真四角の小さな部屋だった。部屋の四方の壁——つまり東西南北にはそれぞれ1つずつ扉がある。が、北側の扉はカギがかかっていた。ちなみに、もう1つ開かなかったのは西側の扉。これはカギこそかかっていなかったが、どうやらこちら側からは開かないようす。
「ふうむ。となると、まず行くのは、東か南だな……」

●東へ行く……………045へ　**●南へ行く……………054へ**

080

3人のアグニムは、ボクに向けて一斉に魔法で作った赤い球を放ってきた。
「くっ……！　本物はどれなんだ!?」

●右のアグニムの魔法を弾き返す……287へ　**●左のアグニムの魔法を弾き返す……002へ**
●中央のアグニムの魔法を弾き返す……………………190へ

081

ボクは、左のレバーを選ぶと、思いきってそれを引っぱった。が——!!
「うぎゃあっ!?」
どうやらはずれのレバーだったらしい。開くと思った扉は開かず、かわりに天井からキリギリス型のモンスター、バズが大量に降ってきた!! バズの群れは部屋中を所狭しと動き回り、隙あらばボクに襲いかかろうとしている。この量だと、ボンバーメダルでも使わない限り、全滅は難しそうだ。

●ボンバーメダルで倒す……………172へ
●逃げて右のレバーを引く……………117へ

082

気づくとボクは、沼のダンジョンの入り口に倒れていた。マジカルミラーから聞こえてくる長老の声が、ゲルドーガにやられたのだと教えてくれる。
『じゃが、リンク、決してあきらめるでないぞ。今、体力と魔法力を回復させてやろう……』
長老の励ましの言葉が聞こえ、その直後、ボクの全身に力が蘇ってきた。
ボクは剣を握りしめると、長いダンジョンを抜けて、再び地下3階のボスの部屋へ。
巨大な目玉のボス、ゲルドーガは、手下の小目玉たちを復活させて、ボクを待ちかまえていた。
まず手始めに、ボンバーの魔法で小目玉を全滅させてやる!!

◆ハートをすべて回復させて………………………366へ

ぷよぷよのブロックを蹴ったり、かじったり、なめてみたりしたが、結局どれも効果なし。しかたなくボクは水路を戻り、東か西の扉の奥へ入ってみることにした。

●西側の扉に入る……………020へ　●東側の扉に入る……………016へ

084

しかしボクは、ボスの部屋に入るためのカギを持っていなかった。周囲を探ると、足場の南側に扉があったが、こちら側からじゃ開かないようす。

「……となると、やっぱりさっき南側に見えた足場が怪しいか……」

ボクはソマリアの杖で再び移動用ブロックを作ると、ロープを少し東へ戻り、南の足場へ渡ってみることにした。

➡075へ

085

ボクの考えは、みごと的中した。なんと、砂漠の、人の足では絶対に登れないような切り立った岩棚の上に、闇の世界へ行くためのワープゾーンがあったのだ。

岩棚の上に降りて風見鶏を空に返すと、ボクは思い切ってワープゾーンに飛びこんでみる。たちまちあたりの景色が歪み、気づくと、じめじめと湿った不気味な沼が、ボクの目の前に開けた。

そして、沼のダンジョンは悪魔の沼の中心部に、その口を開けていた。さっそく中に入ったボクは、

ひとまずコンパスで方向を確かめる。
東側の隅に奇妙な石像が置かれたその部屋には、東と南にそれぞれ1つずつの扉があった。扉は、どちらにもカギなどかかっていないようだ。

●東の扉の奥へ……………149へ　●南の扉の奥へ……………028へ

006

と、ボクの目の前にイソギンチャクのようなモンスターが、待ってましたとばかりに踊り出た。こいつは、触手を長く伸ばして相手の持ち物を奪う、ライクライクだ!!

◆12にチェックして
●ライクライクと戦う……………009へ　●ライクライクから逃げる……………113へ

007

宝箱の周りには赤いブロックが並んでいるが、さっきクリスタルスイッチを切りかえておいたおかげで、床の下に沈んでいた。
ボクは宝箱に近づくと、その中身を取り出した。お宝は、ボクが今持っている盾よりも、さらに防御力のある鏡の盾。娘たちによると、強力なビームをも跳ね返す力があるということだった。
これまでの小さな盾を鏡の盾と取りかえたボクは、部屋を後にしてCの扉を出る。そしてソマリアの杖で移動用ブロックを作ると、ロープを本線まで戻った。

◆アイテムリストの『鏡の盾』にチェックする。39にチェックして

●本線を西へ行く……………256へ　●本線を東へ行く………………065へ

088

「でりゃああああああっ!!」
ボクは叫び声をあげ、マスターソードを振りかぶってビムに突撃した。が、敵は頑丈さがとりえのダンジョントラップ。剣の攻撃などものともせずに、相変わらず冷静な監視を続けているのみ。
「やっぱり、むだな努力だったか……」
ボクは、ビムの目を逃れて、奥の部屋へ行こうと扉の前に立つ。ところが、扉はカギ穴があるわけでもないのに、全く開くようすを見せなかった。
「な、なんで開かないんだ？　ど、どうすれば……!?」
慌てたボクは、再び部屋の中を見回す。すると、北側の壁の隅に、小さなツボが置かれていることに気づいた。ふうむ、なるほど。

⬇143へ

089

気づくとボクは、ピラミッドのふもとで、ぐったりと横たわっていた。マジカルミラーから、サハスラーラ長老の声が聞こえてくる。
『気づいたようじゃの、リンク…。ガノンの影響力が強いピラミッドの中からおまえを救出するのは、

さすがに大変じゃったわい。娘たちの協力を得て、ようやくここまで運び出せた……』
「じゃあ、ボクはガノンに……？　世界の平和はもう……？」
ガクリと肩を落とすボクに、長老はまだ間に合うと言った。
『……ガノンは、わしらの力で、なんとかピラミッドに引き止めておる。さあ早く！　手遅れにならぬ前にガノンを！』
長老はそう言うと、失われたボクの体力を、完全に回復してくれた。

◆ハートをすべて回復させて……………………315へ

090

ボクは悪魔の沼へ急ぐため、森の前の道を崖に沿い、東に向かって歩きはじめた。地図を頼りに崖の途切れたところを南へ行き、再び崖に沿って、今度は西へ向かう。
ところが――。
「あ、あれ？　な、なんで、なんで沼に行けないんだ!?」
あともう一歩で悪魔の沼、というところで、ボクは足止めを食らってしまった。なんと、崖と崖の間にあったはずの細道が、崖崩れでふさがれていたのだ。つまり、悪魔の沼は、まるっきり陸の孤島と化してしまっていたのだった。
「……どうしよう……。このままじゃ、娘たちの救出が……」

◆22にチェックする。21と23にチェックは？

●どちらにもない……058へ
●23にのみある……064へ
●両方にある……104へ

091

小目玉の数はいやになるくらい多かったが、ボクはひたすら剣を振るい、着実に数を減らしていった。すると、それまで全く動かなかったボスのゲルドーガが、黒目の部分をクルリと動かした。

「むっ……殺気!?」

●今いる場所から急いで離れる……004へ
●動かずにようすをみる……051へ

092

プールサイドの北側から、奥へと続く扉を開けると、そこは細い水路が入り組んだ迷路になっていた。小さな高台から、ハシゴで水路へと降りたボクは、北方向と西方向へ伸びた水路を見比べる。

「さて、どっちが正ルートだ!?」

●北へ行ってみる……151へ
●西へ行ってみる……176へ

093

が、この部屋でやるべきことは、すでにやっていた。
「そういえば、タイノンも倒したし、ポーンもやっつけたんだっけ……。戻ろ……」

⬇278へ

094

小さなカギを手に入れ、あらためて部屋の中を見回したボクは、部屋の東側の壁に、ヒビが入っているのを見つけた。
どうやら、爆弾で破壊できそうだ。

●爆弾があれば……………………139へ
●爆弾がなければ……………………102へ

095

ロープを伝って西へと向かうと、やがて対岸の足場にたどりついた。正面に見えるひときわ立派な扉は、もちろん、ボスの部屋への扉だ。

●亀のカギがあれば……………………301へ
●亀のカギがなければ……………………084へ

096

南の部屋に入ると、右手――つまり西側に扉があった。
ところが、ここもカギの必要な扉。

「う～ん……、困ったなぁ……。ここは、これでおしまいか……？」
コンパスで方角を確認しつつ、ボクは部屋の中を確認して回る。
と、西側の扉の反対側、東側の壁に意味ありげなヒビを発見。
こぶしを作って叩いてみると、そのヒビの部分だけ、ほかとは違うゴォンゴォンと反響するような音がした。
ってことは、この奥に部屋がある――？

◆13にチェックして
●爆弾があれば……………119へ　●爆弾がなければ……………072へ

097

これで残りは、ボスただ1匹のみ！
手下の小目玉を全滅させられたゲルドーガは、ようやくのそりと動きだした。そのスピードは、小目玉たちに比べると格段に遅い。
これなら、弓矢で狙えるかも!?

●遠距離から弓矢で攻撃……………122へ　●回転斬りで攻撃……………019へ

098

すると、さっき無視した3匹のスタルフォスが、猛烈な勢いで襲いかかってきた。今度は逃してなるものかと、3匹でボクを取り囲む。
「そうかい？　どうしても戦いたいというんだな、キミらは……。ならばっ!!」
ボクはマスターソードを構えると、力をためて得意技の回転斬りを披露。ブウウンと唸った剣は、周囲にいたスタルフォスたちを一撃でしとめる。
と、思いも寄らないことが起こった。スタルフォスたちが崩れ落ちたその瞬間、部屋の中央に宝箱が姿を現わしたのだ。
中に入っていたのは、ゼリー状のブロックやクイ、そのほか、とてつもなく堅いものを叩きつぶすことのできるマジックハンマー!!
「なぁるほど、モンスターを全部倒せば、こういうことも起こるんだ」
感心しながらマジックハンマーを腰ひもにぶら下げたボクは、再び水路へと戻った。

●アイテムリストの『マジックハンマー』にチェックする。1にチェックして

●今度は水路を北へ向かう…………060へ　●今度は西の扉に入る………………020へ

099

「よぉし、もう一度だっ!!」
ボクは再度回転斬りを放ち、スタルフォンの体を崩した。そして、すかさずその上に爆弾をセット

する。
数秒後、スタルフォンが復活するより一瞬速く爆弾が爆発を起こし、スタルフォンの骨は、みじんに砕け散った。
同時に、東側にあった別の扉が、音をたてて開く。
東の扉の奥は、中央に大きな岩のある部屋だった。
南側に扉があり、これは、横のボタンを押すことで簡単に開く。問題は中央の大岩で、パワーグラブを装備したボクが持ち上げると、へこみの下から宝箱が現れた。
しかし、宝箱の真上には、ダンジョントラップのバブルが…。こいつは、触れると魔法力を奪われてしまう、なかなかやっかいなトラップだ。

◆爆弾リストのチェックを1つ消して
●一度退却してようすを見る……258へ　●宝箱を開ける……212へ

100

木々をかきわけて森の中へ入っていくと、光の世界の動物の広場と同じような広場がそこにあった。
そして、さらに驚いたことに、中央にある切り株に、まだ若い鹿が1頭、座っていたのだ。
「キミは……?」
ボクがゆっくりと近づくと、シカはきらきらと光る真っ黒い目をボクに向け、人間の言葉を話した。
「……ああ、人間に会えるなんて久しぶりだ。ボク？　ボクはね……へへ……こっち側に迷いこんだ

らこんな姿になっちゃって……。もとの世界にいた頃は、笛を吹いて遊んだものさ。動物たちの集まる小さな広場……懐かしいなぁ……」
もしや、この鹿がウワサされていた少年?
ボクは、問いかけるように鹿を見つめる。すると鹿は、何かを懐かしむような瞳で、ボクを見返してきた。
「……動物の広場にね、花の種と一緒にオカリナを埋めたんだ。探してくれないか?」
「オカリナを……?」
「うん。そしてそれを、村のいつも飲んだくれてるじいさんに渡してほしいんだ。頼んだよ……」
鹿はそれだけ言うと、急に動きを止めた。そして、ボクの見ている目の前で、切り株から伸びた1本の若い枝へと姿を変える。
鹿の形をした枝は、何か言いたげにさらさらとその葉を鳴らした。

◆23にチェックして
●光の世界に戻ってみる……………022へ　●悪魔の沼へ急ぐ……………………040へ

101

ところが、北への水路はすぐに行き止まってしまった。しかたなく来た道を戻り、今度は西に向かって進むことにする。

⬇070へ

が、残念ながらボクは、爆弾を1個も持っていなかった。
「一旦外に出て、どこかで爆弾を調達してこなけりゃ……。ちぇっ、せっかくここまで来たのに」
ムシャクシャして部屋を出たボクに、さっき無視したゾルたちが、われ先にと襲いかかる。
「ええいっ、もう、うざったい!! じゃまなんだよっ!!」
苛立ちまぎれに剣を振りかぶる。
と、ゾルが全滅して消えた瞬間、爆弾が2つ、転がり出てきた。
「なぁんだ、ここでゾルを倒していればよかったんだ!」
たちまち機嫌がよくなったボクは、爆弾を手に、もう一度南の部屋の奥へ戻る。

102

◆爆弾リストに2つチェックして**……………………139へ**

103

小さなカギを使って扉を開けると、中の広い部屋で巨大な虫型モンスター、デグテールがうねうねと動き回っていた。
ヤツは、節のある長い体を器用に動かし、ボクに向かって突進してくる。ボクは、剣を構えて応戦したが、デグテールの堅い体に弾かれるばかりだった。
「やみくもに攻撃してもだめなんだ。……となると、急所狙いか?」
急所といってもデグテールには、堅いボディのほかには大きな丸い目と尻尾があるだけ。

果たして、急所はどっちだ!?

◆カギリストから『小さなカギ』を1つ消して

●目を狙う……239へ
●尻尾を狙う……280へ

104

「そうだ!!　あのオカリナで!!」

ボクはふと思いつくと、マジカルミラーで光の世界へと戻った。そして、オカリナを吹いて風見鶏を呼び出す。

そうして鶏に、砂漠へ行くように指示をした。

闇の世界の悪魔の沼の場所は、光の世界ではちょうど砂漠の位置にあたる。だからひょっとしたら、砂漠のどこかにワープゾーンがあるのでは、と思ったのだ。もちろん、砂漠へは歩いてでも行ける。けれど、誰でも歩ける場所にワープゾーンがあるはずはない、もしあるなら、人の来られないような場所だと考えたのだ。

「風見鶏！　砂漠の、人の足じゃ登れないような岩棚のあたりを、集中的に飛んでおくれ！」

ボクは祈るような気持ちで、風見鶏に叫んだ。

↓085へ

105

本線を西へと進んでいくと、間もなくロープは南にカーブし、やがて西の支線へと分かれるポイント分岐に差しかかった。ここはどうしよう?

●本線を南へ……………………408へ
●支線を西へ……………………324へ

106

西側の扉には、小さなカギ穴がついていた。つまり、カギがなければ入れないというわけだ。

●小さなカギがあれば……………042へ
●小さなカギがなければ…………076へ

107

「くっ……」

痛みをこらえて立ち上がると、ボクはアグニムをギッと睨みつけた。しかし、アグニムは高笑いをやめず、腹を抱えたまま再び白い球を放ってきた。

「同じ手に、そう何度もひっかかるようなボクじゃないぞ!」

⬇044へ

108

「ふんむ〜〜〜〜〜〜っ……」

ボクはかがみこんで岩をつかむと、力まかせに引っぱってみた。が、とてつもなく巨大な岩は、ビ

クとも動かない。
「……はぁはぁ……。やっぱり、動くはずないか……」
岩を動かすことを断念したボクは、入り口の部屋へと戻ることにした。

⬇062へ

109

尾根から岩棚まで降りていくのは、思ったより大変ではなかった。ただし、岩棚にはやっぱり洞窟やヒビ割れみたいなものはない。
剣で岩壁を叩いてみても、奥に洞窟が隠されているようすはなかった。
「ん？　でも、ちょっと待てよ……」
しばらく考えた末、ボクは思いついてマジカルミラーを取り出す。そして、岩棚の上で掲げると！
「……やった！　思ったとおりだ!!」
なんと、光の世界にも同じような岩棚があり、しかもそこには、洞窟があったのだ。
洞窟の奥でボクの訪れを待っていたのは、魔法アイテムのシェイクメダル。娘たちによると、これは魔法で大地震を起こし、敵や周囲のものになにがしかの影響を与えるということだった。
「う～ん、なにがしかの影響って？　つまり、ボンバーメダルみたいにダメージを与えるわけ？」
『……ダメージというのともちょっと違うけれど……。使ってみればわかるわ』
わかったようなわからないような複雑な気持ちで洞窟を出たボクは、マジカルミラーによって岩棚に残されていたワープゾーンから、再び闇の世界へ。崖を登ってようやく尾根まで戻る。

◆アイテムリストの『シェイクメダル』にチェックして

●32にチェックがあれば……………148へ
●32にチェックがなければ……………118へ

110

水門を開いちゃって本当によかったのかどうかはわからないけど、ま、問題があったら閉じにくればいいだろう。
そう考えるとボクは、部屋を出て水路まで戻った。

●今度は水路を北へ直進する……………060へ
●今度は東の扉へ入る……………016へ

111

ボクは宝箱にフックショットを打ちこんだ。そして、そのまま川の対岸に渡る。が——。
「あぢ、あぢぢぢぢ……」
溶岩に触れないよう足を高く上げたつもりだったが、立ちのぼる熱気で、おしりにやけどを負ってしまった。おまけに、今さら、溶岩の向こう側に戻る手段がないことに気づく。なにしろ、溶岩の川の向こう側には、フックショットを打ちこむためのツボもないのだから……。
「やけどまでして、結局川を凍らせなきゃならないなんて……。最初から、素直にアイスロッドを使っておけばよかった……」
リンク、一世一代の不覚……!!

とはいえ、やけどまで負っただけに、宝箱の中身は実りあるものだった。それは、蝙蝠の絵が刻まれた、大きなボスのカギ!!
「やった、これでついに、ガノンと戦える！　みんな、行くぞ！」
ボクは、体の中にいる娘たちに声をかけると、アイスロッドで溶岩の川を凍らせ、Dの部屋の外へ出た。そして、ソマリアの杖で移動用ブロックを作り、ガノンの待つEの扉へと向かう。
◆カギリストの『蝙蝠のカギ』にチェックする。ハートを1つマイナスして……………175へ

112

南の奥の部屋に入ると、赤いブロックに四方を囲まれた宝箱があった。
Ⓒ24にチェックがあれば……………170へ　Ⓒ24にチェックがなければ……………182へ

113

ボクはライクライクから逃げようと、身をひねって部屋の隅に移動した。と、その瞬間、床のタイルがうねりをあげ、1枚、また1枚と持ち上がる。ダンジョントラップの床ビュンだ！　床ビュンは、しばらく空中で停滞すると、急に勢いをつけて侵入者であるボクに体当たりしてきた。ボクは慌てて盾で体をかばったが――!!
「あっ!?　こ、このぉ！　盾を返せっ!!」
なんと、チャンスとばかりに近づいてきたライクライクが、大切な盾を触手にからめとってしまっ

た。かわいそうなボクは、当然ながら床ビュンの格好の餌食となって……。
「くっ、くっそ〜〜っ!!」
全部で10枚の床ビュンの攻撃をしゃがみこんで耐えたボクは、怒りに燃えてライクライクを攻撃!
どうにか盾をうばい返すことに成功した。

◆ハートをマイナス1して……………………………141へ

114

ヒューを倒して、ロープをさらに西へと伝っていくと、南の方に足場があるのが見えた。
足場にはツボが置いてあったので、フックショットを使って渡ることはできる。ただし、そうすると足場からロープへ戻る手段がなくなる。
なにしろ、一旦降りるとブロックは落下してしまうのだから……。
それに、足場にはツボ以外何もなさそうだ。無理して行くほどの価値があるだろうか?

●足場へ渡る……………075へ　●このまま西へ行く……………095へ

115

「さて、どっちへ行こうか……」
ボクは部屋にある北側と南側の扉を、交互に見比べた。

●北の扉へ……………200へ　●南の扉へ……………174へ

116

——そういえば、シェイクメダルを使うとどうなるんだろう？
シェイクメダルで地震が起こることはすでにわかっているが、それがモンスターたちにどんな影響を与えるというのか？
娘たちは、使ってみればわかると言っていたっけ……。
「ええい！　どうにでもなれっ!!」
ボクはシェイクメダルを高く掲げ、祈りを捧げた。たちまち部屋中に地震が起こり、そして——!!
な、な、なんと、ポーンたちは全員、スライムに変身してしまった。決まった形を持たず、うねうねと体をくねらせながら床を這うスライムは、はっきり言ってモンスターの中でも最弱を誇る。たとえ何匹いようとも脅威はなく、ボクは剣を振るってたちまちスライムたちを全滅させた。後に残ったのは、魔法力を回復する緑の薬と爆弾、そして、入手したダンジョン内でのみ有効な体力アップアイテム、ハートのかけらが1つずつ。
「なんか、得した気分。ラッキー！」
ボクはまず爆弾を腰にくくりつけると、緑の薬とハートのかけらを一緒にゴクリ！　そして、ほかには何もないことを確認すると、部屋を後にした。

◆爆弾リストに1つチェックする。ハートを1つ増やす。45にチェックして……………278へ

117

ボクはバズから逃げるようにして右のレバーへと向かった。が、現実はそうあまくなかった。あと一歩でレバーに到着というそのとき、1匹のバズがボクの右足をガブリ！
「いっ、いで〜〜〜っ!!」
ボクは足を振ってバズを払い落とすと、急いで右のレバーを引く。とたんに、ズズズ……と音をたて、北側の扉が口を開いた。

◆ハートをマイナス1して……………………026へ

118

尾根伝いに、さらに東へ歩いていくと、やがて不気味な塔の前にたどりついた。
『……これが、ガノンの塔よ……。今は、結界が張ってあって中に入れないけれど、わたしたちが7人集まれば、きっと結界を破壊できるはず』
娘の1人が、ボクの体の中でそう言う。
彼女の言う結界は、塔の入り口に確かに張られていた。試しに塔の中に入ろうとしたが、見えない力で押し戻されてしまうのだ。
『今はあきらめて、リンク。それより亀岩は、ほら、先に見えるでしょう、あそこよ』
娘の言葉で塔に入ることをあきらめたボクは、目と鼻の先にある亀の形をした大岩——亀岩へ向かった。ところが、亀岩の周りを1周してみても、入り口らしきものが見あたらない。

「なんでだ？　入り口は？　ひょっとして……」
考えに考え、ボクは苦労して亀岩のてっぺんによじ登った。残念ながら、ここにも入り口はなかったが、かわりに、奇妙な模様の描かれた石碑が建てられていた。
「これはなんだ……？」

◆32にチェックして

●シェイクメダルがあれば……032へ　●シェイクメダルがなければ……010へ

119

ボクは腰に下げた爆弾を1つ手にとると、それを壁のヒビのあるところにセットした。
「5……4……3……2……1……」ドッカ～～～～～～ン!!
すさまじい音をたてて爆弾が爆発すると同時に、壁に大きな穴が開く。
「やったね!!」
ボクは爆風で舞い上がった煙がおさまるのを待つと、穴の奥へと進んだ。
穴の奥には思ったとおり部屋があった。部屋の奥には宝箱もあったが、その前には部屋を分断するように大きな溝が口を開けている。フックショットを宝箱に打ちこめば、溝を渡るのは簡単だったが、問題は、宝箱を守るかのように、その周りをうろつくネズミ型モンスターのグーズ！
ちなみに溝のこちら側、つまり今ボクが立っているすぐ脇に、グーズを倒すのにおあつらえ向きのツボが1つ、あるにはあるが……。

「なんか、このツボは投げてはいけないような気がする……」

◆爆弾リストのチェックを1つ消す。14にチェックして

●ツボをグーズにぶつけて倒す……………018へ　●とにかく溝を渡る…………………125へ

120

「ええい、面倒だ。放っておこう!」

ボクは敵に背を向けると、爆弾で開けた穴をくぐり、さっさと通路を後にした。

⬇216へ

121

「あ、あんたはって……。ボクはリンクって名前だけど……」

ボクがそう答えると、爆弾屋はガクリと肩を落として言った。

「……そうかい……。悪いが、帰ってくんな。オレっちは、ある人の訪れを待ってるんでね」

なんだか妙に無愛想な爆弾屋をまじまじと見つめると、ボクはしかたなく店を出た。

「ある人って、こんな闇の世界に、誰が来るっていうんだ?」

●2人組を探す……………245へ　●話す木のところへ行く……………360へ

●はぐれ者の村を出る…………………………………………330へ

122

回転斬りは、力をためるのに時間がかかる。それならばいっそ、矢を連射させ、相手に反撃のゆとりを与えないようにするほうが得策だ。

そう考えたボクは、素早く弓矢を取り出すと、ゲルドーガを狙って次々と矢を放った。

さすがはボスを名のるだけあり、ゲルドーガの体力には想像を絶するものがあったが、いつかは倒れると信じ、ひたすら矢を打ちまくる。敵は最後の瞬間まで反撃を試みようとうごめいていたが、やがて力尽き、自爆して消えた。

あとにはいつものように、ハートの器が1つ転がり落ちる。ボクがそれを手に取ると、解放されたクリスタルが2つ、どこからともなく現れた。

⬇036へ

123

ゾルぐらいなら、別に苦労せずに倒せる。ボクは剣に力をためると、わざと3匹のゾルの真ん中に飛びこみ、敵を引きつけて一気に倒した。

と、ゾルが消えた後に爆弾が2つ転がり落ちる。ボクは爆弾を入手すると、あらためて部屋の中を見回した。

「ん？　これはなんだ？」

ボクが目をつけたのは、部屋の隅に置かれている赤く輝くクリスタルの玉。台座のようなもので床に固定されているらしい。

ためしに玉を叩いてみると、それまで赤かった色が青に変わった。
『それは、クリスタルスイッチよ。床に埋めこまれている色つきのブロックが、それで上下するの』
娘たちが、その玉の意味を教えてくれる。
「……とすると、このクリスタルスイッチは、どうすればいいかなぁ……？」

◆爆弾リストに2つチェックして

●赤い色にする……………………147へ　●青い色にする……………………043へ

124

ボクは、さっき見た宝箱の中身を取るため、Cの部屋の奥、隠し扉の向こうへと進んだ。

●37にチェックがあれば……………087へ　●37にチェックがなければ…………034へ

125

なんだかツボを壊してはいけないような気がして、ボクはひとまずフックショットで溝の向こう側に渡り、襲いかかってきたグーズを剣で倒した。
宝箱に入っていたのは、小さなカギ。
それをポケットにしまいこんで、いざ溝の向こうに渡ろうとして、ボクはやっとツボの意味に気づいた。
溝を渡るためには、フックショットをどこかに打ちこむ必要がある。こっち側には宝箱があった。

そして、向こう側には、あのツボ。つまりツボをグーズに投げつけていたら、今ごろは途方に暮れていたはずで……。
「よ、よかったぁ」
ツボを投げなかった自分の思慮深さに拍手!
ボクは溝を渡ると爆弾で開けた穴を通り、ダンジョンの入り口の南側にあった部屋へと戻った。
◆カギリストの『小さなカギ』を1つチェックして……037へ

126

魔法力はもったいないけど……、背に腹はかえられない!!
ボクはボンバーメダルを取り出すと、高く掲げて祈りを捧げた。たちまち炎が渦巻いて、スカルロープたちを一気に消し去る。
すると、部屋の中心に、小さなカギの入った宝箱が現れた。
「は～驚いた。でも、小さなカギは手に入ったし……。さ、南側の扉へ行こう」
◆カギリストの『小さなカギ』を1つチェックする。30にチェックして……174へ

127

ビムの部屋から水門のレバーがある部屋へ入る。レバーは、相変わらずゼリー状のブロックによって大事そうに守られていた。

●マジックハンマーがあれば……………198へ

●マジックハンマーがなければ…………184へ

128

モンスターが、何か大事なアイテムを隠し持っているとも限らない――。

ボクはプールの中に入ると、迫りくるホーバーに剣の切っ先を向けた。ホーバーたちはあまり頭がよくなかったらしく、ひたすらこちらに突進し、あっさりと剣の餌食になって消える。すると、ホーバーの消えたところに爆弾が2つ現れた。

「おっと、湿気で使えなくなったら大変!!」

ボクは大慌てで爆弾を抱えるとプールから上がり、水気をよく切って、腰ひもにくくりつけた。これであとは、奥へ進むのみだ。

◆爆弾リストに2つチェックして……………………092へ

129

はぐれ者の村に入ると、例の2人組が、ボクに近づいてきた。

「よう、久しぶりだな。おまえ、知ってるか？　爆弾屋の話をさ……」

キツネの姿をしたほうが、ボクに思わせぶりな言葉をかける。と、それをさえぎるように、人のよさそうなボールのほうが口を出した。
「あのさ、村の南にいる爆弾屋がね、すっごく威力のある大きな爆弾を探して旅してるんだってさ。それさえあれば、ほら、ピラミッドの壁のヒビ、知ってるだろう？　あれさえも壊せるって……」
「へぇ……」
そういえば、すっかり忘れていたけれど、確かにピラミッドの壁面には、普通の爆弾では壊せないヒビがあったっけ。
あの奥には何があるんだろう……？
ボクにそれだけ話すと満足したのか、２人組はふらふらとどこかへ去っていった。

●爆弾屋へ行ってみる……………166へ
●デスマウンテンへ急ぐ……………195へ

130

炎の鳥にあぶられることも覚悟で飛びこんだが、幸運の女神はボクに味方をした。
鳥と鳥の間をうまく抜けることができたボクは、ガノンに強烈な一撃を食らわすことに成功！
「うぬうっ!?」
今までびくともしなかったガノンの体が、このとき初めてグラリと傾いだ！

⬇033へ

131

「そうだ……。直接攻撃がだめなら、こっちも魔法を!!」
ボクは、ボンバーメダルを取り出すと、高く掲げて祈りを捧げた。以前、光の世界で戦ったときは、魔法力が足りずに使えなかった。
でも、魔法力が充分にある今なら!!
やがて大爆発が起こり、真っ赤な炎が3人のアグニムに襲いかかる。
そして――!!
「ヒッ、ヒイ～～～～～ッ!!」
火にあぶられて悲鳴をあげたのは、向かって右側にいるアグニムだった。
「幻惑の術、破れたり!!」

317へ

132

小さなカギを探すため、ボクは入り口まで戻ると、南側の部屋から先に回ることにした。

028へ

133

「あ、そうだ。確か少しだけお金があったよな……」
ボクは、最初のダンジョン、水のほこらで見つけた20ルピーをポケットから取り出すと、村のはずれにある魔法屋へ行った。

ここでは、魔法力を回復できる緑の薬を売っている。
ボクは20ルピーを残らず支払い、これからのために緑の薬を1つ購入した。

◆**31にチェックして……215へ**

134

娘たちはボクに、次は村のダンジョンへ進むようにと語りかけてきた。
「村のダンジョンか……。ということは、はぐれ者の村へ行けばいいんだな」
地図を確認したボクは、水のほこらからピラミッドまで戻り、その前にある道を、村のある西に向かって歩いた。
途中、大きなクイに行く手を阻まれたが、水のほこらで手に入れたマジックハンマーを使って叩きつぶし、さらに西へと進む。
と、間もなく、村の北側にある入り口にたどりついた。
はぐれ者の村は、光の世界のカカリコ村と、とてもよく似た造りをしていた。
村の入り口のすぐわきに、かつて盗賊ブラインドが隠れ住んでいたといわれる、石造りの家があるのも同じだ。ただ、カカリコ村のと少し違っているのは、石造りの家の半分近くが地中に埋まり、北側のガラス窓がほんのわずかしか見えない点。
「それにしても、この村に、本当にダンジョンがあるのかい？　だとしたら入り口は？」
『……そこまでは、わたしたちにもわからないの。でも、どこかにあるはずよ……』

135

ボクは娘たちと話しながら、村の中央にある広場まで歩いた。
カカリコ村では風見鶏のあったこの広場だが、この闇の世界では、かわりに翼を持った不気味な魔物ガーゴイルの像が置かれている。
「う〜ん、とにかく、村を隅々まで見るしかないよな……」
ボクは広場を基点にして、情報収集をしてみることにした。

●村の東側を探る……………206へ　●村の西側を探る……………232へ
●村の南側を探る……………225へ　●村の北側を探る……………003へ

136

これで、残るは真ん中の首だけ！
ボクは剣に力をためると、回転斬りで飛びかかった。いわば、防御役でもある両脇の首を失った敵は、拍子抜けするほどもろかった。回転斬りの後、剣を数発繰り出しただけで、あっさりと爆発して果てる。
そして、後に残ったハートの器を手に取ると——。
『リンク……、よくここまで来てくれました。やっぱりあなたは勇者の力を秘めていたのね……』
どこからともなく、ゼルダ姫の封じられたクリスタルが舞い降りてきた。

⬇349へ

136

東へ向けて進むと、間もなく本線は北へとゆるやかにカーブしていった。
ボクの乗ったブロックはロープに沿ってしばらく北方向に進んでいたが、やがて分岐ポイントに差しかかり一時停止する。
「……このまま本線を北へ行くか、それともここから枝分かれしている支線を東へ行くか……」

●本線を北へ……………………140へ　●支線を東へ……………………046へ

137

が、奥に進んだボクは、びっくりして目を見開いた。そこは全体が深いプールのようになった部屋だったのだ。
今、叩いて通ってきたブロックのところから逆コの字型にプールサイドのような高台があり、プールサイドの南側に、3メートルはあるプールの底に降りるハシゴがある。
で、東側の高台に奥へと続いているらしい扉が見えるが、なんといってもブロックのところから続く高台は逆コの字型。つまり南、西、北側のプールサイドはつながっているが、東側だけは切り離されているのだ。
ちなみにボクは、プールの底に降りて、東側の高台に登ってみようともした。けれど、3メートルもある壁なんて、どうやったって登れっこない。
「こいつは、プールに水でも入れなきゃ向こうに行けないよ……。となると」

考えた末にボクは水路を戻り、まだすべてを攻略していない西側の扉へ。

◆**5にチェックして**……………………………………**020へ**

138

南の扉の奥は、東側の壁に彫りこまれた2体の彫像があるほかは、何もないガランとした部屋になっていた。彫像にはさまれるようにして扉があるが、どうやっても開く気配がない。

「なんだ……？　こっち側からじゃ開かないのか……」

◆**46にチェックして**

●**部屋を出る**……………………**278へ**　●**もうしばらく部屋を調べる**……………**173へ**

139

ついさっきゾルたちを倒して手に入れた爆弾の1つを取り出すと、ボクは壁のヒビ割れた場所にセットして素早く離れた。

爆発音の後、壁に開いた穴の奥には、なんとも意味不明のものが……。

まず手前に、ボクの行く手を阻むかのように南北に伸びた青いブロックの列、その奥に床と同じ高さになっている赤いブロックの列、さらにその奥に、青いクリスタルスイッチ。そして部屋の北側には、登れそうにない高台があり、高台の上には宝箱。高台に登るためのハシゴは、クリスタルスッチのすぐそばにある。

つまり、宝箱に近づくには赤と青のブロックを両方下げた上で、向こう側に行かなければならないというわけだが、たとえ今、矢でクリスタルスイッチを切りかえても、赤いブロックがせり上がるので、絶対に向こう側になんて行けやしない。

「ん、待てよ！」

考えた末にボクは、まず矢でスイッチを赤くして青いブロックを越え、その後再び矢でスイッチを青に戻し、赤いブロックを越える……という方法を試みようとした。

が、そこはうまくしたもの、赤と青のブロックは、すこしずつずらして作られており、青いブロックの隙間から矢でクリスタルスイッチを狙うことはできるが、赤いブロックの隙間からは狙えないようになっていた。

「うう～ん……」

ボクは、むだな試みをすることは避け、青いクリスタルスイッチを慎重に見つめる。

「今なら矢で、スイッチを赤くすることはできるんだよな……、どうしよう？」

宝箱はどうやっても取れないが、クリスタルスイッチは切りかえておいたほうがいいだろうか？

◆爆弾リストのチェックを1つ消して

●矢を射って赤くする……………………187へ

●青のままにしておく……………………078へ

140

北へ進むと本線は間もなく西へカーブし、やがて支線への分岐ポイントに差しかかった。

●本線をこのまま西へ……256へ　●支線を北へ……222へ

141

ようやく静かになった部屋の中を見回したボクは、部屋の東側の壁に大きな岩がめりこんでいることに気づいた。
あの岩を取りはずすことができたら、奥へ行くことができそうだ。

●パワーグラブがあれば……368へ　●パワーグラブがなければ……108へ

142

ボクは、はぐれ者の村の中へ再び入った。
相変わらず荒れ果てた雰囲気のこの村で、何か得るものはあるだろうか？　話を聞くとすれば、例の2人組か、言葉をしゃべる木ぐらいしかないが……。おっと、あと1人、この村には、爆弾屋もいたんだっけ……。

●話す木のところへ……360へ　●2人組を探す……245へ
●爆弾屋へ行ってみる……169へ

ボクはビムの動きに注意して、壁の下に置かれたツボを抱えあげ、それを扉に向かって投げつけた。
すると、音をたてて扉が開く。扉の奥には、ゼリー状のブロックに囲まれた、レバーのようなものが見えた。光の世界の水の神殿でも見たことがある、あれは、水門を開くレバーだ。

143

●マジックハンマーがあれば……………198へ
●マジックハンマーがなければ……………184へ

144

地下へと降りたボクは、またもやソマリアの杖で移動用ブロックを作らなければならなかった。とはいっても、上とは違い、ここのロープは、西方向にまっすぐ伸びているだけらしい。
しかし、問題はロープの上をふわふわと漂っている、幽霊モンスターのヒュー！　ヒューの数は、数える気にもならないほどに多い。できれば、敵を一網打尽にできるボンバーメダルを使いたいところだが、ソマリアの杖をさんざん使ったので、残っている魔法力は温存しておいたほうがよさそうだ。

●31にチェックがあれば……………069へ
●31にチェックがなければ……………162へ

145

「ボンバーを使ってもいいけど……。やっぱり、魔法力がもったいないよなぁ……」
ボクは思いなおして一度取り出したボンバーメダルをポケットにしまうと、剣を構えてスカルロープたちに踊りかかった。

が、そのとき、ボクのふくらはぎを、1匹のスカルロープがガブ～～ッ!!
「いで～っ!!　このぉ!!」
必死の応戦の末、どうにかスカルロープを全滅させたボクの目の前に突如として宝箱が出現する。
名誉の負傷の末に宝箱から手に入れたのは、カギのかかった扉を開く小さなカギだった。
「は～びっくりしたぁ……。右のレバーにこんなワナがあったとはね……」
一息ついたボクは、今度は南の扉へと向かう。

◆カギリストの『小さなカギ』を1つチェックする。ハートをマイナス1して……………174へ

146

――ガノンの体が、水色に変色したとき、そのときが、この矢を打つチャンスです……。
とっさに、あの女神の言葉を思い出したボクは、銀の矢を弓につがえた。そして、ガノンにピタリと照準を定めると、力いっぱい引いた矢を離す!!
ビュウウウウウウウウン……。
勢いよく放たれた矢は、狙いどおりガノンの心臓に突きささった。
「うがあああああああああああああああああああ……」
世にも恐ろしいガノンの断末魔の悲鳴が、部屋中に響きわたる。が、それもしだいに小さくなり、やがて唐突にガノンの体はかき消えた。
「やった……のか……?」

本当にガノンを倒したのか信じられず、ボクは、その場にじっと立ちつくす。と——!!
『こちらへいらっしゃい……、リンク……』
ボクの耳に優しい声が届き、北側の壁の一部が崩れた。壁にできた穴の向こう側からは、ほのかな光が漏れてくる。
ボクは、引き寄せられるように、穴の奥へと進んだ。

⬇410へ

147

ボクはクリスタルスイッチをもう一度叩いて赤に戻すと、南側の扉からさらに奥へと進んだ。

⬇112へ

148

「でも、このシェイクメダル、亀岩と何か関係があるのかな……。あ〜っ!?」
手にしたばかりのシェイクメダルをじっと見ていたボクは、メダルに刻まれている模様を見て、思わず叫んでいた。そう、このシェイクメダルの模様は、亀岩のてっぺんにある石碑の模様と、全く同じだったのだ。
「わかったぞ!!」
ボクはシェイクメダル片手に亀岩まで走ると、再び岩の上によじ登り、石碑の前でシェイクメダルを掲げてみる。と——!!

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……。
地鳴りとともに地震が起こり、亀岩全体を大きく揺るがした。
やがて地震がおさまって、下へ降りたボクの目に映ったのは、亀の頭にあたる部分にぽっかりと口を開いた穴!!
これで、ようやく亀岩に入れるぞ!

⬇332へ

149

東の扉の向こうは、何もない部屋になっていた。唯一、カギのかかった扉が、南側にあるだけだ。

●小さなカギがあれば……………193へ
●小さなカギがなければ……………132へ

150

「ヒッヒッヒッ……、まだまだですよ～っ!!」
3人のアグニムは、ボクが苦しんでいるのを楽しむかのように、再び赤い球を放ってきた。
「くっ、今度こそ!!」

●右のアグニムの魔法を弾き返す……287へ
●左のアグニムの魔法を弾き返す……002へ
●中央のアグニムの魔法を弾き返す……………190へ

151

北へ行くと、間もなく石壁に突き当たってしまった。が、突きあたりにあったツボの中からハートのかけらを1つ発見。
これは、そのダンジョン内だけで使える、体力アップのアイテムだ。
「へへっ、ついてるじゃん！」
ボクはハートのかけらをゴクンと飲みこむと、水路をUターンし、さっきの角を西へ曲がってみることにした。

◆ハートを1つ増やして……………………………………176へ

152

3つのブロックに近づいて調べてみると、真ん中のブロックが動くことに気づいた。そこで、思いついて、真ん中のブロックを両脇のものと1列に並ぶように動かしてみると——。
突然、四隅のツボが消え、それと同時に東側の壁の一部が、扉のように開いた。
「隠し扉だったのか……。ブロックがスイッチがわりだったんだな……」
感心しながらボクは、東にできた扉の奥へと進む。
すると、宝箱が!!

◆38にチェックして
◉37にチェックがあれば……………087へ　◉37にチェックがなければ……………034へ

153

が、扉を開ける小さなカギを、ボクは持っていなかった。
「あるとすれば、北側の部屋だな……。よし、行こう」
●6にチェックがあれば……………388へ　●6にチェックがなければ……………200へ

154

望みをかけてツボの中をあさってみたが、案の定爆弾など入っていなかった。おまけに、ツボを探る際、うっかり防御が手薄になり、メデューサの火炎弾をおしりに受けてしまう。
「あぢぢぢぢぢ……！　くっそ〜、あったまくるダンジョンだなっ！」
ぷりぷりしながらボクは、部屋を後にした。
◆ハートをマイナス1して……………………………………278へ

155

ボクは弓に矢をつがえると、ガノンめがけて思いきり放った。
が――!!
カキ―――ン!!
矢は、ガノンの回す杖に弾かれ、方向を変えてボクの足につきささる。
「ふはははは……！　そんなものでワシにはむかおうとは、片腹痛いわ!!」

「くっ……!!」
ボクは足にささった矢を抜くと、ガノンを見据えたまま剣を構えた。

◆ハートをマイナス1して……………………………………………………041へ

156

ボクは、中央の扉の奥へと進んだ。

●小さなカギがあれば……………103へ　●小さなカギがなければ……………208へ

157

「に、20ルピーだね。……ちょっと待って……、え〜と」
ボクはポケットを探ると、水のほこらで見つけた20ルピーを出し、爆弾と交換した。
「まいど〜！　使い方はわかるよな？　そいつをしかければ、5秒後には爆発するぜ」
買ったばかりの爆弾2つを腰に下げたボクは、再びガーゴイル像のところから階段を降り、最初の部屋へと降り立った。

◆爆弾リストに2つチェックする。7のチェックを消して……………………062へ

158

「いいや、今は故郷を懐かしんでいるような場合じゃない!!」

ボクは、センチメンタルな気分を吹き飛ばすように首を振ると、城から闇の世界のピラミッドに戻り、はぐれ者の村へと向かった。亀岩のあるデスマウンテンへは、村の北側から行けることは、地図ですでに確認ずみだ。

⬇129へ

159

が、こっち側でやるべきことは、全部やった。スタルフォスを倒してマジックハンマーは手に入れたし、北にある奥の部屋で小さなカギももらった。念のため、もう一度部屋を隅から隅まで確認してみたが、やっぱり目新しいものは何もない。

「となると、どうすればいいんだっけ……？」

ボクは水路に出ると、手のひらにあるコンパスとダンジョンの間取りをかわるがわる見つめた。

●水路を北へ直進する…………060へ　●西の扉に入る…………020へ

160

そして、溝の向こう側には、フックショットで渡るのにおあつらえ向きの宝箱が。さっそく渡って宝箱を開けると、中から小さなカギが出てきた。

◆51にチェックがあれば…………380へ　●51にチェックがなければ…………401へ

161

東の扉を開け、さらに奥へ進むと、今度は北と南に扉がある部屋に出た。このうち南の扉は、赤いブロックに囲まれている。

●25にチェックがあれば……………056へ
●25にチェックがなければ……………115へ

162

「よし、ここは地道に倒していくしかないか」
ボクはブロックの上に乗ってロープを西へと進みながら、襲いかかってくるヒューを剣で1匹1匹倒していった。
大量のヒューを相手に無傷ではいられなかったが、それでもようやく全滅させる。

◆ハートをマイナス1して……………114へ

163

ボクは右のレバーを選ぶと、思いきって引っぱった。ヤマカンは大当たり。扉は、ズズズ……と音をたてて口を開く。

⬇026へ

164

ボクはボンバーメダルを取り出すと、高く掲げて祈りを捧げた。たちまちあたりに大爆発が起こり、

すべてのポーンを焼きつくす。
やがて、ポーンが灰になって全滅したあとには、爆弾と緑の薬が1つずつ、床に落ちていた。
「ラッキー！　これでもう1回メダルが使えるぞ！」
爆弾を腰ひもにくくりつけたボクは、緑の薬を一気にあおって魔法力を回復。ほかには何もないことを確認して、部屋を後にする。

◆爆弾リストに1つチェックする。45にチェックして……………………………278へ

165

奥へと進んだボクの目に映ったのは、水をなみなみと湛えた大きなプールだった。
プールサイドのような高台が四方にあるが、このうち奥へ進む扉のある東側の高台だけが、独立して離れている。
とはいえ、水さえあれば、泳いで東の高台へ行くことは、もちろん可能だ。
「さっき開いた水門は、ここに水を張るためのものだったんだな……」
周囲のようすを確認し終えたボクは、さっそく水に飛びこむと、泳いで東側のプールサイドに渡り、扉を開けて奥へと進む。
すると、今度の部屋も、中央の凹地に水が注がれたプールになっていた。プールの中には、アメンボのような形をしたモンスターのホーバーが2匹、スイスイと泳いでいる。プールサイドの北側には、さらに奥へと続く扉が見えるが……。

●扉の向こうへ急ぐ……………………092へ　●プールの中に入る……………………128へ

166

大きな爆弾のことが気になって、ボクは爆弾屋を訪ねてみた。
が、留守で、店の扉にはカギが……。
「そういえば、旅してるって言ってたよな……」
しかたない、とにかく今は、デスマウンテンへ急ごう。

⬇195へ

167

ボクは、コッピとの対決を避け、足場から思いきって下へ飛び降りた。ワープした先は、カランメイダの廊下だったが、すかさず鏡の盾をかざしてビームを避ける。
「ワープしてラッキー！」
そのまま廊下の奥の階段へ行き、地下へ戻ったボクは、再びソマリアの杖でブロックを作り、ロープを西へと伝っていった。

⬇095へ

168

ボクは右側のレバーに近づくと、ためらわずに引いた。
すると――!!

サカサカサカサカサカサカサカサカサカサカ……。
いきなり天井から、大量のヘビ型モンスター、スカルロープが降ってきた。まともに戦っていたら、けがすることは間違いなさそうだ。

●ボンバーメダルを使う……126へ
●剣で戦う……145へ

169

ボクは、町の南にある爆弾屋を訪ねた。すると、大砲のような顔をした店の主人が、いきなり「あんたは？」と訪ねてくる。

●54にチェックがあれば……311へ
●54にチェックがなければ……121へ

170

赤いブロックは、すべて床と同じ高さに下がっていた。
ボクは宝箱にしまわれていた小さなカギをポケットに入れながら、さっきのクリスタルスイッチのことを思い出す。
「なるほどなぁ……、 さっきのクリスタルスイッチを赤くしていたら、このブロックが上がっていたわけだ。すると、どこかに青いブロックがあるかもな。クリスタルスイッチを青くすれば、青いブロックが上がっているってことだ。覚えておかなくっちゃ……」

◆カギリストの『小さなカギ』を1つチェックして……094へ

171

娘たちの力でダンジョンの外へワープさせてもらったボクは、悪魔の沼から脱出するため、マジカルミラーを使って一度光の世界へと戻った。そして、オカリナで風見鶏を呼び、闇の世界への通り道がある城へ向けて飛ぶ。

が、その途中で、ふとカカリコ村に寄ってみようかという気になった。

もちろん、今は一刻を争うとき。

あまりゆっくりしてもいられないが、ガノンとの戦いを間近に控え、故郷の村を目に焼きつけておきたかったのだ。

●カカリコ村へ行く……………………185へ
●城へ急ぐ……………………………158へ

172

「食らえっ！」

ボクはポケットからボンバーメダルを取り出すと、それを高く掲げて祈った。とたんに爆発音が轟き、真っ赤な炎がバズたちを焼きつくす。

間もなく敵は全滅し、部屋の中央にハートのかけらが1つ残った。このダンジョンの中でのみ使える、いわば使い捨ての体力回復アイテムだ。

手に入れたハートのかけらを飲みこむと、ボクは今度は右のレバーをグイッと引いた。とたんに北側の扉が、音をたてて開く。

◆ハートを1つ増やす。16にチェックして……………………026へ

173

一見、何もないような部屋が気になって、壁をこつこつ叩いたりしていると、突然、ゴソリと物音が聞こえた。

慌てて振り向くと、扉の両脇の彫像が、壁からズルッと抜け出してくる。こいつらは、氷のモンスターのタイノンだ!!

「やっぱりな！　絶対に何かあると思ってたよ！」

ボクは冷静にファイアロッドを取り出すと、2匹のタイノン向けて連射！　タイノンの氷の体が溶け、やがて蒸発すると、東側の扉が音をたてて開いた。

「そういうわけだったのか。部屋を調べてよかった……」

ボクは、ファイアロッドを収めて奥の部屋へと足を踏み入れる。しかし、そこはゴムのような弾力のある甲羅をもつポーンの巣窟となっていた。

その数、ざっと計算して10匹はいるだろう。

「こ、こりゃあ、魔法メダルのお世話になったほうがよさそうだ……」

ボクはポケットに手を入れ、メダルを探る。

●ボンバーメダルを使う……………164へ　●シェイクメダルを使う……………116へ

南の扉は、カギのかかった扉だった。

174

●小さなカギがあれば……………383へ
●小さなカギがなければ……………153へ

175

Eの扉の前に立ったボクは、蝙蝠のカギをカギ穴へと差しこんだ。カチャリと音をたててカギ穴が回ると同時に、大きな扉がゆっくりと開く。

その中でボクを待っていたのは――!?

「よくぞここまで参られました、リンク殿……。もう一度お会いできて、私、とてもうれしゅうございますよ、……ヒッヒッヒッ……」

なんと、そこにいたのはガノンではなく、光の世界で倒したはずの、あの闇の司祭アグニムだった。

「なぜ、おまえがここに!? ガノンはどこだ、どこにいるんだ!?」

しかし、アグニムはボクの問いに答えず――。

「ヒッヒッヒッ……、もう二度とお会いすることはないでしょう。なぜならリンク殿、あなたはここで死ぬ運命だからです! くたばれ～っ!!」

そういうと、いきなり呪文を唱えた。

⬇344へ

176

西へ向かってしばらく歩くと、やがて水路は北へ折れ、再び西へとクランクした。ほかに分かれ道もないので、道なりにどんどん進んでいくと、ようやく北への分岐点が見えてくる。

●北へ行ってみる……………………101へ　●このまま西へ進む……………………070へ

177

今度は何をする気なのかと、思わず身構えたボクの見ている前で、ガノンの姿が突然消えた。と思う間もなく、いきなりボクの背後に出没する！

「な、なんだっ!?」

すんでのところで身をかわしたボクに、ガノンは再び高笑いをした。

「ふははははははは……、ワシの高速移動の術、おまえに破れるか!?」

そう言いながらガノンは、再び姿を消す。

ボクは油断なく剣を構えた。せめてガノンの出没位置がわかればいいのだが、そう簡単に見破れるはずもない。

「……となれば、あとは運のみっ!!」

◆対LBバトル表で対戦します。リンクはB、ガノンはC

●リンクの数値のほうが大きい…………266へ　●ガノンの数値のほうが大きい…………249へ

178

「ひ、ひょっとして、お金ないの？　1ルピーも……？」
ボクが文無しと知って、爆弾屋はちょっと呆れたような顔をした。が、ボクの必死な形相を見て気の毒に思ってくれたのか、ついてこいというふうに後ろを指差すと、裏口に回る。
「ったく、ルピーも持たずに店を訪ねるとはいい度胸だぜ。だが、あんた、わけありだろ？　だったら、ちょっと手を貸しな」
そう言うと爆弾屋は、裏口に山ほど積んである爆弾を、すべて店の倉庫にしまうように命じた。店の手伝いをすれば、爆弾をくれるという約束で……。
ボクはせっせと爆弾を運び、代償として爆弾を2つ受け取った。
「悪いな。この世界で生きてく以上、商品をタダでやるわけにゃいかんのよ。わかってくれよな」
「もちろんだよ！　ありがとう。じゃあね！」
もらった爆弾を腰にぶら下げると、ボクは爆弾屋に礼を言い、その足で村のダンジョンへと戻った。店の手伝いでかなり疲れてしまったけど、泣き言を言ってる場合じゃない。最初の部屋へ降り立ったボクは、東と南の扉を見比べた。

◆爆弾リストに2つチェックする。ハートをマイナス1して……………………062へ

179

小さなカギを使って扉を開くと、堅い鎧と立派な盾を身にまとった巨大なモンスターのデグアモス

が、6匹並んでボクの前に立ちふさがった！
思わず息を飲んだボクを横目に、デグアモスたちは輪になると、そろって足踏みを始める。
ドス、ドス、ドス、ドス、ドス、ドス……。
足音を響かせて、部屋の中をグルグルと回りはじめるデグアモス軍団。ただ行進するだけで、何も声を発しないところが、いっそう不気味だ。

◆カギリストから『小さなカギ』を1つ消して
●輪の中に飛びこみ攻撃をしかける……356へ
●部屋の隅でじっとしている……398へ

100

西に向かってどんどん進んでいくと、水路は北に折れ唐突に終わった。
取りつけられていたハシゴを使って水路から高台に登ったボクは、あらためてあたりを見回した。
高台の東側には、次の部屋へと続くだろう扉が見える。が、高台は南側にも伸びていて、その奥には何があるのかよく見えない。

●東の扉の奥に入る……372へ
●南へ行ってみる……339へ

101

が、そこは、小さなカギで扉を開け、マジックハンマーを使って水門を開いたあの部屋だった。
「別に、ほかにめぼしいものはないよなぁ。うぅ～ん……。出よう……」

●今度は水路を北に直進する……………060へ　●今度は東の扉へ入る………………016へ

182

赤いブロックは、ボクの身長の2倍はある高さで、とても乗りこえられそうにない。
でも――。ボクは、ブロックの隙間から見える宝箱に目をやり、ふと思いついて、さっきの部屋に戻った。
だから、この赤いスイッチを青くすれば……。クリスタルスイッチは、ブロックと連動している。
「ははは！　やっぱりだ!!」
クリスタルスイッチを切りかえて宝箱の部屋に戻ったボクは、赤いブロックがすべて、床と同じ高さになっているのを見た。
「なるほどなぁ……。クリスタルスイッチが赤ければ、赤いブロックが上がっているってわけか。すると、どこかに青いブロックもあるかもな……」
宝箱の中にしまわれていた小さなカギをポケットに入れ、ボクはしばし感心する。

◆カギリストの『小さなカギ』を1つチェックして……………………094へ

103

ボクはギリギリまで炎の鳥を引きつけると、猛ダッシュで広間を移動した。鳥たちは、慌てたように方向を変えてくるが、ボクの先回りをしようとまでは考えつかないらしい。
「ガノン！　おまえのかわいい鳥たちには、知恵が足りないみたいだな!!」
ボクの言葉に、ガノンがギリリと歯ぎしりをする。

⬇220へ

104

が、水門を開きたくても、ゼリー状のブロックがじゃまをして近づけない。となると、このブロックをどうにかするアイテムが必要ってわけだ。
ボクはとりあえずこの部屋を出て、水路まで戻ることにした。

●今度は水路を北へ直進する……060へ
●今度は東の扉へ入る……016へ

105

ボクは、懐かしいカカリコ村へ降り立った。
沼のダンジョンへ行く前に、酒場のおじいさんのところは訪ねたが、あのときは少年の願いを叶えることで精いっぱいで、村の景色を楽しんでいる余裕はなかった。今も、事態はさし迫っているが、少しぐらいの時間なら、神様も許してくれるだろう。
男所帯だったボクとおじさんの健康を心配して、料理を作ってくれたおばさんの家、いつも大人の

男たちで溢れていて憧れの場所だった酒場、ハイラルの歴史を勉強しにいった図書館、友達と遊んだ風見鶏の広場……。
あの風見鶏が飛ぶなんて、あの頃は考えもしなかったっけ……。
ボクは、限られた短い時間を使って、村の風景をできる限り胸に刻みこんだ。

●7にチェックがあれば……133へ　●7にチェックがなければ……215へ

186

「……そういえば、さっきあの穴の向こうで見つけたウィズローブ、やっぱり、倒しておいたほうがいいかもしれないな……」
面倒だからと放っておいた敵だけど、倒せるものは倒しておいたほうがいい、というのが、この世界のダンジョンの掟であることは、経験上知っている。
ボクは思い直して、爆弾で開けた穴をくぐると、向かってきたウィズローブたちを睨みつけながら剣に力をためた。
意外なことに敵には体力がなく、ボクの放った回転斬りの一撃で、あっさりと倒れてしまう。
「な～んだ、そんな恐れることなかったな……」
と、そのとき、どこかでコーンという乾いた音がした。何が起こったのかと高台の周囲や穴の向こうの通路を確認してみたが、別に変わったことはない。
「変なの……、気のせいかな……」

ボクは首を傾げながら、中央の通路を後にした。

◆**50にチェックして**…………………………………………**216へ**

107

結局ボクは弓矢を使い、クリスタルスイッチを赤くすると、その部屋を後にした。入り口の部屋まで戻る途中で確認してみると、小さなカギのあった部屋の赤いブロックは上がり、その前のゾルがいた部屋のクリスタルスイッチは、赤に変わっていた。

「へぇ……、このダンジョン内のクリスタルスイッチとブロックは、すべて連動してるんだな」

感心しつつ入り口の部屋まで戻ったボクは、今度は東の扉へと向かう。

◆**25にチェックして**…………………………………………**149へ**

108

この扉の奥では、鏡の盾をすでに入手しており、ほかにやるべきことはない。ボクはそのままロープを南へ行き、本線のポイント分岐まで戻った。

●**本線を西へ**……………**256へ**　●**本線を東へ**……………**065へ**

109

ゾルなんかにかまってる場合じゃない。

ボクはそう考えると、奥の扉に向かって走った。が、扉に手をかける寸前で、ふと、横にある奇妙なものに気づく。
「ん？　これはなんだ？」
ボクが目をつけたのは、部屋の隅に置かれている赤く輝くクリスタルの玉。台座のようなもので床に固定されているらしい。
ためしに玉を叩いてみると、今まで赤かった色が青に変わった。
『それは、クリスタルスイッチよ。床に埋めこまれている色つきのブロックが、それで上下するの』
娘たちが、その玉の意味を教えてくれる。
「……とすると、このクリスタルスイッチは、どうすればいいかなぁ……？」

●赤い色にする……………………147へ
●青い色のままにしておく…………043へ

190

ボクは、中央のアグニムが放った球を、剣で弾いた。いや、弾き返そうとした。
が、それは幻の球だった。
幻の球が剣を素通りして消え去った瞬間、本物の放った赤い球が、ボクの体を直撃する！
「うぐっ……!!」

◆ハートをマイナス1して
●ハートの残量が0なら……………406へ
●ハートの残量が1以上あれば………150へ

191

が、いくら人の顔を持っているとはいっても、しょせんは木。何かを話してくれるはずもない。
しかたなくボクは、広場へと戻る。

⬇271へ

192

支線を北へ向かうと、ほどなくBと書かれた扉のある足場に着いた。

◆36と37にチェックは？

●どちらにもない……274へ　**●36にのみある**……293へ
●両方にある……328へ

193

小さなカギを使って扉を開けると、東側に別の扉がある部屋に出た。が、ひときわボクの目を引いたのは、南側にある大きな溝と、その奥の高台にある宝箱。
「あ、あの宝箱は、さっきの……」
そう、それは、さっき2種類のブロックとクリスタルスイッチで悩んだあの部屋の、北側の高台にあった宝箱だったのだ
残念ながら宝箱は、部屋を分割するような深い溝の向こうの、しかも高台にあるので、フックショットでも渡れそうにない。

「しかたない、とりあえずは先に進むか……」
ボクは宝箱をあきらめると、部屋の東側にある扉から、奥へと向かうことにした。

◆カギリストから『小さなカギ』を1つ消して……………………161へ

194

さっきは、クリスタルスイッチを青のままにしておいたが……。

●矢で赤くする……………………224へ　●青のままにしておく……………………235へ

195

村の北側から、デスマウンテンへの険しい山道を登りはじめると、間もなく、溶岩の川が行く手をふさいだ。
ちょっと考えるとボクはアイスロッドを取り出し、自分が通る部分の溶岩だけを凍らせる。熱い溶岩は、たちまち凍った部分を飲みこんだけれど、ボク1人が通るには充分な時間があった。
途中にも幾つかの難所があったが、これまで手に入れてきたフックショットやマジックハンマー、パワーグラブなどを使い、ボクは順調に頂上へたどりついた。
「ええと……、ここから山の尾根をずっと東へ歩いていくと、ガノンの塔や亀岩があるんだな」
地図を確認したボクは、尾根沿いの道をさらに東へ。
と、途中の崖下に、気になる岩棚を発見した。尾根から崖を慎重に降りれば、なんとか行けそうだ

が……。

「う〜ん……。でも、見たところ、洞窟みたいなものもなさそうだしなぁ……」

●岩棚に降りてみる……………109へ　●やめておく……………118へ

196

ところが、先に進んでまたまた仰天！　今度は赤いブロックが、ボクの行く手を阻んでいたのだ。

「え？　どこかにクリスタルスイッチなんてあったっけぇ？」

ボクは慌てて地下2階に戻り、高台の通路のスタート地点にあるハシゴの下で、ようやくクリスタルスイッチを発見する。赤く輝くスイッチを青に切りかえたら、その足で地下3階へダッシュ！　床に埋まった赤いブロックを踏み越えて、さらに奥へと進む。

すると、右側の壁に、大きなカギ穴のある扉が見えてきた。

「やった！　やっとボスの部屋だ!!」

●目玉のカギがあれば……………255へ　●目玉のカギがなければ……………244へ

197

「ええいっ！　食らえっ!!」

ボクはアイスロッドを素早く振るった。

が、その瞬間パメットは甲羅の中に潜りこみ、守りの体勢に入ってしまった。

当然ながら凍ったのは、堅い甲羅のみで、すぐに甲羅から顔と手足を出したパメットは、ボクに向かって体当たりを食らわしてきた!!
ど〜んと思いきり突き飛ばされて、ボクは壁に全身を打ちつける。
「いて〜っ!!　……くそぉ、見てろ!!」

◆ハートをマイナス1して……………………………030へ

198

ボクは、腰ひもにつけたマジックハンマーを手にすると、目の前にあるゼリー状のブロックをまずは1つ、ベコッと叩きつぶした。
けっこうおもしろいんだな、これが。
水門のレバーに近づくには、これで充分だけど…。そんなわけでとりあえず……、全部叩いちゃお〜っと!!
「……は〜、おもしろかった!!」
ブロック叩きを満喫したボクは、ようやく水門のレバーに近づくと、力いっぱいレバーを押し下げた。すると、どこかでゴゴゴゴ……と、水の流れる音が!!

◆3にチェックして

●5にチェックがあれば…………048へ　●5にチェックがなければ…………110へ

199

敵も炎を放ち、必死で反撃してきたが、アイスロッドの攻撃の前に、ついに力尽きた。ガクリと首をうなだれた赤首の亀は、やがて大爆発を起こして消え去る。

⬇135へ

200

扉を開けて北の部屋に入ると、突然、今入ってきたばかりの扉が閉まった。
「わ、なんだなんだ!?」
慌ててもとの部屋に戻ろうとしたが、扉は、頑として開こうとしない。しかたなくボクは、閉じこめられた部屋の中を見回した。
すると、扉の両脇に、レバーがあることに気づく。
「はは~ん、なるほど。どちらかのレバーを引っぱれば、扉が開くってわけだな……」
考えた末ボクは、左のレバーを引っぱってみる。
すると、みごと扉が開いた。
「……とすると、こっちの右のレバーはなんだ?」

●右のレバーを引いてみる……………168へ
●右のレバーは無視して部屋を出る……023へ

201

南の通路の奥は、思ったとおり行き止まりだった。

ただし、壁と思っていたのは実は高台で、その上に、2匹の魔法使いモンスター、ウィズローブの姿があった。
ウィズローブは、自在に動く波動の魔法で遠距離攻撃してくるいやなヤツらだ。こっちにも、弓矢という飛び道具はあるが、真っすぐにしか飛ばない矢が、果たして高台にいる敵を撃ち落としてくれるかどうかは疑問。
ここは、退散したほうが利口かも。

◆48にチェックして
●退散する……………038へ　●矢を射ってみる……………336へ

202

飛びかう岩の間をくぐり抜けたボクは、ワートの本体に向けて剣を繰り出した。ガツッと確かな手応えが感じられる。が、次の瞬間!!
ビュン、ビュウン……ピシイッ!!
飛びかっていた岩が、一斉にボクに襲いかかってきた。岩の総攻撃を受けたボクは、壁に思いっきり叩きつけられる。

◆ハートをマイナス1して
●ハートの残量が0なら……………279へ　●ハートの残量が1以上あれば……………253へ

203

「やっぱ、やーめよ。必要があったら、戻ってきて切りかえればいいや……」
結局クリスタルスイッチをそのままにし、ボクは部屋を後にした。

⬇310へ

204

ボスの部屋に入ったが、魔物の気配はどこにもなかった。
ただ、上のフロアの床――つまりこの部屋の天井にあたる部分に爆弾で穴を開けたので、地上の光が差しこんでいる。
「それにしても、どうしてボスがいないんだろう……」
ボクは、少女の手を引きながら、部屋の中央の明るくなっているところまで足を進めた。
と、そのとき――!!
「ギャ――――ッ!!」
少女が、世にも恐ろしい悲鳴をあげてうずくまった。
「ど、どうしたんだい？　いったい何が……？」
慌てて少女のそばにかがんだボクは、次の瞬間、顔をひきつらせる。なんと、ボクの目の前で少女の姿がみるみるうちに、不気味な魔物へと変化していったのだ!!
「うぐぐ……くっくっくっ……。キサマをだまして、息の根を止めてやろうと思っていたが、隙がなくてこんなところまでついてきてしまった。上のフロアの床を壊したのはさすがだったな。いかにも、

オレ様こそが、光を嫌う盗賊ブラインドだ〜っ!!」

光を浴びてすっかり正体を現わしたボスのブラインドは、猛烈な勢いで部屋中を飛びまわりはじめた。

矢を命中させるのは難しいと考え、ボクは剣を握りしめる。

●回転斬りで攻撃……313へ　●普通に攻撃……261へ

205

ボクは、北側の扉の奥へ足を踏み入れた。

●47にチェックがあれば……071へ　●47にチェックがなければ……308へ

206

村の東に向かうと、不気味な姿をした大木が、1本だけ立っていた。大木の太い幹から伸び、途中で切られた枝の痕が、まるで人の顔のように見える。

●11にチェックがあれば……283へ　●11にチェックがなければ……191へ

207

しかたなくボクは地下2階へ戻り、さっきは行かなかったハシゴの下へ行ってみた。すると、突きあたり近くに、火の灯っていない灯篭を発見!

「火のない灯篭には、火を灯してあげるのが正解だよなぁ……」

ボクは、ファイアロッドを取り出すと、4つの灯篭全部に火を灯した。と、まるでそれを待っていたかのように、突きあたりに宝箱が現れる。

中から出てきたのは、木でできた大きな杖で……。

『……それは、ソマリアの杖。ブロックを作り出すことができるの。できたブロックは、重しにしたり、場合によっては乗って移動の手段にしたりもできるわ』

手に入れた杖の使い方で悩んでいると、不意にクリスタルの娘の1人がそう言った。

「わ！　びっくりした!!　今まで黙ってたから、ボクの中にいることを忘れてたよ」

『ふふ……、ごめんなさい。でも、ダンジョン内では、なるべくリンクのじゃまにならないようにしているの。わたしたちが口を出すのは、今みたいに、リンクが本当に困ったときだけ』

確かに今、ボクは困っていた。この杖はひょっとしたら、勇者が老人だった場合に備えてあるものなんじゃないかと、本気で思ったぐらいに……。

ボクは、ちょっと顔を赤らめながら来た道を引き返すと、再び地下3階へ戻った。

◆アイテムリストの『ソマリアの杖』にチェックして……345へ

208

扉の奥には、西に向けて真っすぐ伸びる通路があった。
通路は、しばらく登り坂になっていたが、登りきったところで今度はゆるやかに下り、やがてカギのかかった扉で行き止まる。しかし、小さなカギを持っていなかったボクは、しかたなく通路を戻ることにした。

◆**49と50のチェックは？**
●**どちらにもない**……………**312へ**　●**49にのみある**……………**186へ**
●**両方にある**……………………………………………………………**367へ**

209

通路を北へ進み、突きあたりの角を道なりに西へ折れると、前方から2匹のヒップループが並んで猛スピードで突進してきた。
敵は、堅い甲羅の仮面で身を守るモンスター。
4本の足をせかせかと動かし、頑丈な頭を向けてすでに戦闘体勢はバッチリ。
「あいつらが相手じゃ、フックショットなんかも意味ないだろうなぁ」
●**矢を射ってみる**……………**269へ**　●**アイスロッドを使ってみる**……………**238へ**

210

本線を東へしばらく進むと、またもや支線へのポイント分岐に差しかかった。このまま東へ進むか、支線を北へ行くかだが……。

●本線を東へ……………………065へ　●支線を北へ……………………222へ

211

「どうせツボの中身なんて空っぽなんだ……」
ボクはツボには目もくれず、右側の扉に向かった。
が、これが正解！
なんと、ボクが扉にたどりついたとたん、部屋の床が端っこから崩れはじめたのだ。
「ひゃ～、ツボなんか取りにいかないでよかった……」

⬇263へ

212

「トラップごときに怯えてなるものかっ!?」
ボクは叫ぶと同時に宝箱に飛びつき、中から小さなカギを取り出した。が、当然ながらバブルの餌食となり、魔法力のほとんどを奪われてしまう。
「……別にいいんだ。魔法が少なくたって戦えるさ……」
自分で自分をなぐさめると、ボクは南側の扉から外へ出てみた。するとそこが、Bと書かれた扉で

あることに気づく。
「ふ～ん、AとBは、こんなふうにつながっていたんだ。すると、CとDも同じかも……」
そう考えるとボクは、カギの必要な扉――Cの扉へと、ロープを伝って移動した。
◆カギリストの『小さなカギ』を1つチェックする。53にチェックして…………**371へ**

213

が、ボスの部屋は相変わらずもぬけのからだった。しかたなくボクは、もう一度上のフロアへ戻ることにする。
⬇335へ

214

ボクの持っているこの小さな盾じゃ、とてもじゃないがカランメイダのビームを弾き返すことなどできない。
進んでも、盾を壊され、命を落とすのが関の山だろう。
ボクは、廊下を進むことをあきらめると、扉の向こうに戻った。そして、ソマリアの杖で移動用ブロックを作り、再び本線へと戻る。
●本線を北へ…………**140へ**　**●本線を南へ**…………**059へ**

215

「……これで、もう思い残すことはない……」
ボクは、踵を返して村を出ると、村の西側にある城へと向かった。そして、光と闇をつなぐ通り道から闇の世界のピラミッドへ戻り、はぐれ者の村へ。亀岩のあるデスマウンテンへは、村の北側から行けることは、地図上ですでに確認ずみだ。

⬇129へ

216

南北に伸びる通路まで戻ってきたボク。
次はどうしようかと、3つの扉を見比べる。

●北側の扉に入ってみる……205へ
●南側の扉に入ってみる……227へ
●中央の扉に入ってみる……156へ

217

剣を構えて力をためたボクは、そのまま岩に突撃した。
「食らえ〜〜〜〜〜っ!!」
ところが、その瞬間岩たちは、再びぱっと散り、ボクめがけて総攻撃!! ワート本体に近づけば、こうなるのは当然予測できたのに、なんだってボクはバカなマネを……。
そう反省したのも束の間、ボクは岩たちの強大な威力で、カベに叩きつけられる。

◆ハートをマイナス1して
●ハートの残量が0なら…………………279へ　●ハートの残量が1以上あれば…………286へ

218

バリのいたBの扉の奥は、赤いブロック列で2つに仕切られた部屋だった。
ブロックの向こう側に赤く輝くクリスタルスイッチがあるが、ブロックがじゃまをして、矢で切りかえることができない。
クリスタルを青くするなら、ブロックの向こうへ爆弾を投げ、爆風を利用して切りかえるしかないが。
「そうまでして、スイッチを切りかえる必要、あるかな?」
なにしろ、ブロックの向こう側には、宝箱はおろか、ツボひとつないのだが……。
●爆弾でクリスタルを青くする………289へ　●クリスタルは赤のままにしておく……203へ

219

「……そっちだ!!」
ボクは力をためると、回転斬りで左のブラインドに突撃した。が――!?
「ふはは……、残念だったな!!」
背後で声がしたかと思うと、突然、背中に鋭い痛みがはしる。偽物に気をとられているボクに、本

物のブラインドが、手刀を食らわせてきたのだ!!

◆ハートをマイナス1して

●ハートの残量が0なら……346へ　**●ハートの残量が1以上あれば……304へ**

220

鳥たちの猛攻を避けながら、一撃、また一撃と剣を振るっていると、ガノンは突然ジャンプをした。

次の瞬間、部屋全体を震わせながらガノンが着地をすると、炎の鳥が姿を消し、同時に、振動で部屋の四隅にあった灯篭が、すべて消えてしまう。

「な、なんだっ!?」

突然の真っ暗闇に慌て、火をつけようとファイアロッドを取り出したボクは、ハッと我に返った。

――ガノンはこの暗闇の中で、ボクを確実に狙っているはずだ。むやみに動いてはいけない。ガノンの考えを先読みし、攻撃を受けないように火を灯さなければ――。

ガノンがジャンプしたのは部屋の北側だった。

そして、ボクが今いるのは南側。

ガノンは北から、ボクのいる南に向け、足音を忍ばせて近づいてこようとしているはずだ。

「……よし!」

ボクは精神を集中させ、素早く動いた。

●南側にある灯篭から火をつける……012へ　**●北側にある灯篭から火をつける……303へ**

221

ところが――。

「……そちらは、わたしの入っていた牢屋があるだけだと思うのですが……。わたし、もうあそこには戻りたくありません……」と、うしろについてきていた娘さんがポツリ。

「そ、そうだよね。あんなところ、戻りたいわけないよなぁ……」

ボクとしたことが、失敗、失敗！

↓335へ

222

ポイントから北へ方向を変えると、間もなくCと書かれた扉のある足場に到着した。

◆38と39にチェックは？

●どちらにもない……………………073へ
●38にのみある……………………124へ
●両方ともある……………………188へ

223

奥へと進むと、足もとに、床に埋まった赤いブロックがあることに気づいた。

「さっき、切りかえておいてよかった……」

ホッと胸をなでおろし、ボクはさらに奥へと進む。

すると、右側の壁に、大きなカギ穴のある扉が見えてきた。

「やった！　やっとボスの部屋だ!!」

●目玉のカギがあれば……………255へ
●目玉のカギがなければ……………244へ

224

ボクは考えた末、矢を放ってクリスタルスイッチを赤くした。たちまち赤いブロックがせり上がり、ボクとクリスタルスイッチの間をふさぐ。

「これでよし。青にする必要が出てきた場合は、そのとき考えりゃいいさ。……さ、戻ろう」

◆44にチェックして……………278へ

225

ボクは、村の南へ行ってみることにした。カカリコ村なら、このあたりに、ボクとおじさんの暮らしていた家があるのだが……。

「う～ん、店があるけど留守みたいだな……」

表に、爆弾の絵が刻まれた立て札のあるその家は、カギがかかっていて入れなかった。

「しかたない、広場に戻ろう」

⬇271へ

226

分かれ道を北へ向かってさらに歩いていくと、高台の下へ降りるハシゴと下のフロアへ行く階段が、高台の左右で向かい合っている場所に出た。

東側がハシゴ、西側が階段だ。

「沼のダンジョンは、沼の中にあるわけだから、入り口を入ったらそこはもう地下って考えていいんだよな。……ってことは、ここは地下2階で、階段を降りると地下3階になるわけか……」

●ハシゴで高台を降りる……242へ

●地下3階へ行く……257へ

227

南の扉(とびら)を開け、その奥へ入ると、中央に大きな溝(みぞ)のある部屋がボクを待っていた。

◆50と52にチェックは？

●どちらにもない……008へ

●50にのみある……160へ

●両方ともある……027へ

228

ボクは弓を引き絞(しぼ)ると、タイノンめがけて矢を放った。ところが、タイノンは矢の攻撃などものともせずに、ボクに接近をはかり、氷の息で攻撃！

「うっ!?」

ものすごい冷気にさらされ、ボクの意識が一瞬遠のく。
「くっ……、弓矢じゃだめか!?」
◆ハートをマイナス1して
●ハートの残量が0なら……………246へ　●ハートの残量が1以上あれば……………297へ

229

さっき、Aの部屋で見つけた小さなカギを使って扉の奥へと入ったボクを待っていたのは、真っ赤なボディを持つバリ!!
時折全身から電気を放つ、クラゲのようなモンスターだ。
ボクは剣を振りかぶると、バリに向かって斬りつける。
すると、バリはいきなり2つに分かれた。
「ど、どんな体の構造をしてるんだ!?」
小さくなったバリは、そのぶん動きがより速い。
◆カギリストから『小さなカギ』を1つ消す。36にチェックして
●接近し剣で攻撃……………260へ　●弓矢で攻撃……………282へ

230

「よし、これでボスの部屋を開けられるぞ!」
ボクは地下3階目指して走り、再びボスの部屋の前に立った。

⬇255へ

231

東側の扉から奥へと進むと、北側に別の扉のある部屋に出た。
横にあるボタンを押すと、扉は開き、思ったとおりDの扉のある足場へと出る。が、外へ出る前に、この部屋でしなければならないことが1つあった。それは、部屋の奥にある宝箱の中身を手に入れることだ。
とはいっても、宝箱にたどりつくには、部屋を横切る真っ赤な溶岩の川を渡らなければならない。
「なんだって、こんな部屋の中に溶岩の川があるんだ……?」
ボクは、湯気の立ちのぼる真っ赤な川をじっと見つめた。
デスマウンテンを登る途中でやったように、アイスロッドで川を凍らせるか、それとも宝箱にフックショットを打ちこんで渡るか……?

●アイスロッドで凍らせる……………067へ　●フックショットで渡る……………………111へ

232

村の西側を歩いていると、奇妙な姿をした2人組に出会った。

1人はボールのようなコロコロした形をしていて、その人を、もう1人キツネのような姿をした人が蹴飛ばして遊んでいる。彼らは、マジカルミラーを持たずにこの世界に来てしまった人たちだと、ボクは判断した。
マジカルミラーなしで闇の世界に入ると、その人の心の奥にある本性が、そのまま形になって現れるのだと、以前長老に聞いたことがある。
2人組は、ボクの姿を見つけると、目をパチクリさせて近づいてきた。
「ひゃ～、おまえ、この世界に来ても姿が変わらないなんて、スゲエなぁ」とキツネが言うと、
「ひょっとして伝説の勇者じゃないかい？　村の爆弾屋の持ってた本に書いてあった」と、ボールがボクを見上げる。そして、2人でなにやらひそひそと話すと、再びボクに向き合った。
「おまえが勇者かどうかは、あえて聞かねぇよ。ただ、本当に勇者なら……」
「キミは、この世界からおいらたちを救ってくれる人かもしれないよね。……ねぇ、行き先に困っているなら、村の東にある大きな木に体当たりしてごらんよ。きっといいことあると思うよ」
「それ、本当かい？　ありがとう!!」
ボクは2人組に礼を言うと、東に向かって歩きはじめた。

◆11にチェックして……………………………………206へ

233

ボクは、青首の亀をじっと睨みつけた。
氷を吐く敵といえば、使うべき武器は当然ながらファイアロッド！
ボクは素早くファイアロッドを取り出すと、青い首の亀に向けて連射した。敵も反撃とばかりに氷の粒を放ってくるが、右に左にとかわしながらファイアロッドをひたすら振りつづける。
やがて、敵は力尽きたように首をうなだれた。
そして突然大爆発を起こし、跡形もなく砕け散った。

◆40にチェックして
●41にチェックがあれば……………135へ
●41にチェックがなければ……………405へ

234

小さなカギを探して水路に降りたボクは、最初の分かれ道を、さっきは行かなかった南へと折れてみた。
と、突きあたりでみごと小さなカギを発見！
そのまま来た道を戻って高台に登り、カギのかかった扉へと急ぐ。

◆カギリストの『小さなカギ』を1つチェックして……………394へ

「やっぱり、青のままにしとこ。赤にしたけりゃいつでもできるんだから……」
ボクは、結局クリスタルスイッチをそのままにして、部屋を後にした。

⬇278へ

236

ボクは、弓矢を用意すると、コッピと向かい合うように移動し、狙いを定めて矢を放った。案の定コッピも、火の玉を放ってくる。
ボクは、思わずよけようとしたが――。
――だめだ、ボクが動けばコッピも動く、盾をかざせば、コッピは腕で矢をはじく――。
そう思い直し、真正面から火の玉を受ける。
「あちちちちち!!」
思わず飛び上がったが、苦労のかいあってコッピは倒れ、同時に開かなかった扉が開いた。
扉の向こう側は、ロープの終着点である、対岸の足場だった。
足場は南北に細長く伸びており、今ボクが立っているのは南の端。
そして足場の中ほどに、西側の壁に接したボスの部屋の扉が見えた。

◆ハートをマイナス1して…………………………301へ

237

あのツボの中に何か入っているかもしれない——!! ボクは迷わず、ツボに近づいた。が、
「ちぇっ、何もないや。……ん? なんだ、この音」
ザッザザッザッザッザッザッザッザッザ……。
空っぽのツボを抱えたまま、ボクはいや～な予感がして振り向く。すると——!!
「わっ、わっ、わっ、なんで、床が崩れてくの～～～っ!?」
なんと床が端っこから、グルグルと渦を描くように崩れはじめたのだ!! 慌ててダッシュし、奥の部屋の扉に向かおうとするが、床の崩れるスピードは驚異的に速くて……。
「あ～～～れ～～～～～っ……」
あわれボクは、下のフロアに墜落! 我に返るとそこは、ダンジョンの入り口の部屋だった。
「くっ、くっそ～! 今度はだまされないぞ」
気をひきしめたボクは、上のフロアに戻って、床の崩れる部屋に再度トライ! 今度は空っぽのツボなんかに目もくれず、一気に右側の扉を目指してダンジョントラップをかわした。

⬇263へ

238

さっき手にしたばかりのアイスロッドを取り出すと、ボクは2匹のヒップループに向けて、たて続けに氷の魔法を放った。頑丈な仮面を誇るヒップループも、さすがに魔法にはかなわず、たちまち氷の固まりとなる。ボクは氷漬けのヒップループを投げ飛ばして高台の下に落とすと、じゃま者がいなくな

った通路を西へ。と、またもや通路は向きを変え、再び北へと折れ曲がった。角を道なりにどんどん進んでいくと、ようやく2つ目の分かれ道が現れる。
今度は、東方面への分岐だが……。

●東へ曲がってみる……………298へ
●このまま北へ向かう……………226へ

239

「目玉だっ!!」
ボクは剣を構えると、デグテールの目玉に向けて思いきり振りおろした。が――!!
カキ――――ン!!
デグテールの目玉は思いのほか堅く、バランスを崩してしりもちをついてしまう。おまけに、反撃とばかりに繰り出された尻尾の一撃で、ボクは壁に、思いきり叩きつけられた。
「く～っ、いた～っ……!」
どうやら目玉は急所ではないらしい。となると!?

◆ハートをマイナス1して……………280へ

240

シュウシュウと不気味な音を響かせながら、ボクを出迎えたのは、小さな岩のようなものを体全体に付着させた、巨大なクラゲだった。

クラゲなのに、傘の部分に大きな目玉が1つだけあるのが、たくさんの岩の隙間からでもわかる。
このモンスターは、ボクの家にある書物で見たことがある。
かつての封印戦争で騎士たちに倒されたはずの闇のモンスター、ワートだ!!
「闇の魔物ワートだな! さぁ、こい! 今度こそボクが葬ってやる!!」
ボクの姿を認めたワートは、体にくっつけていた岩を飛ばして、攻撃をしかけてきた!

●岩を無視して本体を攻撃……………202へ　●岩を先に攻撃する……………253へ

241

ピラミッドの頂上にたどりついたボクは、頂上の平らな部分に大きな穴が開いているのを見て、思わず息を飲んだ。
『……これは、ガノンが破った穴よ。この中では、ガノンが待っているはずだわ』
「ここにガノンが……」
『がんばってリンク。世界を救えるのは、あなただけなのよ……』
『そうよ! わたしたちも祈っているわ! トライフォースを取り戻せることを!』
ゼルダ姫や娘たちの声に励まされ、ボクはピラミッドに開いた大穴へ、思い切って飛びこんだ。

◆LBバトル表のA~Dの欄に、1~4の数字を自由に書きこんで……………376へ

242

　ハシゴから高台の下へ降り、しばらく東に向かって歩くと、火の灯っていない４つの灯篭が見えた。
「灯篭ってのは、火をつけて明かりをとるためにあるものだよな……」
　あたりまえのことをつぶやきながら、ボクはしばし考える。
　火がついていないなら、これは……。
「うん、火を灯してあげるのが正解!!」
　ボクは、ファイアロッドを取り出すと、４つの灯篭全部に火を灯した。と、まるでそれを待っていたかのように、突きあたりに宝箱が現れる。
　中から出てきたのは、木でできた大きな杖で……。
『……それは、ソマリアの杖。ブロックを作り出すことができるの。できたブロックは、重しにしたり、場合によっては乗って移動の手段にしたりもできるわ』
　手に入れた杖の使い方で悩んでいると、不意にクリスタルの娘の１人がそう言った。
「わ！　びっくりした!!　今まで黙ってたから、ボクの中にいることを忘れてたよ」
『ふふ……ごめんなさい。でも、ダンジョン内では、なるべくリンクのじゃまにならないようにしているの。わたしたちが口を出すのは、今みたいに、リンクが本当に困ったときだけ』
　確かに今、ボクは困っていた。この杖はひょっとしたら、勇者が老人だった場合に備えてあるものなんじゃないかと、本気で思ったぐらいに……。
　杖をついて歩き出さないでよかった……。

ボクはひそかに頬を赤らめると、ソマリアの杖を腰ひもに結び、ハシゴを昇って地下3階への階段へ向かった。

◆アイテムリストの『ソマリアの杖』にチェックして……………………257へ

243

「おじいさん、いますか？　おじいさん!?」

カカリコ村の酒場に駆けこんだボクは、大声でおじいさんを呼んだ。おじいさんは、いつものように、カウンターの裏で酒に酔い、半分居眠りをしていた。

「……おお、リンク……。久しぶりらなぁ、なんら？」

「おじいさん！　しっかりしてください、ほら、これを!!」

酔って上機嫌のおじいさんの目の前に、ボクはさっき掘り返したばかりのオカリナを差し出す。するとおじいさんの目が、たちまち正気に戻った。

「こ、これは……息子の？　リンク、おまえ息子に会ったのか？」

そこで、ボクは鹿になった少年のことを、すべて話した。頼まれ、オカリナを探してここに届けにきたことも、残らず全部……。

おじいさんは目に涙を浮かべてオカリナをなでると、それをボクに返した。

「リンク……。息子はこれで、動物と話ができたんじゃ。よく鳥を呼んで国中を駆け回っておったよ。このオカリナに、不思議な力があったんじゃなぁ……。息子はよく、村の風見鶏の前で、このオカリナ

を吹いていた……。リンク、風見鶏にこのオカリナの音を聞かせてやってくれ」
「うん、いいよ……。おじいさんは、ここで聞いていて……」
ボクは、おじいさんからオカリナを受け取ると、村の中央にある風見鶏の前へ行き、オカリナを奏でた。
美しいオカリナの音が、カカリコ村の中に響き渡る――。
と、そのとき!!

↓013へ

244

大ショック！　なんとボクは、ボスの部屋を開ける肝心のカギを持っていなかった。
大急ぎで地下2階に戻り、必死でカギのありそうな場所を探す。
「……ひょっとすると、あそこかな……？」
思いついてボクは、高台の通路に入った最初の曲がり角を西へと曲がってみた。すると、突きあたりの部屋で、爆弾を落として攻撃するナメクジのようなモンスター、ヌラヌールが、3匹そろってお出迎え。
こいつらを倒せば、カギが出るかもしれない!!

◆29にチェックして……391へ

245

キツネとボールの奇妙な2人組は、町の西側で退屈そうにたむろしていた。が、ボクの姿を見つけると、うれしそうに駆け寄ってくる。
「ああ、いつくるかと思って待ってたんだぜ。あんた、爆弾屋のこと知ってるか?」
キツネにそう言われ、何のことかと首を横に振ると、今度はボールが飛び跳ねながら口を開いた。
「あのさ、爆弾屋が、ついに大きな爆弾を手に入れたんだってさ。で、世界を救う勇者になら、それを譲ってもいいって言うんだ」
「で、爆弾屋、何て言ったと思う? 勇者ならオレの決めた合い言葉がわかるはずだ、とこうさ。だがな、いかに勇者だって、そんなもんわかるはずねぇ」
「だからさ、オイラたち、うまく言いくるめて爆弾屋に聞いたんだ、合い言葉をね。オイラたち、キミが勇者だって信じてる。だから合い言葉を教えるよ」
「いいか……、よく覚えろよ。爆弾屋が〝あんたは?〟って聞いたら〝我こそが世界を救う勇者なり〟って言うんだ。わかったな?」
ボクは早口でまくしたてる2人組に礼を言うと、その場を離れて爆弾屋へと向かった。

◆54にチェックして……………………………169へ

246

気づくとボクは、村のダンジョンの外に倒れていた。
『リンクよ、気づいたか……？』
胸ポケットのマジカルミラーから、サハスラーラ長老の声が聞こえてくる。
『……タイノンは、氷の魔物じゃ。氷には火。わかるかの……？』
「……はい、長老。助けてくれてありがとうございます！」
ボクは長老に礼を述べると、村のダンジョンへ戻り、タイノンのいたあの牢屋の場所まで一気に走った。
2匹のタイノンは彫像に戻っていたが、ボクの姿を発見すると、再び本性を現わす。
「今度は、そう簡単にやられないぞ！」

◆ハートをすべて回復させて……297へ

247

すると、いきなり、部屋の中央に置かれたダンジョントラップのメデューサが、球状の火炎弾を放ってきた。
「わっ、わっ、ちょっと待て!!」
火炎弾を盾で弾きながら、ボクは部屋を確認して回る。すると、部屋の東側の壁にヒビの入った部分があることに気づいた。

◆42にチェックして

●爆弾があれば……390へ　●爆弾がなければ……386へ

248

よく考えれば、ここは闇の世界。いくらダンジョンよりはましだといっても、たった1人で地上に放り出されるのも不安だろう……。

そう考えると、ボクは少女を連れてボスの部屋へ向かった。

「いいかい？　絶対にボクから離れちゃあだめだよ」

ボクの言葉に、少女はコクンとうなずく。

●18にチェックがあれば……204へ　●18にチェックがなければ……290へ

249

ボクは適当に場所を移動し、出没のタイミングを計って回転斬りを放った。

しかし、勘はみごとにはずれた。ボクの2メートル背後に現れたガノンは、杖を振り回してボクを襲う！

「ううっ!!」

よけきれず、杖の先端で腹を突かれたボクは、そのまま壁に叩きつけられる。

◆ハートをマイナス1して

●ハートの残量が0なら……089へ　●ハートの残量が1以上あれば……407へ

250

「面倒だけど、何かが出てくるかもしれないしな……、よし！」
ボクはウィズローブたちと戦うことを決意すると、剣をギュッと握りしめ、力をこめた。ところが、敵は予想外に弱く、回転斬りの一撃であっさりと倒れてしまう。
「な～んだ、そんな恐れることなかったな……」
と、そのとき、どこかでコーンという乾いた音がした。何が起こったのかと高台の周囲や穴の向こうの通路を確認してみたが、別に変わったことはない。
「変なの……、気のせいかな……」
ボクは首を傾げながら、中央の通路を後にした。

◆50にチェックして……216へ

251

ボクは、下のフロアに降りてみることにした。ひょっとしたら、そろそろボスが姿を現わしているころかもしれない。

●20にチェックがあれば……275へ　●20にチェックがなければ……213へ

252

まずは動きの鈍(にぶ)い中央の首に、回転斬(ぎ)りで挑(いど)んだ。ところが、両脇(わき)の首がヌッと近づき、ボクに氷の粒(つぶ)と炎を吐(は)きつける。
氷のほうはなんとかよけたが、炎に焼かれ、一時退散！
「しかたない、まずは動きの速い両側の首を倒そう」

◆ハートをマイナス1して

●赤い首に攻撃……405へ　**●青い首に攻撃……233へ**

253

ワート本体を倒すには、まず、うるさいザコから!!
ボクはそう判断すると、飛びかう岩から先に攻撃することにし、距離をおいて身構えた。
が、岩たちは、ボクに戦う気がないと判断したのか、飛ぶのをやめるとワート本体に再びペタリと貼(は)りつく。
「このぉ……！　近づけば飛びまわるし、離れればくっつく……どうすりゃいいんだ!?」

●フックショットで岩を引き寄せる……286へ

●回転斬(ぎ)りで岩に攻撃……217へ

254

扉の奥には、上のフロアへと進む階段があった。ところが階段を取り囲むように青いブロックが居並んでいる!!

「く〜っ、さっきのクリスタルスイッチか!?」

大急ぎで北側の扉へ行き、奥の部屋にあったクリスタルスイッチを赤に切りかえて戻ると、行く手をふさいでいた青ブロックは、しっかりと床の下に下がっていた。ボクはほっと息を吐き出すと、階段を上へと昇っていった。

⬇057へ

255

ヌラヌール戦の後に手にした目玉のカギを、ボクはカギ穴に差しこんでゆっくり回した。カチリと手応えがあり、ロックが解除されると同時に、扉が大きく内側に開く。

中でボクを待ちかまえていたのは、巨大目玉のボス、ゲルドーガ!!

敵は手下の小目玉を飛ばし、最初の攻撃をしかけてきた。

まずは、小目玉から片づけてやる!!

●30にチェックがあれば……063へ

●30にチェックがなければ……366へ

256

本線を西へ向かうと、北への支線があるポイント分岐に差しかかった。

●本線を西へ……………………**105へ**　**●支線を北へ**……………………**192へ**

257

地下3階に降りると、カギがかかっているわけでもないのに開かない扉が、ボクを出迎えた。が、心配にはおよばず、扉のすぐ脇には、乗って押すタイプのボタンがある。

「……これに乗れば……、ほらね！　……あ、あれ？」

ボクがボタンの上に乗ると、扉はすぐに開いた。ところが、扉をくぐろうとしてボタンから降りると、扉はたちまち閉まってしまったのだ。

「となると、このボタンの上に何か乗せておかなけりゃ……」

●ソマリアの杖があれば……………**345へ**　**●ソマリアの杖がなければ**……………**207へ**

258

宝箱から離れてようすを見ていると、バブルがしびれを切らしたように突進してきた。

「しめた、今だっ!!」

ボクは、突撃してきたバブルをかわして宝箱に飛びつくと、中から小さなカギを取り出す。そしてそのまま踵を返し、南側の扉から外へ！　成功!!

は～っと息を吐き出して周囲を見回したボクは、そこが、Bと書かれた扉であることに気づく。
「ふ～ん、AとBは、こんなふうにつながっていたんだ。すると、CとDも同じかも……」
そう考えるとボクは、カギの必要な扉――Cの扉へと、ロープを使って移動した。

◆カギリストの『小さなカギ』を1つチェックして…………………………371へ

259

広場へ戻ったボクは、すぐさまガーゴイル像を力まかせに動かしてみた。すると、その下に隠し階段を発見！
「ここが、村のダンジョンの入り口だったんだな……」
階段は、暗闇の中に吸いこまれるように、ずっと下まで続いている。ボクは勇気を出して、その長い長い階段を降りていった。

⬇079へ

260

動きの速いバリを射程距離に追い詰めたボクは、剣に力をためて回転斬りを放った。が――!!
バリバリバリバリ――――――――ッ!!
いきなり全身に電撃が走る。
バリが放電しているときに、攻撃してしまったのだ。
「うう……。直接攻撃は、こいつに限っては特に危険だ……」

261

素早い敵の動きについていくには、力をためるのに時間のかかる回転斬りよりも、普通に攻撃したほうがいい――。そう考えたボクは、剣を短く持つと、ブラインドが接近してくる瞬間を見はからって、鋭い攻撃を何度も繰り返した。
ブラインドも必死でくいさがってきたが、ボクは慎重に身をかわし、敵の攻撃を受け流す。
すると――。
「うう……、おのれ、こしゃくなぁ!!」
ブラインドが突如大きく飛び上がり、空中で2つに分裂した。
「ふははは……、この術、キサマに見破れるか!?」
ブラインドがしかけてきたのは、影写しの術! 本物を攻撃しない限り、術は破れない。

◆ハートをマイナス1して……282へ
●右のブラインドを攻撃……404へ
●左のブラインドを攻撃……219へ

262

さっき赤くしたスイッチは、もう変えられない。
「つまり、こっち側の部屋は、もう用ずみってことか……」

⬇278へ

263

扉の奥は、薄暗い廊下になっていた。しかも、廊下の奥には牢屋があり、その中には1人の女の子が閉じこめられていたのだ。
「キミなのかい？　助けを求めていたのは？」
ボクが呼びかけると、少女は驚いたように振り向いた。
「待っててくれよ、今、牢を開けるから！」
ボクは少女に笑顔を見せると、急いで牢屋に向かう。
と、そのとき、牢屋の両脇に彫られていた彫像が、ズズッと音をたてて盛り上がった。いや、彫像なんかじゃない！
こいつらは、全身氷づくめのモンスター、タイノンだ!!　うっかり近づくと、氷の息を浴びせてくるのは目に見えている。
ここは一旦下がって、遠距離攻撃するのがいちばんだ。

●ファイアロッドを使う……………297へ　●弓矢を使う…………………………228へ

264

ガノンの塔に入ったボクは、ひんやりとした冷気が漂う通路を、東に向けて歩いていった。しばらく進むと、通路の両脇――北と南に、向かい合うようにして扉があるのを発見する。通路はまだずっと、東に向かって伸びているが……。

265

『リンク……あなたのおかげで魔物の手から逃れることができました。ありがとう……』
『そのハートの器は、ワートの力の一部。あなたの体力を上げてくれるはずよ……』
2つのクリスタルはクルクルと回りながら、ボクに語りかけてきた。
『わたしたちは、7賢者の血を引く娘です。今はクリスタルに封じられてしまっているけれど……。この世界がトライフォースの置かれた聖地だったことは、もう知っているわね……？』
ボクがうなずくと、クリスタルの中の娘たちはさらに言葉を続けた。
『聖地だったこの場所は、トライフォースを手に入れた盗賊のボス、ガノンの悪しき願いで、こんな世界に変えられてしまったの。彼は結界の中で力を貯えて、わたしたちの光の世界までも支配しようと企んでいるわ。わたしたち賢者の血を受け継ぐ7人の娘をカギに使って封印の一部を解いただけでは飽きたらず、城のあたりにもっと大きな力の通り道を開くつもりなの……』
「ガノン？　ガノンだって!?　それは、かつての封印戦争でハイラルを支配しようとした、あの大盗賊ガノンドロフのことかい？　でも、ヤツは……!!」
『そうよ、7賢者の力で封印されたわ。でも、死んだわけではない。この闇の世界に封印されただけ。トライフォースは、まだガノンのものなのよ……』

●北の扉の奥へ……………………………334へ　●南の扉の奥へ……………………………006へ
●通路を東に直進する……………………………………………………………017へ

265

驚くボクに、クリスタルに封じられた娘たちが、必死で言いつのる。
『だけど、ガノンの力は、まだ不完全よ。闇の通り道は、まだ開ききっていない。あなたのような勇者でないかぎり、闇の世界と光の世界を自由に行き来することはできないわ』
『今ならまだ間に合うのよ、リンク。わたしたちが7人そろえば、ガノンの潜む結界も破れるはず。そして、ガノンを倒せるのは、あなただけ……』
「ほかの娘たちは？　ゼルダ姫はどこにいるんだ!?」
ボクの問いに2人の娘は、どこからともなく地図をもたらした。そして、残りの娘たちが封じられている場所――村のダンジョンと沼のダンジョン――を示し、最後に山の頂上にある亀岩と、そのすぐそばにある塔に印をつけた。
『ゼルダ姫は亀岩の中に、そして、ガノンの結界は、その塔よ。わたしたちは、ガノンを倒したときもとの姿に戻れるはず。リンク……、あなたの無事を祈っているわ……』
『勇者の行く道が、トライフォースへと導かれますように……』
クリスタルに封じられた2人の娘は、ボクへの説明を終えると、祈りを捧げながらボクの体に入りこんできた。
『わたしたちは自分では移動できないの。だから、リンクの体の中に、少しの間だけいさせて……』
その声が自分の体の中から聞こえてきたと思った次の瞬間、ボクは娘たちの力で水のほこらの外へとワープしていた。

↓134へ

266

ボクは適当に場所を移動すると、出没の時間を見はからって回転斬りを放った。と——!!
ザシュウ——————ッ!!
なんと、みごとヒット！　ガノンは、ボクが剣を振るったその瞬間のその場所に、おろかにも姿を現わしたのだった。
「ぐわっ!!」
うめき声をあげ、ガノンの体が硬直した。同時に、さっきまでダークブルーだった体の色が、水色へと変色する。

●銀の矢があれば……………146へ
●銀の矢がなければ……………055へ

267

一旦外へ出ようと、入り口の部屋に行くと、娘がおびえるようにつぶやいた。
「……そっちはいや、……こわいの……」
「こわいって……。これから、恐ろしい敵と戦うかもしれないんだ。地上のほうが安全だよ」
ボクがそう言ってなだめても、娘は首を横に振りつづけるだけ。どうあっても外へは行きたくないらしい。

⬇248へ

268

残念ながら、ボクは小さなカギを持っていなかった。しかたなくソマリアの杖でブロックを作り、ロープを南へ伝って本線に戻る。

●本線を東へ……………………210へ
●本線を西へ……………………105へ

269

ボクは狙いを定めると、思い切って矢を放った。
が、フックショットが通じない相手に、矢など効果があるはずもなかった。仮面で矢を弾いたヒップルーブたちはそのまま突撃し、ボクを通路の手すりに叩きつけて通りすぎる。……と思ったら、いきなりクルリと方向転換し、またもや猛スピードの突進を始めた。
「し、しつこい～！　そのままどっかへ行ってくれよぉ!!」
なんて、モンスター相手に泣き言など通じるはずもない。

◆ハートをマイナス1して……………………238へ

270

ところが、思わぬアクシデントが起こった。放っておいた青首の亀が、いきなり氷の粒を吐いてきたのだ。もちろん、ボクは素早くよけた。すると、氷の粒はそのままボクの足もとにかかり、床を凍らせてしまったのだ！

つるつると滑る氷の上を移動しながら、アイスロッドをひたすら繰り出すが、敵は、ボクが足を滑らせた瞬間を見逃しはしなかった。

ゴオオオオオオオオッ!!

しりもちをついたボクめがけて、真っ赤な炎が襲いかかる!!

◆ハートをマイナス1して

●ハートの残量が0なら……………314へ　●ハートの残量が1以上あれば……………342へ

271

さて、次はどうしよう……？

●村の東側を探る……………206へ　●村の西側を探る……………232へ

●村の南側を探る……………225へ　●村の北側を探る……………003へ

272

「こ、こりゃだめだ。太刀打ちできない……」

ボクは見切りをつけて剣を収めるとAの部屋を出た。Aの部屋がだめだとすると、さっき見た東への分岐ロープを行ってみるしか手はない。

しかたなく戻ってポイント分岐を東へ向かうと、ロープは、この空間の真ん中あたりに浮かぶ、孤島のような足場で途切れた。

その足場には、ツボが無造作に置かれてあり、中には爆弾が1つ……。
「あ、ひょっとしてスタルフォンは、この爆弾で倒せるかも！」
爆弾を手に入れたボクは、すぐさまAの部屋へと引き返し、スタルフォンと対峙した。

◆爆弾リストに1つチェックして……099へ

273

『リンク……、あなたのおかげで、魔物の手から逃れることができました。ありがとう……』
突然、空中に2つのクリスタルが浮かびあがった。
敵に捕われていた、賢者の血を引く娘たちだ。
『……トライフォースは、それに触れた者の望みを叶えます……』
『……そして、その者が生きている限り、永遠に持続させるの……』
クリスタルに封じられた娘たちは、宙をクルクルと回りながら、ボクの心に語りかけてきた。
『そう、この世界はガノンの願った世界……、とても忌まわしいけれど……。ただガノンは、光の世界に戻る術を知らなかった。あなたと違ってね……』
『あなたには、そのマジカルミラーがあるわ。勇者のみが使いこなせる、その鏡が……。リンク、あなたは、オオイナルワザワイの予言を知っている？』
その言葉にボクが首を横に振ると、クリスタルの娘たちは、親切に教えてくれた。
――もしも、悪しき心を持つ者がトライフォースを手にするなら、勇者が必ず現れ、このオオイナ

ルワザワザイのもととなる者を討つであろう——と。
『リンク……、勇者になれるのは、ハイラル王家を守っていた、ナイトの一族の者だけのはずなの。ナイトの一族は、先の封印戦争で賢者たちを守り、その血筋を断ってしまったと言われていたわ。でも、たぶんあなたは、ナイトの血を引く最後の1人なのね。マジカルミラーを使いこなしているのが、そのなによりの証拠よ……』
『ナイトの一族の最後の1人が、勇者となるべく力を秘めていたなんて、不思議な話ね。でもリンク、あなたなら、きっとガノンを倒せるわ。がんばって……』
『勇者の行く道がトライフォースへと導かれますように……』
2人の娘たちは、そう祈りを捧げると、先の娘たちと同じように、ボクの体に入ってきた。ボクは、娘たちの力で、ダンジョンの入り口まで戻される。
『……リンク。次は沼のダンジョンよ……』
地上に出たボクに、娘たちはそう教えてくれた。

⬇007へ

274

ブロックを降りて扉に近づくと、カギがかかっていることに気がついた。

●小さなカギがあれば……………229へ
●小さなカギがなければ……………268へ

が、ボスの部屋へ行こうとして我に返った。

275

こっちには、さっき救出したばかりの娘がいる。7賢者の血を引く者なのかどうかは別として、生身の女の子を危険にさらすわけには……。

●一旦、地上に戻る……………………267へ
●ボスの部屋へ急ぐ……………………248へ

276

最後の1匹になったデグアモスは、全身を赤く染めて大暴れを始めた。右に左にと大きくジャンプをし、矢の攻撃から逃れようとする。

「そういうことなら……」

ボクは弓矢をしまうと、退魔の剣マスターソードを構え、力をためた。そして、敵が今まさにジャンプしようとするその瞬間を狙い――。

ザシュ――――――ッ!!

必殺の回転斬りを食らい、最後のデグアモスも、あっけなく力尽きた。と、部屋の奥、東側の壁にあった扉が、音をたてて開く。

ボクはさらに奥へ向かうため、その扉の向こう側へと歩を進めた。

●44にチェックがあれば……………384へ
●44にチェックがなければ…………254へ

277

考えてもしょうがない、なるようになれだ!!
ボクはクリスタルスイッチを赤にして部屋を出ると、吊り橋に向かった。

◆26にチェックして……359へ

278

ボクは、もとの通路へと戻った。
「さぁ、今度はどうしようか?」

●北の扉の奥へ……334へ　●南の扉の奥へ……006へ
●通路を東に直進する……017へ

279

ふと気づくと、ボクはダンジョンの入り口に倒れていた。この水のほこらのボス、ワート戦で、残っていた体力をすべて使い果たしてしまったらしい。
『リンクよわしじゃ。サハスラーラじゃ……、気づいたか?』
長老の声が聞こえてきたので、ボクはマジカルミラーを取り出して、大丈夫だと答える。すると長老は、話を続けた。
『……わしの力でおまえをダンジョンの入り口まで戻したんじゃ。あのままでは、おまえが殺されて

しまうからの。ほれ、体力を回復してやろう、あきらめずにがんばるんじゃぞ……』
長老がそう言うと同時に、全身に体力がみなぎってくる。ボクは長老にお礼を言うと、ワートを倒すため、水のほこらへと飛びこんだ。そして、記憶を頼りに奥へ奥へと進み、再びワートと対峙する。
ワートは、ボクの姿を見ると、またもや岩を飛ばしてきた。
「くっ！　もうその手には乗らないぞっ!!」

◆ハートをすべて回復させて……………………253へ

280

「尻尾かっ!?」
ボクは剣に力をためると、デグテールの尻尾めがけて回転斬りを放った。
ザシュ――――ッ!!
確かな手応えを感じると同時に、デグテールが狂ったように床の上をのたうちまわる。成功だ！　急所を知ってしまえば、あとはこっちのもの！　ボクは尻尾に向けて何度も回転斬りを食らわせ、ついにデグテールを葬り去った。すると、部屋の奥にあった扉が開き、3階への階段が姿を現わす。
『表から見た塔は3階建てだったわ。ガノンはきっと、この上よ！』
体の中から響くゼルダ姫の声を聞き、ボクは気を引き締めなおして上のフロアへの階段を上がっていった。

⬇393へ

281

タイノンを倒したボクは、カギをはずそうと牢屋に近づいた。が、意外にもカギはかかっておらず、拍子抜けするほどあっさりと少女を救出！
「大丈夫かい？　ひどい目に合わされていないかい？」
ボクは少女を気づかって、そう話しかけた。が、少女は怯えきっているのか、ボクにしがみついて何も話そうとしない。
『……この娘も、7賢者の血を引く娘の1人なのかい？』
ボクは、体の中にいる2人の娘たちに、心の中で話しかけてみた。が、娘たちにも、よくわからないようだった。
『7賢者の血を引く娘たちは、みんなクリスタルに封じられてしまったと思っていたけれど、この娘はひょっとして封印を解くことができたのかしら……？　わからないわ……』
しかたなくボクは、怯えた娘さんを連れてしばらく行動をともにすることにした。
「いいかい？　ボクのうしろについて、絶対に離れちゃだめだよ」
娘はコクンとうなずくと、ようやく笑みを見せた。

◆20にチェックして……………………………………335へ

282

ボクはバリから距離をおくと、狙いを定めて矢を連射させた。的が小さいので何本かははずしてし

まったが、どうにか2匹の小バリの退治に成功!

⬇218へ

283

「これだな、あの2人組の言ってた木は。よぉし……」
ボクは、一旦(いったん)木から離れて距離をおくと、思いきりダッシュして体当たりをかます。と——!
「ああ、びっくりしたぁ……。せっかく気持ちよく眠っていたのに……」
木が、いきなりしゃべりはじめた。
「ねぇ、頼むよ。いいこと教えてあげるから、これ以上昼寝のじゃましないでくれよ……」
木は、ボクに向かってモゴモゴと口を動かす。
そしてボクがうなずくのを見ると、
「広場のガーゴイル像の下を調べてごらん。あそこからたまに、女の子の声が聞こえるんだよ。助けて、誰(だれ)か助けて……ってね。じゃあ……、ぐううう……」
それだけ言い、再び眠りに入ってしまったようだった。
「ガーゴイル像の下だって……?」
なんか、キツネにつままれたような気分だったけど、ほかに手がかりらしきものはない。ボクはクルリと踵(きびす)を返すと、広場へ向かって走った。

⬇259へ

284

「ちぇっ……、カギがかかってるんじゃしかたない……。戻るか」
とにかく、カギを探すとしよう。

⬇278へ

285

高台を北方面へと歩いていくと、やがて西への分かれ道が現れた。

●北へ直進する……………………209へ
●西へ曲がる………………………………387へ

286

「本体に近づけば攻撃してくるんだったら……、これで！」
ボクは用心深くフックショットを取り出すと、ワートを取り囲む岩めがけて飛ばした。そして、引き寄せられた岩を剣で打ち砕くと、すぐさま次の岩を引き寄せる……という、かなり地味な作業を繰り返し、ようやくすべての岩を取りのぞいた。
こうなれば、ワート本体など恐れるに足らず！
「でりゃあああああああっ!!」
剣に力をためると、ワートに向かって斬りかかる!!　ワートも触手を伸ばして抵抗を試みてきたが、退魔の剣マスターソードの前には無力だった。
ついに力尽きると、霞のようにかき消える。

後に残ったのは、体力の源であるハートの器だけだった。ハートの器は、ボクが手にしたとたん、体力をみなぎらせてくれる。
と、その瞬間、空中にポッと透明なクリスタルが、2つ現れた。

⬇265へ

287

カキ〜〜〜〜〜〜ン!!
右のアグニムが放った赤い球を弾くと、ボクの腕に確かな手応えが伝わってきた。そして次の瞬間、右のアグニムの顔が苦痛に歪む。
「幻惑の術、見破った!!」

⬇317へ

288

ボクは、向かって右の部屋に足を踏み入れた。

●20にチェックがあれば……………221へ
●20にチェックがなければ……………309へ

289

「こ〜いう場合は経験上、切りかえておくに越したことはない……」
ボクは、さっき拾った爆弾を1つ取り出すと、爆発準備のセットをしてブロックの向こう側に投げ入れた。

数秒後、大音響とともに爆発が起こり、爆風にあおられたクリスタルが青に切りかわる。
「これでよし、と!」
◆爆弾リストのチェックを1つ消す。37にチェックして…………………………310へ

290

が、予想に反してボスの部屋は、相変わらず何の気配もなかった。しかたなくボクは少女を連れ、もう一度上のフロアへ向かう。
⬇335へ

291

「あ、ひょっとしてここは、あの通路の横道の奥か!?」
ボクは、さっき北側の扉の奥で見つけた横道を思い出し、思わず声をあげた。あのときは突きあたりだと思って行くのをやめたが、なるほど、突きあたりには、こんな高台があったというわけだ。
1人で感心していると、ウィズローブが再び、波動の魔法をしかけてきた。ボクははっと我に返り、攻撃をすんでのところでかわす。
「くっ……、遠距離攻撃を自在に操る魔法使いか、やっかいだなぁ……」
●放っておく…………120へ　●倒す……………………250へ

292

まずはフックショットで敵の動きを止め、後から剣で倒せばいいだろう――。
そう考えてフックショットを使ってみたが、素早いヌラヌールには逆効果だった。2匹まではなんとか止めたものの、最後の1匹を狙って追いかけている間に正気づかれて爆弾攻撃を食らってしまう。
「だ、だめだぁ～、作戦変更」

◆ハートをマイナス1して……………………………………354へ

293

このBの扉は確か、赤いクリスタルスイッチのあった部屋だ。前に来たときは、クリスタルを切りかえなかったが……。
「やっぱり、切りかえよう!」
ボクは部屋の中に入って爆弾を1つ取り出すと、爆発準備のセットをしてブロックの向こう側に投げ入れた。数秒後、大音響とともに爆発が起こり、爆風にあおられたクリスタルが青に切りかわる。
「これでよし、と!」

◆爆弾リストのチェックを1つ消す。37にチェックして……………………………………310へ

294

一撃では小さなダメージかもしれないが、何度も繰り返せば必ず大きなダメージになる——。
ボクは、自分を信じると、ひたすらマスターソードを振るい、ガノンの体に傷を刻みつけていった。
2回、3回、4回……いや、何度飛びかかったことだろう。数えていた回数もわからなくなってしまったとき、ようやくガノンの顔に怒りの色が見えてきた。
「おのれぇ……！　どこまでもこざかしいマネを!!　ならばこっちも本気を出すまで!!」
ガノンはそう叫ぶと、杖の先端からいくつもの炎の球を出した。
ボクがハッと身を引いた次の瞬間、炎は翼を持つ鳥の形になり、輪を描いてガノンの周囲を飛び回りはじめる。
「どうだ!?　炎の鳥に触れればおおやけどをするぞ。それでもワシを斬れるか!?」
ガノンの言葉で、ボクはじっと鳥の輪を見据えた。鳥と鳥の間のわずかな隙間をかいくぐって、ガノンに攻撃することができるか!?
「ええいっ！　いちかばちかだっ!!」
ボクは、力をためた剣を振りかぶり、炎の鳥の輪の中に飛び込んだ。

◆対LBバトル表で対戦します。リンクはD、ガノンはA

●リンクの数値のほうが大きい…………130へ　●ガノンの数値のほうが大きい…………326へ

295

ボクは素早く右に移動し、白い球の直撃をよけた。ところが、白い球はボクをかすめて壁に当たると、弾かれながら4つに分散して戻ってくる。
「な、なんだ!?」
あまりに突然でよけることもできず、ボクは4つに分かれた球のうちの1つに直撃されてしまった。
「ヒ～ッヒッヒッ……、ああ、面白い!」
意表をついた攻撃の成功に、アグニムが高笑いをする。

◆ハートをマイナス1して
●ハートの残量が0なら……………406へ　●ハートの残量が1以上あれば……………107へ

296

精神を集中させて剣に力をためたボクは、襲いかかってきたギブドを、回転斬りで一気に倒した。今のボクにとってギブド1匹など、はっきり言って問題外。

⬇355へ

297

ボクは右足のブーツから素早くファイアロッドを引き抜くと、タイノンに向けて炎を連射した。この戦いで魔法力は底をついてしまったけれど、タイノンはあっという間に炎にまかれ、痕跡ひとつ残さず蒸発した。

さすが、ファイアロッドの威力はすごい！

⬇281へ

298

思いきって東へ曲がってみたが、あいにくと行き止まり。
さ、Uターン、Uターン。

⬇226へ

299

Aの扉の奥は、ロープの間に負けず劣らずの暗闇になっていた。部屋の東側に奥へ続く扉があるが、全く開く気配がない。
そのかわり、部屋の四隅に灯篭が1つずつ置かれている。
「なぁるほど……。灯篭に火をつければ、扉が開くってしかけか」
ボクはファイアロッドを取り出して、灯篭のひとつひとつに火を灯していった。が、部屋が明るくなっても扉が開かず、かわりに、巨大なガイコツ兵士のスタルフォンが登場！
「……そうか、おまえを倒せばいいんだな!!」
ボクは、力まかせに回転斬りを放った。
たちまちスタルフォンの骨の体が、バラバラと崩れ落ちる。ところが数秒後、骨の1本1本がくっつき合い、スタルフォンは復活してしまった。
「な、なんでだ〜〜〜〜〜!?」

慌(あわ)てて弓矢やファイアロッドなども使ってみたが、スタルフォンには全く効果がない。

●**爆弾があれば**……………………099へ　●**爆弾がなければ**……………………272へ

300

が、下のフロアでのバズ戦でボンバーメダルを使ってしまったボク。もう一度使えるほどの魔法力は残されていなかった。

「ううむ……、かくなるうえは!?」

●**テールから逃げる**……………………378へ　●**剣で戦う**……………………352へ

301

手に入れたばかりの亀(かめ)のカギを使い、ボスの部屋を開ける。

果たして、中にいたのは——!!

アギャアアアアアア〜〜〜〜〜〜〜ッ!!

なんと、さすがは亀岩(かめいわ)というべきか、ここのボスは3つ首の亀(かめ)、デグロックだった。中央の首は岩でできているのか、灰色であまり動かない。

そのかわり、両側の首が問題だった。

1つは氷を吐(は)く青い首。そして、もう1つは炎を吐(は)く赤い首だ。

「こいつは、首を1つずつ倒すしかなさそうだ!!」

●赤い首に攻撃……………………………405へ　●青い首に攻撃……………………………233へ
●中央の首に攻撃…………………………………………………………………………………252へ

302

底にあるスイッチを押すため、ボクは泳いでプールを横断した。そして、スイッチのところまでたどりつくと、そのまま潜ってスイッチを押す。
「ぷはぁ!!　……あ、あれ!?」
再び水上に顔を出したボクは、プールサイドのような高台に、さっきまではなかった宝箱を発見。急いで水から上がり宝箱を開けると、中からフックショットが出てきた。バネで伸びる槍が仕込まれた道具で、離れたところにある場所へ渡ったり、ものを引き寄せたり、ついでに敵の動きを止めたりもできる便利なアイテムだ。
フックショットを手に入れたボクは、そのまま東側にある扉へ向かう。
◆アイテムリストの『フックショット』にチェックする。9にチェックして……………381へ

303

最初に北側へと動いたボクの行動は、はっきりいって間違っていたらしい。なんと、北の灯篭にたどりつく前に、南へ移動していたガノンとはち合わせ!
「おろか者めが!!」

いきなり振りおろされたガノンの杖で、脳天に直撃を食らう。
それでも、ボクは必死で、すべての灯篭にようやく火を灯した。
「ふはは！　知恵が足りないのはキサマのほうらしいな!!」
歯がみするボクをあざ笑うと、ガノンは素早く次の行動を起こした。

◆ハートをマイナス1して……………………………177へ

304

「くっ……、これしきの傷……っ!!」
ボクは痛みをこらえて立ち上がると、振り向きざまにもう一方のブラインドを攻撃した。
ザシュ――――ッ!!
剣を持つ腕に、確かな手応えが伝わってくる。
「……影写しの術、見破った!!」
ボクはそう叫ぶと、さらに剣を一撃!!
「ま、まさか……、こんな小僧に……、ぐふっ……!!」
退魔の剣マスターソードの聖なる刃を受けたボス、ブラインドは、それだけ言い残すと力尽きた。
後には、ハートの器が1つ……。
そして、ボクがそれを手にすると――。

⬇273へ

305

南へ曲がってしばらく進むと、そこは――。
「はれ？　……あははは、入り口に戻ってきちゃった……」
なんと方向音痴なボク！
「ええと……、本線のロープは、部屋の中ほどに四角に近い形で張られているだろう。で、本線から放射状に伸びたものが、各部屋への支線なんだよな……」
ボクは、もう一度頭を整理をすると、乗っていたブロックを北へ向かわせる。すると間もなく、東西に伸びる本線のポイント分岐に差しかかった。

東へ行く……………136へ
西へ行く……………358へ

306

このカギ穴に合うようなカギを、ボクは持っていなかった。
「う～ん……、となるとやっぱり、さっきの部屋のピログースを倒しておいたほうがよかったか？」
考えた末、ボクはプールの部屋に戻ることにした。

⇩357へ

307

ハシゴを使って下へ降り、進める方へ歩いていくと、高台と壁に囲まれた突きあたりに、赤く輝くクリスタルスイッチを発見。
「こんなところにわざわざあるってことは、これまでの経験からすると……」
ボクは、迷わずスイッチを青にしてUターンすると、ハシゴを昇ってもとの高台まで戻った。

◆28にチェックして…………………………285へ

308

北の扉の奥には、西に向けて伸びる通路があった。ボクは一本道の通路を、しばらく真っすぐ歩いていく。すると、その途中で、南への分かれ道に差しかかった。
「う～ん……、何もないみたいだなぁ……」
分かれ道は意外に短く、向こう側が見える。どうやら、壁に突きあたるようで、宝箱のようなものも見あたらない。行ってあらためて確認するほどの価値もないようだが……。

●南へ行ってみる…………201へ　●このまま西へ直進する…………322へ

309

部屋のさらに奥には、カギのかかった扉が待ちかまえていた。

●小さなカギがあれば…………361へ　●小さなカギがなければ…………385へ

310

Bの扉を出たボクは、ソマリアの杖でブロックを作り、ロープを南に伝って本線に戻った。

◉本線を東へ行く……………210へ　◉本線を西へ行く……………105へ

311

これか、あの2人組が言ってたのは!!　ボクは2人組の言葉を思いだしながら、爆弾屋に答えた。

「ええと……、我が……いや、我こそが、世界を救う勇者なり……だったっけかな……?」

「……まさか、あんたが伝説の勇者かい?　いや、間違いない、勇者だ!!」

かなりしどろもどろの返事だったが、爆弾屋は納得してくれたらしい。すぐに店の奥へ行くと、大きな爆弾を持って戻ってきた。

「勇者様!　こいつは、堅い壁をも壊すことのできる爆弾でさぁ。そう、ピラミッドの壁面のヒビなんかもね、こいつにかかれば簡単さ。オレっちは、とても怖くてあんなところ壊せねぇけど、あんたならできるはずさ。さぁ、持っていっておくんなせぇ!」

ボクは爆弾屋から大きな爆弾を受け取ると、できる限り威厳を保ちながら店を出た。ここで、もし勇者であるボクがこけたりしたら、爆弾を返せなんてことも言われかねないものな……。

「さぁ、急いでピラミッドへ行かなくっちゃ!!」

◆55にチェックして……………330へ

312

Uターンして通路を東へ戻る途中、坂のてっぺんにあたる部分の北側の壁に、ヒビの入ったところを見つけた。
「ええと、爆弾はあったっけ……?」

●爆弾があれば……375へ
●爆弾がなければ……347へ

313

「食らえ〜〜〜〜〜〜っ!!」
剣に力をためたボクは、ブラインドめがけて回転斬りを放った。が、敵の動きは予想以上に速く、あっさりとかわされてしまう。
「回転斬りは、かえって逆効果か!?」

⬇261へ

314

「う……、ここは……?」
気づくとボクは、亀岩の外に倒れていた。
『デグロックにやられたんじゃよ……。気を失ったので、わしの力でここまで出したのじゃ……』
マジカルミラーから、長老サハスラーラの声が聞こえてくる。
『さぁ、リンク、もう一度行くがよい。ゼルダ姫が待っておるぞ』

「はい！」
長老の力で体力を回復してもらったボクは、再び亀岩の中へ入り、ボスの部屋へと急いだ。
デグロックは、傷を完全に回復させ、完璧な3つ首で再びボクに襲いかかってきた。

◆ハートをすべて回復させる。40にチェックがあれば消して

●赤い首に攻撃……………405へ　●青い首に攻撃……………233へ

●中央の首に攻撃…………………………………………………252へ

315

「よぉし、今度こそ必ずガノンを倒す!!」
ボクはピラミッドの壁面を登ると、頂上に開いた大穴から、内部へとダイビングした。
「ようやく来たな、小僧。どうやらキサマを倒さぬ限り、ワシはここから出られないらしい。今度こそ覚悟しろっ!!」
ボクの訪れを今か今かと待ちかまえていたガノンは、再び右手の杖をぐるぐると回しはじめた。

◆対LBバトル表をここで書きかえてもOK

●弓矢で攻撃する……………155へ　●回転斬りで攻撃する……………041へ

316

ところが、階段を降りたとたん、いきなり立ち往生。なんと、階段を囲むようにしてそびえたつ青いブロックに、行く手を阻まれてしまったのだ。
「あ〜っ、くそぉ！　戻らなきゃならないなんて、悔しい!!」
しかたなく階段を上がって吊り橋を対岸まで戻り、逆Lの字型の足場を西の方へ向かう。

●27にチェックがあれば……………………**348へ**
●27にチェックがなければ……………………**374へ**

317

本物を見破れば、あとはひたすら魔法を弾き返すのみ！
ボクは退魔の剣マスターソードを振るい、アグニムの放つ赤い球を、次々とアグニムに叩き返していった。すると——。
「うぬう……、どこまでもしつこいお子さんですね！　ならば!!」
呪文を唱えたアグニムの両の手から、今度は白い色の球が放たれた。
「な、なんだ、これは!?　今まで見たことがないぞ!!」
赤の球よりも一まわり大きい白い球は、一直線にボクを狙ってくる。

●よける……………………**295へ**
●剣で弾き返す……………………**044へ**

雫のカギを手に入れたボクは、大急ぎで彫刻の施された扉の前へ戻り、カギ穴に差しこんでみた。
カチャリと音をたてて雫のカギが回ると同時に、扉がきしみながら開く。
果たして、中にいたのは――!?

➡240へ

319

中央のツボを持ち上げると、いきなり星型の黄色い光がボクにまとわりついた。とたんに、装備していた剣や盾が、ガランと下に落ちる。
しかし、特に痛みは感じない。
「なんだったんだ、今の……。え？　え？　うわ〜〜〜〜〜〜〜〜っ!?」
何が起こったのかと自分の体をチェックしたボクは、自分の腕が毛むくじゃらなことに気づいた。
いや、腕だけじゃない、足も顔も……。しかも、耳などはピンと大きく上に伸びている。
まるで――。
「な、なんでボク、ウサギになっちゃったの〜〜〜〜!?」
よりによってボクは、ダンジョンの中でウサギに変身してしまったのだ。このままじゃ戦えない。
……と思っていたら、唐突に変身が解けた。娘たちの説明によると、今のは変身ビームというもので、勇者の本性――つまり、マジカルミラーなしでこの世界に来た場合の姿にしてしまうらしい。
「へぇ、ボクはウサギなんだ……。なんか変な気分……」

ホッとしたような、情けないような気持ちで、もう一度武器を装備しなおしたボクは、今度は奥のツボを持ち上げて、ようやく扉を開けるボタンを発見した。

⬇338へ

320

結局ボクは、スイッチをこのままにして部屋を出ると、吊り橋に向かった。

⬇359へ

321

が、奥の広間は、特に変わったようすはなかった。

⬇335へ

322

通路を西へと進んでいくと、突きあたりのツボの中に、爆弾が1つ入っていた。

ボクは爆弾を手に入れ、通路をUターンする。

◆爆弾リストに1つチェックする。47にチェックして……………………………216へ

323

ポケットをごそごそやってみたが、小さなカギなんてあるはずもなかった。前に拾ったカギは、ビムの監視していた部屋で使ってしまったんだから……。

「水路の迷路までは、完璧に通ってきたよな……。となると怪しいのは……」

●高台を南へ行ってみる……………………365へ
●水路に戻ってみる………………………………234へ

324

西へ方向を変えると、ロープは、Aと書かれた扉のある足場で途切れた。

●34にチェックがあれば…………………369へ
●34にチェックがなければ……………………395へ

325

「うん！　ボクは何も見なかった、ここには何もなかった!!」
ボクはクルリと踵を返すと部屋を退出。高台の通路をさっきの分かれ道まで戻り、北方面へ行くことにした。

⬇209へ

326

運を天にまかせて飛びかかったボクだったが、そううまくことを運ぶことはできなかった。
輪の中に飛びこんだボクは、炎の鳥の猛火を食らい、腕にやけどを負ってしまう。
「……っ！　ううっ!!」
しかし、ここで引き下がるわけにはいかなかった。ボクは、焼きつくような腕の痛みを無視して剣を振りかざし、ガノンに強烈な回転斬りを食らわせる。
「う、うぬっ!?」

今までびくともしなかったガノンの体が、このとき初めてグラリと傾いだ。

◆ハートをマイナス1して……………………………………033へ

327

ボクはボンバーメダルを取り出すと、高く掲げて祈りを捧げた。とたんに周囲に大爆発が起こり、テールたちを焼きつくす!!

と、その瞬間、部屋のいちばん奥に、宝箱が出現した。中に入っていたのは、燃え盛る炎を敵に浴びせることのできるファイアロッド!! 魔法力を消費するので、あまりむだ使いはできないが、ここいちばんのときに威力を発揮してくれる、炎の杖だ。ボクはファイアロッドを、すぐ取り出せるようブーツの右足側に差しこむと、ほかに何もないことを確認して部屋を出た。

◆アイテムリストの『ファイアロッド』にチェックして……………335へ

328

が、ここは、クリスタルスイッチのあった部屋。クリスタルはとりあえず青に切りかえてあるので、ほかにやるべきことはない。

ボクはブロックの方向を変えると、南へ向かい、さっきのポイント分岐まで戻った。

●ポイントを西へ……………105へ　●ポイントを東へ……………210へ

329

「何かいいもの落とすかもしれないもんな。……戦おう！」
ボクは迫りくるポーンを目で追い、身構える。

●回転斬りで倒す……………………399へ　●フックショットで動きを止める…………363へ

330

ボクは村を背にすると、その足でピラミッドへと向かった。
ようやくピラミッドのふもとにたどりついたボクは、頂上を目指して、急な壁面を登りはじめた。

●55にチェックがあれば………………021へ　●55にチェックがなければ………………241へ

331

北の扉の奥は、ボスの部屋への扉と宝箱と、上への階段がある広い部屋があった。宝箱はゼリー状の例のブロックに囲まれていたので、まずはマジックハンマーを使ってブロックを叩きつぶす。そうして近づいた宝箱の中からは、なんと太陽の模様が刻まれた大きなカギが出てきた。
「こ、これって、ひょっとしたらボスの部屋を開けるカギ……？」
こんなにあっさりとボスのカギが手に入っていいものだろうか……？　そう思いつつも、ボクは部屋の西側にある、ボスの部屋のカギ穴に、太陽のカギを差し入れた。カギは簡単にクルリと回り、ボスの部屋のロックをはずす。ボクが扉に手をかけると、それはゆっくりと開いていった。

◆カギリストから『小さなカギ』を1つ消す。カギリストの『太陽のカギ』にチェックして…409へ

332

亀の頭から中へ入り、亀の首の部分と思われる細い通路をしばらく北へ進んだボクは、やがてとてつもなくだだっ広い部屋に出た。部屋といってもそこは、底なしの薄暗い空間で、今、ボクの立っている足場からは、どこかへ向けて細いロープが張られている。目をこらしてさらに先を見ると、ロープは少し北へ行ったところで行き止まり、東西に分岐していた。

「この底なしの部屋を、ロープを伝って調べてみろってことか？」

しかしロープは、あまりにも細すぎて、とてもじゃないけど綱渡りできそうにない。

「あ、そっか！」

思いついて、ボクはロープの上で、ソマリアの杖を振ってみた。たちまちできたブロックは、ロープの上にバランスよく収まり、ボクが乗っても下に落ちることはなかった。ただし、一度降りるとバランスが崩れるのか、ブロックは下へ落下してしまう。

「魔法力をちょっとばかり使いすぎるかもしれないけど、ま、この方法しかないんだから」

ボクはもう一度ブロックを作ると、ロープを伝って北へ向かった。が、さっき見たとおり、ロープはすぐに東西の分岐ポイントに差しかかって止まった。どうやらこれが、ロープの本線らしい。

●東へ行く……136へ　●西へ行く……358へ

333

ボクは鏡の盾を頭上にかざし、炎の鳥たちを避けようとした。が、圧倒的な数を誇る炎の鳥は、盾をすり抜けてボクの体を焼く。
「くっ！ ……これじゃだめか!?」
ボクは痛みに耐えると盾を収め、今度は猛ダッシュで広間を移動！ 鳥たちは、慌てたように方向を変えてくるが、ボクの先回りをしようとまでは考えつかないらしかった。
「ガノン！ おまえのかわいい鳥たちは、知恵が足りないみたいだな!!」
ボクの言葉に、ガノンがギリリと歯ぎしりをする。

◆ハートをマイナス2して……220へ

334

ボクは、北側にある扉を開け、中へ入った。

◆42と43にチェックは？

●どちらにもない……247へ　**●42にのみある……403へ**

●両方ともある……340へ

335

ボクは、ひとまず窓が並ぶ廊下まで戻った。

「さて、次はどうしようか……？」

●向かって右の部屋に入る……………288へ　●向かって左の部屋に入る……………370へ

●廊下を奥へ進む……………341へ　●下のフロアへ戻る……………251へ

336

そうこうしているうちに、ウィズローブの1匹が、ボクの存在に気づき、波動の魔法を放ってきた。
ボクも、慌てて矢で応戦する。が、矢はむなしく空を切り、反対に波動の魔法がボクの胸を襲った。
こ、こいつは、放っておいたほうがよさそうだ……。
ボクは、痛む胸を押さえてその場を離れ、西へ伸びるもとの通路へと戻った。

◆ハートをマイナス1して……………322へ

337

高台からハシゴを降りたボクは、青く輝くクリスタルスイッチをチラリと見た。
さっきはこれを、青いままにしておくのが正解だったが、今度はどうすればいいだろうか？

●青いままにしておく……………320へ　●赤に切りかえる……………277へ

338

奥のツボの下にあったボタンを押して北側の扉を開けると、中央に大きな溝のある部屋に出た。フックショットでしか渡れない溝の向こうには、宝箱が1つ置かれているが、溝のこちら側では、ミイラ男のモンスター、ギブドがお待ちかね。ギブドのすぐ脇にはツボが置かれているが、あれは宝箱の中身を取った後でこっち側に戻ってくるために、残しておかなければならない……。

ボクは迫りくるギブドを警戒しながら、部屋のようすを素早くチェック。ギブドには、剣でのぞむことを決める。

●35にチェックがあれば……362へ

●35にチェックがなければ……296へ

339

どうしようかかなり迷ったけれど、こっちに来てみて正解！ なんと南の突きあたりで、20ルピー入りの宝箱を発見。さっそくポケットにしまいこみ、高台を戻る。

◆7にチェックして

●8にチェックがあれば……234へ

●8にチェックがなければ……372へ

340

「ええと……、ここは確か、クリスタルスイッチのあった部屋だよな……」

●44にチェックがあれば……262へ

●44にチェックがなければ……194へ

341

ボクは廊下を、西の奥に向かって歩いていった。

●18にチェックがあれば……………………321へ
●18にチェックがなければ……………………392へ

342

やけどを負ってしまったが、猛火の攻撃で足もとの氷も完全に消えた。ボクは立ち上がると、再びアイスロッドを敵に放ち、ついに赤首の亀を倒した。力尽きた赤首は、唐突に爆発して消え去る。
「よぉし、次は青首だ!!」

◆41にチェックして……………………………………………233へ

343

ボクはポケットをさぐってボンバーメダルを取り出すと、それを高く掲げた。ボンバーは高級魔法なだけに、一度使うと魔法力がほとんどなくなってしまう。しかし、そんなことでためらっている余裕はなかった。
「食らえ〜〜〜〜〜〜っ!!」
とたんにボクの周囲に大爆発が起こり、部屋中が真っ赤に染まる。次の瞬間ピログースたちはすべて炎に焼かれ、灰になって水に消えた。
チリ〜ンという金属の音が、プールの底から聞こえてきたのは、そのときだった。音のしたほうを

見ると、なんとプールの底に、雫の模様の彫られた大きなカギが!!
「へえっ、ピログースを全部倒したら出るようになっていたんだな」
さっそくプールに潜ったボクは、大きなカギをゲット!!

◆カギリストの『雫のカギ』にチェックして

●9にチェックがあれば……318へ　●9にチェックがなければ……302へ

344

解読不能なアグニムの呪文が聞こえてきたと思った瞬間、部屋の中が真っ暗になった。同時に、暗闇の中に、司祭アグニムの体が、ボウッと光って浮かびあがる。驚いたことに、アグニムは3つの体に分かれて宙に浮いていた。
敵は、幻惑の術を使ってきたのだ!!
「ヒッヒッヒッ……、どれが本当の私か、わかりますか?」
じっと目をこらしてみても、本物と偽物の区別がつかない。いったい、どいつが……!?
アグニムを倒すには、直接攻撃では無理だ。ヤツの放ってくる魔法の球を、退魔の剣マスターソードで弾き、当て返す……。そのことは、光の世界での戦いですでに知っているが……。

●53にチェックがあれば……080へ　●53にチェックがなければ……131へ

345

扉の脇にあるボタンの前で、ソマリアの杖を振ってみた。と、杖の先からブロックが現れ、ボタンの上にうまく乗る。たちまち扉が、音をたてて開いた。

「やったね!!」

大満足でうなずくと、ボクは扉の奥へと足を踏み入れた。

●28にチェックがあれば……………223へ　●28にチェックがなければ……………………196へ

346

『……ンク……リンク、しっかりするのじゃ!!』

突然、サハスラーラ長老の声が頭の中に響き渡り、ボクは目を覚ました。気づくと、そこは村のダンジョンの入り口にあたる、ガーゴイル像のところで……。

「う……、ボクは……?」

やっと体を起こしたボクに、マジカルミラーを通して長老が語りかけてきた。

『やられたんじゃよ、ブラインドに。すんでのところで、ここまで移動してやったのはわしじゃ』

「そうでしたか……、すみません……」

すると、長老は『体力を回復してやろう』と言い、ボクに力を注ぎこんでくれた。たちまち、体の痛みが嘘のように消えてなくなる。

『さあリンク、今一度立ち向かうがよい。ブラインドは、ボスの部屋で待っておるぞ』

「はい！」
ボクは剣があることを確かめて立ち上がると、再度ボスの部屋へと向かった。
「ふははは……、尻尾を巻いて逃げたのかと思えば、懲りないヤツだ。まあいい！　いくぞ！」
ボスの部屋に走りこんできたボクを見ると、ブラインドは再び宙を舞い、いきなり2つに分裂した。
よぉし、今度こそは、確実に息の根を止めてやる!!

◆ハートをすべて回復させて

●右のブラインドを狙う**…………404へ**

●左のブラインドを狙う**…………219へ**

347

が、残念ながら、ボクは爆弾も持っていなかった。
「こりゃ、爆弾を先に見つけたほうがいいかもな……」

⬇216へ

348

あのクリスタルスイッチを赤にさえしとけばよかったんだよなぁ、もう……。
ボクは爆弾で壊した穴をくぐると、クリスタルスイッチを赤に切りかえ、急ぎ足で下のフロアへ戻った。案の定、さっきまで階段を取り囲むようにして立っていたブロックは、何ごともなかったかのように床の中に埋まっていた。
「……ったく、おまえらがいけないんだぞ！　苦労させて!!」

青いブロックを憎々しげに踏みしめて数歩歩いたボクは、そこが、幅2メートルほどの高台の上だということに気づいた。高台は、通路のように北方面へと伸びている。ただし、高台といっても下からの高さは2メートルほどで、通路のスタート地点には、下へ降りるハシゴもついていた。

「ええと……高台の通路には背の高い手すりがついてるから、途中で飛び降りることはできないか。となると、下へ降りるか、高台をこのまま進むかだな……」

●ハシゴで下へ降りる……………307へ
●高台を進む…………………………285へ

349

『リンク、よく聞いて。闇の魔王ガノンは、デスマウンテンの塔に結界を張り、その中で、光と闇の通り道が完全に開くときを待っているの……。そして、それは、もうすぐそこに迫っているわ』

ゼルダ姫のクリスタルは、ボクの頭上を漂いながら、そう話しかけてくる。

『ガノンが光の世界に出てしまったら、世界は破滅に追いやられるわ。そして、二度と捕えられなくなるでしょう。でも、この闇の世界という閉じられた空間でなら、どこへ逃げても必ず見つけることができるわ。さぁ、急いでガノンの塔へ。わたしたちが、塔の結界を破ります！ リンク、必ず平和を取り戻しましょうね……』

クリスタルに封じられたゼルダ姫は、それだけ言うと、ボクの体の中に入りこんできた。

娘たちの力で亀岩の外へ脱出したボクは、デスマウンテンの尾根を西へ戻り、ガノンの塔へと向かう。3階建てのガノンの塔の入り口には、相変わらず例の結界が張られていた。

⬇377へ

349

350

「ひょっとしたら、このカギが合うかもしれない……」
ボクは、さっき手に入れたばかりの雫のカギを、カギ穴に差しこんでみた。勘はズバリ命中！　カチャリと音をたてて雫のカギが回ると同時に、扉がきしみながら開く。
果たして、中にいたのは――!?

⬇240へ

351

とはいえ、ボクには鏡の盾という強い味方がいた。盾を左側に向けて構え、廊下を慎重に、東へと進んでいく。カランメイダのビームはさすがの威力を誇ったが、鏡の盾はそれを確実に弾きとばしてくれた。
カランメイダの廊下をしばらく進むと、行き止まりに地下への階段が見えてくる。

⬇144へ

352

攻撃は最大の防御なり！
ボクは剣を構えると、精神を集中させて力をためた。そして、迫りくるテールを回転斬りで攻撃！
「1匹、2匹……、3匹…………、4匹……、おまえでラストだ！」
ザシュ――――ッ!!
5匹のテールを倒すと、部屋の中が急に静かになる。と同時に、部屋のいちばん奥に、宝箱が出現

した。中に入っていたのは、燃え盛ることのできるファイアロッド!! 魔法力を消費するのであまりむだ使いはできないが、ここいちばんのときに威力を発揮してくれる、炎の杖だ。
ボクはファイアロッドを、すぐ取り出せるようブーツの右足側に差しこむと、ほかに何もないことを確認して部屋を出た。

◆アイテムリストの『ファイアロッド』にチェックして……………………335へ

353

東へ進むとロープは、この暗闇の空間の真ん中あたりに浮かぶ、孤島のような足場で途切れた。その足場には、ツボが無造作に置かれてあり、中には爆弾が1つ……。
「……この足場からさらに東へは行けないみたいだ。戻るか……」
爆弾を手に入れてあたりを確認したボクは、ロープを西へ戻り、本線に入ることにした。

◆爆弾リストに1つチェックして……………………………………053へ

354

ボクは剣に力をため、いつもの回転斬りで一気にケリをつけた。動きこそ素早く、爆弾などというとんでもないアイテムで攻撃してくるヌラヌールだが、体のもろさは見てのとおり。あっという間に退魔の剣の餌食となって消えてしまった。
すると、部屋の中央に宝箱が出現!! 中に入っていたのは、不気味な目玉の模様が彫りこまれた、

ボスの部屋を開けるための大きなカギだった。
　ボクは目玉のカギをポケットにしまうと、高台の通路を分かれ道まで戻り、北方面へ。

◆カギリストの『目玉のカギ』にチェックして
●29にチェックがあれば……………230へ　●29にチェックがなければ……………209へ

205

　ギブドを倒したボクは、フックショットで溝の向こうに渡り、宝箱から小さなカギを入手した。そうして、ロープのある広間まで戻ると、ソマリアの杖で再びブロックを作り、本線へ戻るため東へと向かう。間もなく、ロープは本線の南北に分かれるポイント分岐地点で止まった。ここを——？

◆カギリストの『小さなカギ』を1つチェックする。34にチェックして
●北へ行く……………396へ　●南へ行く……………408へ

206

　剣に力をためると、ボクは思いきって輪の中に飛びこみ、回転斬りをしかけた。ところが！
　カキ————ン!!
　剣は、大きな盾でいとも簡単に弾かれてしまう。おまけに、デグアモスの巨大な足で背中を踏みつけられ、ボクは命からがら輪を脱出した。
「はぁはぁ……、こ、こいつら……、いつまでお遊戯してる気だ……？」

◆ハートをマイナス1して……………………………398へ

357

ピログースの大群と戦うことを決めたボク。でも、はっきりいってまともに対戦したら、とても無傷ですむとは思えない……。

●ボンバーメダルで一気に倒す……………343へ　●1匹ずつ剣で倒す…………………400へ

358

西へ向かって移動を始めると、やがてロープは北方面へゆるやかにカーブし、しばらくした後、唐突に止まった。このまま本線を北へ行くか、それとも西へ行くかの分岐ポイントだ。

●本線を北へ行く……………………………396へ　●支線を西へ行く……………………………324へ

359

ひどく揺れる吊り橋を渡りきったボクは、対岸にあった階段から、下のフロアへと降りた。

●26にチェックがあれば…………………379へ　●26にチェックがなければ………………316へ

360

言葉をしゃべる木の前に立つと――。

「ああ、あんたか……。さっきさ、ピラミッドのほうへ、何か光るものが飛んでいったよ」

木はそれだけ言い、面倒くさそうに眠りはじめた。

「ちぇっ、そんなこと、わかってるよ……」

ボクはため息をつくと、その場を離れる。

●2人組を探す……245へ　●爆弾屋へ行ってみる……169へ
●はぐれ者の村を出る……330へ

361

さっき左の部屋で手に入れたカギを使って扉を開けると、奥にツボが1つだけポツンとある部屋に出た。部屋の右手には、さらに奥へと続く扉があるが……。

◆カギリストから『小さなカギ』を1つ消して
●ツボの中を探る……237へ　●扉から、さらに奥へ行く……211へ

362

が、ウサギとなったボクには、剣を握るための5本の指も、盾を支えるための腕の強靭な筋肉もなかった。残された手段といえば、ただひたすら逃げるだけ。が、文字どおり脱兎のごとく逃げるボクに、ギブドは容赦なく体当たりを食らわせてきた。その瞬間、変身ビームの影響が解ける。

「うぬ～、ギブドめ！　こっちが何もできないと思ったら大間違いだ!!」

ボクは大急ぎで剣と盾を装備すると、ギブドをギロリと睨みつけた。

◆ハートをマイナス1して……………………………………………………296へ

363

弾力のある甲羅に弾かれないよう、フックショットで相手の動きを止めることにしたボク。フックショットを手に狙いを定め、まずは手前のポーンに向けて――。

バシ――――ッ!!

作戦成功! フックショットの衝撃でポーンは一瞬、その動きを止める。そこを剣でとどめ!! この行動を3回繰り返して、ボクはようやく3匹のポーンを倒した。ちなみに、ポーン退治のごほうびとして出てきたのは、体力をそのダンジョン内に限り一時的に上げてくれるハートのかけらだった。

さっそく口に入れて、幸せをかみしめる。

◆ハートを1つ増やして……………………………………………………337へ

364

残念なことに、今も爆弾はない。ちなみに部屋の隅にあったツボも探ってみたが、やっぱり爆弾は入っていなかった。しかたなく、メデューサに注意しながら、部屋を出る。

「とにかく、爆弾を探すのが先決だ!」

⬇278へ

365

考えた末、ボクは高台を南へ行ってみることにした。

●7にチェックがあれば……………389へ　●7にチェックがなければ……………339へ

366

ボクは持っている魔法力を、ボンバーメダルにすべて注ぎこんだ。

「食らえ〜〜〜っ!!」

叫ぶと同時にメダルを高く掲げ、祈りを捧げる。たちまち周囲に爆発が起こり、爆風と炎が小目玉たちを包みこんだ。

数秒後、小目玉たちの全滅を確認したボクは、ホッと息を吐き出す。

⬇097へ

367

「よく考えてみれば、ここでは壁に穴も開けたし、ウィズローブも倒したんだっけ。ほかに気になるようなものもなかったしな……」

つまり、小さなカギを見つけなければ、この中央の通路に来ても意味がないってわけ。

⬇216へ

368

「ふっふっふっ……、今のボクは、さっきまでのボクとは一味違うのだ。……とりゃ〜っ!!」

パワーグラブを装備していたボクは、岩をむんずとつかむと、そのまま後方に引っぱる。ついでに完璧に出てきた大岩をヘラクレス並みの怪力で持ち上げ、床に叩きつけてこなごなに粉砕！
「へへへっ、どんなもんだい」
岩のかけらを踏みしめて、大岩のふさいでた穴をくぐってみると、そこにはなんと宝箱が。中に入っていたのは、小さなカギ！
「これで、行けなかった北側の扉の向こうへ行けるぞ！」
小さなカギを握りしめたボクは、周囲を見回してほかに何もないことを確認すると、急ぎ足でもとの部屋へと戻った。

◆カギリストの『小さなカギ』を1つチェックして……………………………331へ

369

が、よく考えてみれば、このAの部屋でやることはすべてやっていた。
「爆弾も手に入れたし、小さなカギも見つけたよな……。戻ろ……」
ボクはブロックから降りずにそのままロープを東へ行き、本線の分岐ポイントまで戻った。

●本線を北へ行く……………396へ　●本線を南へ行く……………408へ

370

向かって左の部屋――つまり、下からの階段にいちばん近い場所にある部屋に入る。

●19にチェックがあれば……………………402へ　●19にチェックがなければ……………………397へ

371

Cの扉がある足場へ渡ったボクは、小さなカギを使って扉を開けた。と、いきなり、亀型モンスターのパメットが、こちらに向けて突進してくる場面に出くわした。

「な、なんだ、なんだぁ～!?」

パメットは、堅い甲羅に身を包んだ、防御力を誇るモンスター。甲羅に守られている以上、剣や矢の攻撃は受けつけない。ファイアロッドも、たぶん無意味だろう。となると!?

◆カギリストから『小さなカギ』を1つ消して

●アイスロッドで凍らせてみる……………197へ　●マジックハンマーで叩いてみる……………030へ

372

高台をハシゴのところから東へ行き、扉に手をかけたボクは、そこに小さなカギ穴があるのを見つけた。

「ええと……、小さなカギって、持ってたっけ……?」

◆8にチェックして

●小さなカギがあれば……………………394へ　●小さなカギがなければ……………………323へ

373

奥のツボを持ち上げると、扉を開けるボタンがあった。となると、あっちの中央のツボには、何が隠されているんだろう……？　いや、ひょっとしたら空っぽかもしれないが……。

●中央のツボを調べる……………………382へ　●放っておく……………………338へ

374

西の足場を探ってみると、壁にヒビの入ったところがあることに気づいた。さっそく残った爆弾を使い、穴を開けて中へと入る。するとそこは、北側の高台に宝箱のあるあの部屋の、ハシゴやクリスタルスイッチがあるそばだった。

「なぁるほど、こうなってたわけだ!!」

ひとしきり感心すると、ボクは右手にあるハシゴを昇って高台の宝箱を開ける。中から出てきたのは、魔法力で敵を凍らせることのできるアイスロッドだ！　が、喜んでばかりもいられなかった。なんとアイスロッドを手にしたその瞬間、天井から3匹のポーンが、足場の上に降ってきたのだ。

ポーンは弾力のあるゴムのような甲羅を持つ、6本足の虫型モンスター。あまり頭はよくないので、ハシゴを降りてしまえば深追いはしてこないはずだが……。

◆アイテムリストの『アイスロッド』にチェック。爆弾リストのチェックを1つ消す。27にチェックして

●ポーンを無視してハシゴを降りる………337へ　●ポーンを倒す……………………329へ

375

さっき北の扉の奥で見つけた爆弾を使い、壁に穴を開けると、魔法使いモンスター、ウィズローブが2匹いる高台に出た。ウィズローブの放ってくる波動の魔法に気をつけながら周囲を探ると、高台の北側に、3メートルほど下がった通路があることに気づく。

◆爆弾リストのチェックを1つ消す。49にチェックして

◎48にチェックがあれば……………077へ　◎48にチェックがなければ……………291へ

376

「ようやく来たか!!」

ピラミッドの内部に作られた広間で、ガノンはボクの訪れを待っていた。広間の四隅には灯篭があり、その中で火が赤々と燃えている。

ダークブルーの巨大な体躯の上に鋭い牙を持つ醜い獣の顔を乗せた邪悪の王は、大きな杖を右手に抱え、不敵な笑みをもらした。

「キサマのような小僧に、ここまで追いつめられるとは思わなかったぞ！　我が分身、闇の司祭アグニムを二度までも退けるとはな……」

「やはり、アグニムはおまえが作り出した分身だったのか!?」

「ふはは……、そんなことはどうでもよかろう!?」

ボクの問いにガノンは顔を歪めて笑うと、高らかに言い放つ。

「なぜなら、キサマはここで消えるからだ！　トライフォースは誰にも渡さぬ！　さぁ、命が惜しくなければ、かかってくるがよい!!」
　同時に、ガノンの右手が、杖をぐるぐると回しはじめた。

●弓矢で攻撃する……………………155へ　●回転斬りで攻撃する……………………041へ

377

『リンク、用意はいい？　では、みなさん、始めましょう……』
　ゼルダ姫が、そう声をかけると、突然、ボクの体の中から7つのクリスタルが浮き上がった。そして、ゼルダ姫のクリスタルを中心に輪を描き、結界の上をくるくると回りはじめる。
　と、次の瞬間、7つのクリスタルから一斉に、光輝く鱗粉のようなものが放たれた。光の粉は、結界のあたりで集結し、ひときわ強い光を放って、やがて消える。
『さぁ、リンク。これで結界は解けたわ。あとは、勇者であるあなたに託します』
『勇者の行く道が、トライフォースへと導かれますように……』
　ゼルダ姫と娘たちは、口々に祈りの言葉を捧げると、再びボクの体の中へと収まった。ボクは、ガノンの塔への第一歩を踏み出すため、扉にゆっくりと手をかける。ゼルダ姫の言うとおり、あれほど強固だった結界はあとかたもなくなり、ボクは何に阻まれることもなく塔の中へ入ることができた。

⬇264へ

378

ボクはクルリと踵を返すと、テールのいるこの部屋から脱出しようと試みた。が、足の速いテールから逃げようとするなんて、無謀な話だった。ボクの意図を見抜いたらしいテールの1匹が、ボクに向かって猛ダッシュで接近！　力まかせに体当たりを食らわしてくる!!
「いて〜っ！　こ、このぉ!!　あったまきた!!」

◆ハートをマイナス1して……………………352へ

379

下のフロアへ降りたボクは、階段を取り囲むようにある青いブロックが、床に埋めこまれているのを見た。
さっきのクリスタルスイッチを赤に切りかえておいて、よかったというわけだ。
「さぁてと……、ん？」
青いブロックを踏みしめて数歩歩いたボクは、そこが、幅2メートルほどの高台の上だということに気づいた。
高台は、通路のように北方面へと伸びている。
ただし、高台といっても下からの高さは2メートルほどで、通路のスタート地点には、下へ降りるハシゴもついていた。
「ええと……、高台の通路には背の高い手すりがついてるから、途中で飛び降りることはできないか。

となると、下へ降りるか、高台をこのまま進むかだな……」

●ハシゴで下へ降りる……………307へ　●高台を進む……………285へ

380

「でも、さっきこの部屋にきたときは、宝箱なんてなかったよなぁ……？」
不思議なこともあるもんだと首を傾げたボクだったが、ふと思い出して手を打つ。
「あ、そういえば、さっきウィズローブを倒したとき、変な音がしたっけ。あれ、この宝箱が出現した音だったのかもな、うん」
納得したボクは、ツボにフックショットを打ちこんで溝の向こうに戻り、部屋の外へ出た。

◆カギリストの『小さなカギ』を1つチェックする。52にチェックして……………216へ

381

フックショットのあったプールの部屋の扉を1つ隔てた向こう側は、北へ伸びる通路が1本あるだけだった。通路の途中に大きく深い穴が開いていて、穴のこちら側と向こう側に木のクイが1本ずつ立てられている。奥に見えるのは、立派な彫刻が施された扉。ボクはそれを見てとると、向こう側のクイにフックショットを食いこませて、一気に穴を渡った。が——。
「あれぇ……？　この扉、カギがかかっているぞ。ずいぶん大きなカギ穴だなぁ……」

●雫のカギがあれば……………350へ　●雫のカギがなければ……………306へ

302

中央のツボを持ち上げると、いきなり星型の黄色い光がボクにまとわりついた。とたんに、装備していた剣や盾が、ガランと下に落ちる。しかし、特に痛みは感じない。
「なんだったんだ、今の……。え？　え？　うわ～～～～っ!?」
何が起こったのかと自分の体をチェックしたボクは、自分の腕が毛むくじゃらなことに気づいた。いや、腕だけじゃない、足も顔も……。しかも耳などはピンと大きく上に伸びている。まるで――。
「な、なんでボク、ウサギになっちゃったの～～～～!?」
よりによってボクは、ダンジョンの中でウサギに変身してしまったのだ。このままじゃ戦えない。
娘たちの説明によると、これは変身ビームというもので、勇者の本性――つまり、マジカルミラーなしでこの世界に来た場合の姿にしてしまうらしい。そのうちもとに戻るだろうという言葉を信じ、ボクはとりあえず落とした武器を胸に抱える。

◆35にチェックして……………………………………338へ

303

小さなカギを使って扉を開くと、長い吊り橋のある薄暗い部屋に出た。吊り橋は、今ボクの立っている足場から、一直線に南へと伸び、対岸にある下への階段へとつながっている。ちなみに吊り橋には手すりがついていて、ごていねいにも下へ落ちないようになっていた。
「う～ん、安全対策はバッチリだな……。あれ？」

足場にもある落下防止の柵から身を乗り出して下を覗いていたボクは、この足場が北の壁から西の壁に接して逆L字型につながっていることに気づいた。
とはいえ、目を凝らして西の足場の先を見ても、何もありそうにはないが……。

◆カギリストから『小さなカギ』を1つ消して
●足場を西の方へ行ってみる……………374へ
●吊り橋を渡る………………………………359へ

384

扉の奥には、上のフロアへと進む階段があった。階段を取り囲むように青いブロックが並んでいたが、さっきクリスタルスイッチを切りかえておいたおかげで、床の下に下がっている。
「やっぱり、スイッチを赤にしといて正解だったんだ」
ボクはほっと息を吐き出すと、階段を上へと昇っていった。

⬇057へ

385

あいにく、小さなカギの持ち合わせはない。
「しかたない。ほかを先にまわろう……」

⬇335へ

386

が、ボクは、爆弾を持っていなかった。途方に暮れて部屋の中をもう一度見回すと、隅にツボが1

つ置かれていることに気づく。
「でもなぁ……、あの中に爆弾が入ってるなんて、そんな都合のいいことないような気がする……」
こうしている間にも、メデューサは次々と火炎弾を放ってくる。さっさとこの部屋を出て、爆弾を探しにいったほうがいいかもしれない……。

●**ツボを探ってみる**……………………**154へ**　●**部屋を出る**……………………**278へ**

307

西へ曲がってしばらく進むと、間もなく広い部屋に出た。が、部屋の中では、爆弾を落として攻撃するヌラヌールが3匹お待ちかね。ナメクジのような体をしたヤツらは、意外に速いスピードで移動しながら、部屋の中に爆弾を巻き散らしている。
「や、やだなー。見なかったことにしちゃおーかな」
幸い部屋の中にはヌラヌールと、次々と爆発する爆弾以外には何もないが……。

●**逃げる**……………………**325へ**　●**ヌラヌールを倒す**……………………**391へ**

308

さっきは引かなかった右側のレバー。あれがどうも怪しい。
「よし、今度は引くぞ!」
そう決意すると、ボクは北の扉の奥へ入った。さっきと同じように扉が閉まるが、とりあえず左の

レバーを引いて、扉が開くことだけ確認しておく。そして――。

⬇168へ

389

が、行く手にあったのは、すでに中身のなくなった宝箱のみ。
「そ、そっか……、ここで20ルピー拾ったんだもんな……。小さなカギなんてないの知ってたのに」
なんでこっちに来たんだろう、ボク？　……水路へ戻ろうっと……。

⬇234へ

390

ボクは、南の部屋の奥で手に入れた爆弾を取り出すと、壁のビビの部分にセットした。数秒後、爆弾は大音響とともに爆発し、壁に大きな穴を開ける。
穴の向こう側は、青いクリスタルスイッチと、2列の色着きブロックの奥に宝箱がある部屋だった。ブロックは手前が赤、奥が青で、クリスタルスイッチはその間にある。つまり、下がっている赤ブロックを踏み越えてクリスタルスイッチを赤にすれば、青ブロックが下がって宝箱までたどりつける。帰るときはその逆に、下がっている青ブロックの向こうへ行き、スイッチを青にすれば赤ブロックはもとどおり下がる、というわけだ。
そういうふうにして宝箱から小さなカギを入手し、部屋を出ようとして、ボクはふと考えた。
ひょっとしたらこのクリスタルスイッチは、別のところにあるブロックと連動しているかもしれない。今スイッチは青に戻してあるが、矢を使って赤くしておいたほうがいいだろうか？　ちなみに、

赤ブロックの隙間は、スイッチとうまく重なっていないので、一度スイッチを赤にしてしまえば、青に戻すには、爆弾を投げこまなくてはならなくなる。
「う～ん……、爆弾はもうないし、それを考えると、青のままにしておいたほうがいいかな？」

◆爆弾リストから1つ消す。カギリストの『小さなカギ』を1つチェックする。43にチェックして

●矢で赤にする…………………224へ　●青のままにしておく…………………235へ

391

ボクは足もとの爆弾に注意しながら、慎重にヌラヌールたちへと近づいた。

●回転斬りで一気に倒す…………354へ　●フックショットで動きを止める…………292へ

392

廊下を奥へと進むと、ちょっとした広間に出た。正面にあたる広間の西には、廊下と同じような窓があり、太陽の光が差しこんでいる。光は、広間の中央にあるひび割れた床を、まるで狙っているかのように照らしていた。
「ん……、ちょっと待てよ……。この下は、確かボスの部屋だったよなぁ？　で、ひび割れた床と差しこむ光……。これは、ひょっとするとひょっとするかも……!!」
ボクは思いついて爆弾を取り出すと、床のひび割れた部分にセットしてみた。数秒後に床の一部分が崩れ、太陽の光は、下のボスの部屋にまで差しこむ。

「やった！　思ったとおりだ。これで、ボスが姿を現わすかもしれないぞ！」

◆爆弾リストのチェックを1つ消す。18にチェックして……………………335へ

393

3階にたどりつくと、急に目の前が真っ暗になった。暗闇に目が慣れるまでじっとしてると、やがてここが、亀岩と同じようにロープの張りめぐらされた空間だとわかる。ボクが今立っているのは、ほんの小さな足場だ。

ようやくそれを確認すると、ボクはソマリアの杖で移動用ブロックを作り、ロープを東の方角へと伝いはじめた。と、すぐに東への直進ロープと、南北に伸びるロープとの分岐に差しかかる。

「どうやら、この南北に伸びているのが、この空間の内周をめぐる本線だな。……すると、この東へのロープはどこへ行くんだろう……？」

●東へ行く……………353へ　●本線を回る……………053へ

394

さっき水路で拾った小さなカギを使い、ボクは扉を開けた。すると中は、またもやプールの部屋。しかも、水棲モンスターのピログースが、数えきれないぐらいどっさりと待ちかまえていた。

部屋の東側に別の扉があったので、無視して行ってしまおうとも考えたけど、目を凝らしてプールの底を見てみると、何やらスイッチのようなものがあることに気づく。

「……こ、こんなにたくさんの敵、倒せるかな……!?」

◆カギリストから『小さなカギ』を1つ消して

●とにかく戦う……………………357へ　●戦いを避けてスイッチに向かう……………302へ

395

Aの扉を開けると、北側にもう1つの扉がある部屋に出た。部屋の中には、手前から奥にかけて3つのツボが並んでいる。試しに、手前にあるツボを探ってみると、なんと中から爆弾が2つ出てきた。爆弾を手に入れてさらに奥の部屋へ行こうとしたが、北側の扉は手では開かないようす。

「……ってことは、扉を開けるための何かが、ツボの下に隠されていると見た!!」

ボクは、残った2つのツボに目をやった。

◆爆弾リストに2つチェックして

●中央のツボの下を調べる…………319へ　●奥のツボの下を調べる……………………373へ

396

北へ進むとロープは、東へカーブ。しばらく進むとポイントで一時停止した。このまま本線を東へ行くか、それとも放射状に伸びる支線を北へ行くか?

●本線を東へ……………………210へ　●支線を北へ……………………………192へ

299

と、部屋の隅に、乗っかって押すタイプのスイッチがあることに気づいた。部屋の奥にあたる南側に扉があったので、てっきりこれを開くためのものかと思ったら意外や意外、ボクがスイッチを押したとたん、部屋の中央に小さなカギ入りの宝箱が出現!

ちなみに奥の部屋へは、カギなしでも入れるようだったので、ボクは小さなカギをポケットにしまうと、さらに奥へと歩みを進める。ところが、油断は禁物だった。なんと奥の部屋には、イモムシのようなモンスター、テールが、5匹もはいずり回っていたのだ!! テールは、とてつもなく動きの速い敵。できれば魔法で、一気にカタをつけておきたいところだ。

◆カギリストの『小さなカギ』を1つチェックする。19にチェックして

●16にチェックがあれば…………300へ ●16にチェックがなければ…………327へ

300

何を考えているのかわからないデグアモスたちのようすを見るため、部屋の隅でじっとしていると、やがてヤツらは部屋の奥に横一列に並び、まっすぐ行進を始めた。今だ!!

ボクは素早く弓矢を取り出すと、端の1匹に向けて矢を放つ。2回ほど矢を当てると、そいつは爆発を起こし、かき消えた。同時に、残った5匹のデグアモスたちは、再び輪になって回りはじめる。

ボクは、敵が輪になっているときは部屋の隅でじっとし、一列に並ぶとすかさず弓を引く……という行動を繰り返し、5匹のデグアモスを退治した。これで、残りはあと1匹。

⬇276へ

399

ボクは剣に力をためると、最初に接近してきたポーンに回転斬りをしかけた。が——。
ポ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ン!!
剣が敵の甲羅に触れた瞬間、文字通り大きく弾かれる。さらに、バランスを崩したボクに向けて、別のポーンがポ〜〜〜〜〜ンと体当たり!!
「くうっ……、これがポーンの名前の由来だったのか……」
なんてことは、この際どうでもいい!!

◆ハートをマイナス1して……………………………………363へ

400

「よぉし、どこからでもかかってこい!!」
ボクはマスターソードを掲げると、油断なく構えた。そして力をためると、近寄ってきたピログースたちに向かって回転斬りを放つ! が——!!
「いてっ! いて、いて〜っ!!」
所詮は多勢に無勢。近づいてきた数匹を倒したまではよかったが、ほかのピログースたちの集中攻撃に合い、あえなく一時敗退。
「くっ……、もう、あったまきた! こうなったら、ボンバーメダルで全滅させてやるっ!!」

◆ハートをマイナス1して……………………………………343へ

401

「でも、モンスターを倒すでもなく、こんなにあっさりと小さなカギが手に入るなんて……」
何か変だと首を傾げたボクだったが、ふと思い出して手を打つ。
「あ、そういえば、さっきウィズローブを倒したとき、変な音がしたっけ。ひょっとしたら、この宝箱が出現した音だったのかもな、うん」
納得したボクは、ツボにフックショットを打ちこんで溝の向こうに戻り、部屋の外へ出た。

◆カギリストの『小さなカギ』を1つチェックする。52にチェックして……………216へ

402

が、特に前と変わっているようすはなかった。
「第一、こっちの部屋は全部攻略してるんだよな。ファイアロッドも手に入れたし……」**⬇335へ**

403

さっきは爆弾がなくて、ヒビの入った壁を壊せなかったが……。

●爆弾があれば……………390へ　●爆弾がなければ……………364へ

404

「おまえが本物だ!!」

ボクは剣に力をためると、迷うことなく右側のブラインドに突撃した。
ザシュ――――ッ!!
剣を持つ腕に、確かな手応えが伝わってくる。
「……影写しの術、見破った!!」
ボクはそう叫ぶと、さらに剣を一閃!!
「ま、まさか……、こんな小僧に……。ぐふっ……!!」
退魔の剣マスターソードの聖なる刃を受けたボス、ブラインドは、それだけ言い残すと力尽きた。
後には、ハートの器が1つ……。そして、ボクがそれを手にすると――。

⬇273へ

405

一息ついたボクに向けて、赤首の亀が炎を放ってきた。
「おっと！　そう簡単にやられてたまるか!!」
ボクは炎の攻撃を素早くよけると、アイスロッドを取り出した。炎には、水と相場が決まってる。
「食らえ～～～～っ」
赤首が再攻撃しようと近づいてきたところを狙い、ボクはアイスロッドを連射させた。

●40にチェックがあれば……………199へ
●40にチェックがなければ…………270へ

406

『リンク……、リンク、しっかりするのじゃ……』
突然、マジカルミラーからサハスラーラ長老の声が聞こえ、ボクはハッと我に返った。
「う……、こ、ここは……」
『ガノンの塔の外じゃよ。アグニムにとどめをうたれる寸前、わしの力でここまで飛ばしたのじゃ』
ようやくはっきりした頭の中に、アグニムにやられた直後の屈辱が蘇ってきた。
『さぁ、わしの力で体力と魔法力を回復してやろう……』
そう長老が言うと同時に、ボクの体の中に力が蘇ってくる。ボクは長老に礼を述べると、再びガノンの塔に入り、司祭アグニムの待つ3階の奥の部屋へと急いだ。
「ヒッヒッヒッ……、尻尾を巻いて逃げたのかと思っていましたが、わざわざ倒されに戻ってくるとは物好きな。まぁよいでしょう。さぁ、今度こそ死になさい!!」
ボクが戻ってきたのを見ると、アグニムは再び呪文を唱えた。同時にあたりが真っ暗になり、アグニムの体が3つに分離する。
まずは、本物を見分けなければ!!

◆ハートをすべて回復させて……………………………………131へ

407

「くっ……、もう一度!!」

ガノンが再び姿を消すのを見届けたボクは、今度は場所を移動せず、その場で剣を振るった。と!!

ザシュウ――――――ッ!!

なんと、みごとヒット！　ガノンは、ボクが回転斬りをしたその瞬間のその場所に、おろかにも姿を現わしたのだった。

「ぐわっ!!」

うめき声をあげ、ガノンの体が硬直した。同時に、さっきまでダークブルーだった体の色が、水色へと変色する。

●銀の矢があれば……………………146へ　**●銀の矢がなければ……………………055へ**

408

南に向かうと、やがて本線のロープは東へとカーブ。ロープに沿ってしばらく進むと、またもやポイントに差しかかった。

本線をこのまま東へ行くか、それとも南へ曲がるかだが……。

●東へ行く……………………136へ　**●南へ曲がる……………………305へ**

409

ところが、さらに意外なことに、ボスの部屋はもぬけのからだった。

「へっ、なんで？　……ひょっとして、奇襲攻撃をかけようとして隠れているとか……？」

思いついてボクは、ボスの部屋を隅から隅までじっくりと確認してまわる。ところが、予想に反して、本当にボスはおろか、敵の姿さえもなかった。

「ど、どっか行っちゃったのかな……。トイレとか……、まさかね！」

ここでじっとボスの訪れを待っているのもバカバカしく思い、ボクは部屋を出ると、隣の大きな部屋の東の隅にある階段から上へと昇ることにした。上の階へ行くと、窓のある廊下が、まっすぐ伸びていた。廊下の途中には部屋が2つ、窓と向かい合うようにして並んでいる。

「あ、なるほどねぇ。ここって、あの石造りの家の中なんだ」

窓から外を見ると、はぐれ者の村の北のはずれが見えた。察するにここは、村に入ってすぐの場所にあった、半分地中に埋まっていた、あの家というわけだ。

「さて……と」

ボクは、窓を覗いたときに手についた埃を払うと、コンパスを見ながらフロアの造りを確認した。

「ふんふん……、部屋はどっちも、南に向かって伸びてるみたいだな。う〜ん、部屋に入るか、それとも廊下を西の奥へ進むか……」

●向かって右の部屋に入る……………288へ

●向かって左の部屋に入る……………370へ

●廊下を奥へ進む…………………………341へ

410

穴の奥には小さな祭壇があり、その上に黄金色に輝く正三角体——トライフォースが浮かんでいた。

『ようこそ、リンクよ。私はトライフォースの精です……』

まばゆいばかりの輝きを放つ黄金の正三角体は、ボクの頭の中に直接語りかけてきた。

『トライフォースは神が与えし〝黄金の力〟。触れた者の心の中にある願いを叶えます。心正しき者が触れれば正しき願いを、悪しき者が触れれば悪しき願いを……。そして、その者の願いが強ければ強いほど、トライフォースはその力を発揮するのです』

「……そして、ガノンの願いは、とてつもなく強かった……？」

ボクの問いにうなずくように、ひときわ明るく輝くと、トライフォースは言葉を続ける。

『盗賊ガノンドロフ――邪悪の王ガノンの願いは、世界を手にすることでした。その悪しき願いは、この聖地を闇の世界に変えてしまったのです。そして、ここで力を貯えたガノンは、自分の願いを叶えるために、光の世界へ現れるつもりでした。しかし……』

トライフォースはそこまで語ると、一旦言葉を切った。そして、光輝きながら、ゆっくりとボクに近づいてくる。

『……トライフォースに触れたガノンが倒れた今、闇の世界も消えゆくことでしょう。トライフォースは新たな持ち主を待っています。〝黄金の力〟は、今、あなたの手にあるのです。さぁ、触れてごらんなさい。あなたの心にある願いのままに……』

ボクの心にある願い……？　この世界さえ平和になれば、それでいいと思っていた。けれど、願い……、もし本当にそれが叶うなら……。

ボクは1つの願いを心に決めると、ゆっくりとトライフォースに手を差し伸べた。**⬇エピローグへ**

エピローグ

「それじゃあ、おじさん、昼食までには戻れると思うから……。行ってきます！」
ボクはおじさんにそう声をかけると、カカリコ村の自分の家を後にした。目指すは、村の北側にある大きな森。その森のいちばん奥にある祭壇が最終的な目的地だ。
空は気持ちよく晴れているし、さわやかな風も吹いている。通りすぎていく人たちに朝の挨拶をしながら風見鶏の広場に向かうと、そこでは4人の村人が、ボクを待っていてくれた。
「おはよう、リンク。気持ちのいい朝だねぇ。さっき起きたばかりなのに、もう眠くて……」
まず、のんびりした声で話しかけてきたのは、コロコロ太ったトビーだった。続いてその横にいるキツネみたいな顔つきのスキッパーが「おまえは、緊張感が足りないんだよ」と、トビーを睨む。すると、その向かい側にいた少年のトーマスがクスリと笑い、隣の老人とともにボクに歩み寄ってきた。
「はい、リンク。オカリナをどうぞ。風見鶏を使いたいなら、いつでも言ってよね。だって、一度はキミにあげたものだし、なによりキミは、ボクと父さんの恩人だもの」
「そうじゃよ、リンク。もう帰ってこないとあきらめていた息子が帰ってきてくれたんじゃ。わしは、リンクに感謝してもしきれないぐらいじゃよ」
「そんな……大げさだよ。ボクは当然のことをしただけなんだからさ……」
てれくさくなってボクは、トーマスの手からオカリナを受け取ると、急いで風見鶏を呼び出した。

森に行きたいと告げたボクの言葉を理解して、鶏は大空へと舞い上がる。
「それじゃあ、みんな、見送ってくれてありがとう！　あとは任せてくれるね、行ってきます」
せめて、今回のことの終わりをしっかり見届けたいと集まってくれた4人の村人に手を振り、ボクは森へ向けて一気に移動した。

★

森の祭壇では、先に到着していたゼルダ姫と6人の娘たちが、ボクを出迎えてくれた。
ボクは神妙な顔つきで祭壇に近づき、ゼルダ姫と娘たちを見回す。そして、全員がうなずくのを確認すると、ゆっくりと腰に手をかけ、鞘から1本の剣を抜きとった。
闇の世界をボクと一緒に戦い抜いた剣——マスターソードは、木々の間から差しこむ木漏れ日を受けて、きらきらと輝きを増す。
「さよなら……」
ボクは別れの言葉を告げると祭壇を上り、そのてっぺんにある穴へと、思い切ってマスターソードを突きさした。同時に、ゼルダ姫と娘たちの呪文を唱える声が、あたりに響きわたる。
「トライフォースよ……、マスターソードに永遠の安らぎを……」
その声が終わると同時に、マスターソードは輝きをなくし、祭壇と同じ灰色の石へと変化を遂げた。
「封印は終わりました……。リンク、マスターソードは眠りについたわ。この世界に、新たな勇者が必要とされる日までの、永い永い眠りよ」
「そんな日は、もう永遠にこないといいね……」

移動の術を使ったのか、いつの間にか6人の娘たちはその場を去り、ボクはゼルダ姫と2人で肩を並べ、祈るような気持ちでマスターソードに見入っていた。が、やがてどちらからともなく微笑みあい、祭壇にクルリと背を向ける。

「さ、もう行きましょう、リンク!」

「では、姫。ハイラル城までお送りいたします。空の旅といきましょう!!」

ボクはおどけるようにそう言うと、オカリナを取り出して口に当てた。間もなく、木々の間から鶏が舞い降りてき、ボクとゼルダ姫を乗せると、平和なハイラルの空へ悠々と飛び立った。

★

封印戦争からしばらく後、ハイラルの世界を再び闇が覆った。邪悪の王ガノンによってもたらされた闇は、今にもハイラルを飲みこもうとしていた。

しかし、そのときマスターソードを掲げた勇者が現れ、ガノンへと勇敢に挑んだ。勇者はみごと勝利をおさめ、ガノンが手にしていた黄金の正三角体トライフォースを取り戻した。

トライフォースは勇者に語った。願いのままに触れてみよと。

そこで勇者は意を決し、トライフォースへと手を差し伸べた。勇者が願ったこと、それは、ガノンによって失われた聖地とハイラルにあるすべての命の、完全なる復活であった。

森の奥深くにひっそりとたたずむ、マスターソードの祭壇には、今、こう記されている。

THE MASTERSWORD SLEEPS AGAIN FOREVER と――。

ハイラル歴史書「勇者」の項より抜粋

小学館の任天堂公式ガイドブック

NINTENDO64

007ゴールデンアイ

詳細ＭＡＰで、００７の動きを紹介。むだのない動きで、全ミッション・パーフェクトクリアへの最短ルートが一目瞭然!!　仲間と一緒に遊べる「対戦プレイ」モードの必勝法も収録。友だちを、アッといわせてやろう!!

1.000円+税 A5判 112ページ ISBN4-09-102602-8

NINTENDO64

スターフォックス64

全16ステージ「完全攻略ＭＡＰ」で、それぞれのステージを徹底攻略!!　勲章獲得法の秘密もすべて紹介しているので、勲章を全部集めたい人にもぴったり。対ボス戦ももちろん詳細解説。巻末の開発者インタビューも見逃せない!!

952円+税 B5判 136ページ ISBN4-09-102585-4

NINTENDO64

ブラストドーザー

全57コース完全カラーＭＡＰで､完璧クリア!!　プラチナメダル獲得も夢じゃない!!　マシン別特性を生かした攻略法とマシン操縦テクニックも網羅。パイロットとしての最高の名誉、『まいりました』を手に入れられる１冊!!

952円+税 B5判 88ページ ISBN4-09-102583-8

NINTENDO64

マリオカート64

ライバルをぶっちぎれ！　いかに速く走るかを徹底追求した「ドリフト＆ミニターボ講座」､友だちをアツくさせる「対戦ムッキーテクニック」､そして１分17秒台を可能にする「コース別徹底攻略」など、情報満載完璧ガイド。

854円+税 B5判 80ページ ISBN4-09-102571-4

SHOGAKUKAN **GAME BOOK**

ゼルダの伝説

「神々のトライフォース」より

1997年12月20日初版第一刷発行　（検印廃止）

構成・文 ——— エムズカンパニー＋前川陽子
装幀 ——— Meta Maniera コバヤシユウイチ
本文・イラスト ——— 檜垣賢一
口絵・イラスト ——— SUPER SONIC D. D.
編集 ——— 福田純子
高山邦雄
製版 ——— 株式会社昭和ブライト
監修・協力 ——— 任天堂株式会社 ©1991 Nintendo
発行人 ——— 田辺茂男
印刷所 ——— 図書印刷株式会社 Printed in Japan
発行所 ——— 株式会社小学館
〒101-01 東京都千代田区一ツ橋2-3-1
振替（00180-1-200）
TEL ——— 編集（03）3230-5395
販売（03）3230-5749

ISBN4-09-102681-8

SHOGAKUKAN **GAME BOOK**

ゼルダの伝説

予想に反して、ボスはおろかザコ敵の姿さえなかった。ボクは部屋を出ると、隣の大きな部屋の東の隅にある階段から上へと昇ることにした。上の階へ行くと、窓のある廊下が、まっすぐ伸びていた。廊下の途中には部屋が2つ、窓と向かい合うようにして並んでいる。
「ふんふん……、部屋はどっちも、南に向かって伸びているみたいだな。う〜ん、部屋に入るか、それとも廊下を西の奥へ進むか……」

● 向かって右の部屋に入る……………………288へ
● 向かって左の部屋に入る……………………370へ
● 廊下を奥へ進む………………………………341へ

（シーン「409」より）

SHOGAKUKAN
GAME
BOOK

ゼルダの伝説

ISBN4-09-102681-8

C9476 ¥648E

9784091026811

定価：本体648円＋税

雑誌 69914－81

1929476006486